
僕のあれで、それな物語

KOF

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕のであれで、それな物語

【Nコード】

N9779R

【作者名】

KOF

【あらすじ】

一人の少年、爾宮久遠。その少年は諦観で構成されていて、いっぱい、めいいっぱい諦めてきた。そんな少年と、天才の物語。「幼馴染が美少女？バイト先の先輩が理不尽？おねいさんは超越者？中には白髪美女？ロリな少女は？考えるな、諦める」「ウジ虫、偉そうだぞ」「……すんません」

とーじょーじんぶつ

爾宮そのみや 久遠くおん (16)

性格：めんどくさがり

見た目：黒髪黒眼のテンパ。175とそれなり

口癖：ああ、めんど

備考：あれだ、それな主人公

東雲しのめ 忍迺しの (16)

性格：Sで、どS

見た目：こげ茶の髪の短めとこげ茶の眼。 150周辺

口癖：死ぬ、ウジ虫

備考：知能最強・サヴァン？

新羅にいし 仄己ほのみ (16)

性格：理不尽でやべー

見た目：銀髪銀眼。ロング。165ほど。

口癖：はい、死刑

備考：身体能力最強

岬 みさき 千里 せんり (17)

性格：冷酷無比

見た目：黒髪黒眼。主人公と違って眼が死んでない。ハト眼鏡の似合う文学少女っぽい人

口癖：ミーは〜。

備考：ESPとPKどちらも使える超越者

シキ (?)

性格：明るい、元気

見た目：白髪紅眼。美しさが半端ない。魅力チート。

口癖：くっす

備考：ただの式神だが神の恩恵により、階級は高位ほどに。

フラン・エグゾディア

性格：温和

見た目：金髪碧眼。イケメンすぎてやばい。185ほど

備考：戦闘能力は神をも凌ぐ

クラウド・オシリス

性格：落ちついている

見た目：紅髪ポニーテール。蒼眼が蠱惑的なおねいさん。165ほど。

備考：ギルド職員。かなりの重役。ランクはA

クロエ・アスクレピオス

性格：強い信念と不安の共生

見た目：藤色のふわふわとした髪。藤色の瞳。140ほど。

備考：弦術師見習い。才能はある。

クラム・アスクレピオス

不明

備考：【ラグナロク】時に歳殺神に戦いを挑み陰気にあてられる？

「話…あ、めんど（前書き）」

やあ、僕だよ

king of komonoあむためKOFFです！

では、とりあえず、どうぞ！

「話…ああ、めんど」

「ああ、めんど」

僕の口癖だった。なんでこんなのが口癖になったのかは分からない。気づかないうちに口癖になっていた。

注目すべき点は一つ、何故僕がいきなりこんな聞いた人の気が滅入る様な事を吐いたのかということ

「ああん？ 何が面倒だった？ 久遠？」

そう、不良に絡まれています。これもなんでなのかということ、なんとなく？ いやいや、必然？ それとも偶然？

まあ、必然なのだろう。だって……僕が凡人だから。

「まあまあ、一つ落ちつくことが大切だよ？ えっと……ごめんなさい」

よく思ったら、名前知らないや。けど相手は知っている？ なんだ？ まさか僕って有名人？ いや、幽迷人の間違いだろう。

「このクソボケですが。こいつがあのお東雲 忍廻の幼なじみってだけでも腹がたつのに、まったくもってうぜえ奴だ」

こらこら、そんなこと当人の前で言うてはいかんよ？ 僕の心が激しく傷つくじゃないか。

「で？ なんで僕を呼びだしたわけ？ 忍廻のことならその人に聞こうね？ 僕なんかただの幼なじみで最近じゃ喋ったりすること

もめつたに滅つたんだし、男なら真正面からぶつかって、砕けろつて」

「俺が玉砕する前提か！」

いや、無理でしょう？ 相手は天才様様ですよ？ 美少女でございますよ？ ほら、考えるな感じろつて言葉があるじゃん？ その言葉通りに動いてみるつて、世界が崩壊するからさ。

「だから、なんで僕を呼びだしたんだい？ めんどいからさつさと用件を済ましてほしいんだけど？」

「なら、死にやがれ！」

ドスツガツガツと、腹や顔面を蹴られたり殴られたりする。アスファルト、硬いな。

喧嘩慣れしているわけでもなく、人より筋力があるわけでもなく、オーラとかが使えるわけでもなく、ただただ凡人な僕は、やられるのが分かっているんだから抵抗せずにぼっこぼこにされた。

僕自身、別にどうなるうが構わないがね？けど、死ぬのが怖いから、こつこつやつて高校生活をぼーっと過ごしているだけ。

分かるよね？この虚無感。別に頑張るのが嫌いなわけでもないし、感情に欠落した部分があるわけでもない。ただ少し、人より諦めるのが速いだけのただの高校二年生。になつたばかりの男の子。

「はは、普通にイタイや」

少し口の中とか切つちやつたかな？血の味とかするし、舌で口内を探検してみるとなんかざらざらした感触があるし、これは確実に

口の中が切れているだろう。

いきなり顔面殴って、そこから腹を何回も蹴られたからちよつと喉の奥からも血が出てくる。

「あゝ、どうしよっかな。ああ、めんど」

雲はいいよな。漂って消えてまた漂って。そうだな、次の人生は雲になりたいな。一瞬で終わりそうな人生だね？

「今日は、そうだな…… 人生のうちで何度かある厄日だと思いきんでおこう。うん、それがいい」

想っつけ。そうすれば大概の事は楽しく感じるから。けど僕はMではない。Mではない。

「今日は、かえろっかな？ って放課後だったな。そういえば……」

そうそう、放課後だったそうでした。呼びだされたわけでもなく、強制的に拉致されたんだっただけ。

ここ学校の裏手だから人に見られることもないから、このまま寝ちゃってもいいんだけど、それだとあんまりにもみすばらしいから、家にかえる。

「よっこいせつと」

足ががくがくしてるけど、何とか立てた。あゝ、ふらふらする。こんなところ、忍迺に見られたら『死ぬ、ウジ虫』って言われるんだろっつなあ。はあ、鬱だ。

「別に後悔しているわけでもなく、憎んでるわけでもないけど、なんで僕は忍廻の幼なじみなんだろうなあ」

この世界にもし神様とやらがいたとしたら、その神様が忍廻を引き立たせるために僕を和え物にしたに違いない。あんな天才の横に（いや横にさえ立ててないけど気持ちの問題だ）僕みたいな凡人を置いたんだ。さぞ、腹を抱えて笑っていることだろう。

別に危険が好きなのでもない。安全が好きなのでもない。人が好きな訳でもない。世界が好きなのでもない。

ただ、危険が僕を嫌い、安全が僕を嫌い、人が僕を嫌い、世界が僕に興味がない。

最近、いや、多分生まれてきたときから感じていたんだろう。だから、めんどいのだ。

「こーゆー時は、不貞寝かな？」

「死ね、ウジ虫」

いきなりかけられる、凜とした声。その声色からは想像もつかないほどの汚い言葉がその口から放り出された。

「いきなり、それはないなあ？ 忍廻」

後ろを振り返ると、幼なじみ（腐れ縁）の忍廻がいた。美少女だ。特筆すべき外見的特徴はあまりないが、美少女であることは間違いない。

「このネガティブウジ虫。この僕様が久しぶりに声をかけてやったというのに、なんだその口のきき方は」

この高慢王様大馬鹿者は……。

「お前が僕様の幼なじみであることなんて、ただの偶然と必然だ。この僕様と幼なじみになれたのだ、もっと嬉しそうに生きる」

「さよならー」

「まあ、待つがよい。ウジ虫君」

いつの間にか前に居る忍迺。腕組みをしながら不満げにこちらを睨んでいる。

「なにかな？忍迺お嬢様？」

「その言い方はよせ。僕様には鬱陶しいだけだ。分かるな？ 分からないと言ったら怒るぞ」

ならとりあえず、僕をウジ虫君と言っのをやめる。

それに君がお嬢様なのは本当の事だろう？

手始めに石油を精製する藻の研究で、毎日数億円以上の金がなにもしなくても転がり込んで来るんだし。

家は、二千坪。毎日不自由なく暮らす超リッチなお嬢様。

僕とは天と地ほどの差。まあ自由〓幸せとは限らないけど。

「今日は始業式であっただろう？ ちゃんと僕様のスピーチを心にとどめたか？」

「ん？ ああ、忍迺だったの？ なんか喋ってたの？」

僕は朝は低血圧。そんなスピーチなんて耳に入りやしないよ。

「ほほう？ 聞いていないと？ この僕様が五分も大事な時間を割いて練り上げた至高のスピーチを？」

君の五分はどんだけ大事なんだよ。まあ、僕みたいな凡人の数十倍は価値があるとは思っけど？

「ならさっさと帰って、研究の続きでもすれば？ 僕はさっさと帰って、不貞寝をするから」

「そんなだから友達ができるのだぞ？ もっと充実した高校生活を送ろうとは思わんのか？」

「友達なんて作ろうと思って作った友達には全然価値なんてないよ。いつの間にか横に居たのがほんとの友達だ」

僕にしては偉くまともな事が言えた気がする。それに僕に友達がいないわけじゃない。少ないだけだ。

「なら、僕様とお前は友達だな？」

「違うね、ただの腐れ縁だよ」

「この僕様と友達になるのが嫌と？ 笑わせてくれるなよ？」

「嫌ではないよ、ただ乗り気じゃないだけ」

「……………くっ……………くっはっはっはっは！ いいぞ！ この僕様にそのように話しかけられるのはお前だけだな！」

はいはいそうですねー。別に媚売る気にもなんないし。そんなもの、めんどいだけだよ。

そう言いながら、さっさとこの場を去ろうとすると

「まあ待て。もう少し話をしようじゃないか」

忍迺がニコニコしながら言ってくる。

「無理、もう体がぐらぐら。君と違って僕は凡人なんだ。この身体の痛みに耐えながら君と話す余力なんて体中かき混ぜても出てきやしないよ」

「ん？ そういえば、いつも以上にウジ虫っぽいと思ったら、なんかされたのか？」

これもニコニコしながら聞いてくる。別に僕の事を心配して聞いてくるわけではないようだ。

それについてはガツカリすることでもない。これが、この人のデフォだから。

Sなのだ。S。

自分の手を下すことはあまりないが、人が苦しみもがいてる様を見るのが大好きな。

「君の幼なじみという理由から、ぼこぼこにされただけだよ」

「そうかそうか。それはなによりだ」

「そ、ならバイバイ」

「だから待てというのに。そんなに僕様と話すのが嫌なのか？」

「……………いやだったら口もきいてないよ」

「そうかそうか。なら、今日家に来るか？　そこでお前に実験体になってもらいたいのだ」

「断るよ。じゃ」

「本当にウジ虫だなあ。お前」

「ああ、めんど。もう僕は帰るから。今にも痛みで気絶しそうな。立っているのもやっとなの。だから早く柔らかい布団の中でゆっくりしたいの。OK？　天才の君なら分かってくれるよね？」

「ちっ……………またの」

そう言っって不機嫌そうに手を振る忍廻。その顔が少し寂しそうに見えるのは気のせいだろうか？

まあいい、とりあえず帰ろう。考えるのはそれからだ。

一話・あゝ、めんど（後書き）

感想待ってます

一話・おやすみ、忍廻（前書き）

行くぜ行くぜ行くぜえ

では、じいじー！

二話：おやすみ、忍廻

僕は、一人暮らしだ。

小さい頃に親に捨てられて、顔も覚えてない。

そんなこんなで一人暮らしの、高校二年生になったばかりの男子。

悲しいくないわけでもない。辛くないわけでもない。

ただ、諦めただけ。

今は、奨学金と、バイトで何とか命つないでる。

「ただいま〜っ」と

誰もいない、いや、僕がいるか。どうでもいいんだよそんなこと。とりあえず、風呂入ろう。

その前に洗面台で顔チェック。

「うは〜、あざだらけ。けど、パンダにはなってるないや」

あの不良、ギャグの才能は欠片もないな。

頭に血が上りすぎなんだよ。キレてんなら、殺すつもりでやりやがれ。

腹もゴスゴス蹴りやがって、血吐いちまったじゃねえか。

それに、体中こけた時にすりむいて傷だらけだし。

「ああ、めんど」

怒るのもめんどいんだな、これが。

けど、口に出さないとめんどくなくなった気にならないんだな、これが。

「だから口癖なんだけどね」

自分に諦めが聞くように、言葉の帝王に簡単に忠誠を誓うための
宣言みたいなもんのかな？

服をぱぱと脱ぐと春先のまだひんやりとした、しかし着実にあ
ったかくなってきたている気温が肌で感じられる。

ふっと思った。僕がこの世界から消えたらどうなるのだろうか？
正解はどうにもならないだろう。人間一人消えたところで、世の
中、どうってこたあない。

それが、世界だ。

っと、どうでもいい事は置いて、寒いからシャワー浴びよう。

シャア

あつたかいお湯が……………って、

「ったい！ 非常にイタイ！」

そうだよね、痛いよね。くそ、ほんとにもう、厄日だ。

今日は節約とかこつけて、この痛みから早々に逃げよう。

体をぱぱと拭くのも痛かったけど、我慢して、置いてあったパ
ンをかじって歯磨いて寝た。

バイトは辛いのだ。いや……………バイト先の『天才』の存在がイ
タイのだ。

遅れようものなら、殺されても仕方がないってわけでもないけど。
チャリでゆっくりいくためには三十分は必要だな。

目覚ましの設定は17:00

18時出勤なんですよね。

「今日は、久しぶりに忍廻と喋ったな」

四か月飛んで二十三日ぶりかな？ 僕の事忘れていたのかと思っ
ていたからびっくり。

まあ、そんなこと言ったら

『死ね、ウジ虫。僕様の記憶力をなめきっているのか？』

って言われるんだろうとネガティブに想像

『死ね、ウジ虫』

「へ？」

幻聴じゃなかったら、確かに聞こえた忍廻の声。

どうやら、携帯からみたいだ………アイツ、いつの間に僕の携
帯を弄くりまわしやがった。変な着信音にしやがって。

って、それよりも、珍しいな？
なになに？

『ネガティブウジ虫。死んでないか？ いや、これを見ている時
点で死んでいないのだろう』

今日は久しぶりだったな？ 久々に愉快になれたぞ。お前は変
わってないようぞ

僕様は、変わりすぎたな？ 少々恥ずかしいものがあるよ

まあ、お前が変わらないでいてくれたおかげで、安心して変わ
れたのだが

明日も学校来い。さもなければ一生ウジ虫呼ばわりするぞ？
じゃあな』

けなしているのか、褒めているのか、どっちなんだ？言われなくても、学校には行くよ。

「忍廻。ほんと、変わったな。僕と違って……………人生を、諦めなかった。ほんと、すごい奴だよ、お前は」

だから、お前は……………って、僕のキャラじゃないな、うん。
だから、

『おやすみ、忍廻』

一話・おやすみ、忍廻（後書き）

感想待ってます

三話・理不尽な理不尽(前書き)

ふんふん

では、ごきげん！

三話・理不尽な理不尽

『起きよ、久遠よ』

ああ？んだよクソ爺！こちらら絶賛睡眠中だぞむにゃむにゃ。

『さあ、目覚めよ』

ふ、どうやら死にたいようだなむにゃむにゃ。

ああ、めんどいからもう起こさなくていいよ。ガキじゃないし。
一人暮らし歴、一年だよ？

『私は神だ』

暇を持て余した神だろ？ どうかいけよ！

『ふむ、なんとも、暴力的な性格じゃな』

誰の所為か言っごらん。そうそう、お前だよ。

『これじゃあ、埒が明かな』

埒が明かなくしてんだからしょうがないよ。

あはっ、なんかいまひじょーに愉快だよ。

『ごういえばよいかの？またな？』

いやだ。と僕は親指を立てて返事をしてやるよ。

「ふん、おいらには関係ないね。お前が遅刻した、だから殴るんだよ」

「……………だから、彼氏出来ないんだよ」

ぼそつと言ったのが聞こえていたらしく顔を真っ赤にして怒った。

「うっせー！ おいらにだって好きな奴ぐらいいるー！！」

「…………… やけにパンチが軽い？」

「どうしたんですか？風邪でも引きましたか？」

「う、うっせー！」

殴られた。酷いや……………。そして痛い。

「おら、何やってんだ。給料やんねーぞ」

店長さんの怒りのようで、店員が出入りするドアから体を半分出してこちらを怒鳴ってくる。

「ち、めんでーけど、やるか？」

ちなみに、先輩が働き始めて、この店の売り上げが著しく上がったのは余談だ。いや、閑話？

「さっさと立て。久遠」

「……………誰が、こけさせたんだか」

「なんか、言ったか？」

「言いました」

「ふ、ふん！」

バイトが終わると、機を見計らったかのように先輩が声をかけてくる。

「おい、久遠」

「な、なんですか？」

先輩が話しかけてくるなんてめずい。そんなことを考えていると先輩が、

「こ、このあと、暇か？」

うん？ 暇と言っちゃ僕は暇のために生きているような男だけど、
なにか？ 僕はいつの間にかこの人にフラグを建てたのかと。いや、
これは私刑^{リンチ}フラグだな。

「暇ですよ？ けど、明日ガッコですし」

学生なんです。それは前にも教えたでしょうに。

「そ、そうか……………」

何故落ち込むのか分かんないや。ああ、僕をボコることができなかったからか。

って、あなたも学生でしょう。それも同じ学校に通っているじゃないか。まあ、出席日数がギリギリで足りるように学校に来ているのであんまり見かけないけど。

「じゃ、また明日な？」

「殴らないと誓うのなら」

「無理だな……………」

そこは少し考えてもいいじゃないか。殴りたいのなら壁でも殴って下さいよ。

「さようなら……………」

先輩の後姿を眺めながら、ぼつりとつぶやいた。そうして僕は、誰もいない家路についた。

三話・理不尽な理不尽（後書き）

感想待ってます

四話・超越者のおねいさん(前書き)

けーけっけっけ!

では、じいじい!

四話：超越者のおねいさん

『なあ、久遠。僕様は、諦めないぞ。絶対に』

強く、凜々しく、僕にとっては遠いかった。

どんなに求めても、僕には追いつけられないような距離の向こう側で、悠然と僕とは正反対の道を進んだ忍廻。

『久遠も、諦めるなよ？諦めたら、ウジ虫って言うから』

そう言われたにもかかわらず、僕は諦めた。精一杯、諦めた。言葉の帝王に屈した。ああ、めんどつと行って諦めた。

僕、五歳の時のことだった。

ガバツ

「変な夢見たな……今、何時だ？」

変な夢と言うより、懐かしかったんだけど。

昨日バイトから戻ってきて、そのまま寝ころんでそのまま朝を迎えている僕。

髪は寝癖だらけ。まあ、気にしないんだけど。直すのめんどいし。

時計を見ると7:00になっている。

ちょうどいい時間帯だ。とりあえず、パンでいいな。

台所に行つて卵とベーコン数枚を取り出し、フライパンに油を布く。火でフライパンを暖めて、ベーコン布いて卵を割る。ジューという音と共になんとも食欲をそそる匂いが鼻を出たり入ったりしている。

もう孤児院から出てきて一年だ。

自炊とか余裕、とはいかず、時々孤児院時代のお姉さんの人が面倒を見に来てくれる。

その人が、天才？ なんだよな。いや、分類的には超越者？ どうでもいいだろう。

まあ、一人分ぐらい朝ごはんを作るには手こずらないけど。

「ベーコンエッグの完成です」

あとは、チンしたパンにバターを塗つて、これに乗つけて、マヨ好きな僕の独断でこの方々には悪いがマヨネーズをかけさせてもらう。

基本朝ごはんはこれだ。不摂生だろうとなんだろうと、簡単にくまくがモットーなんで。マヨラーだともなんとでも言え。うまいは正義だ。

まあ、レタスとかは添えるよ？

「もむもむ……ムググ！？ つまっひゃ」

「ほぐら、とんとんしましよ〜ね〜？」

僕の背中をトントンしてくれる柔らかい手……？

「ブホッ!？」

「やだ〜、汚いわよ〜？」

「にや、にやんで？」

「ヒヒ！ 久遠君が大好きなミーがビックリした久遠君の顔を見るために、前もって伝言をいれずにやってきました。テヘ」

なんともまあ、全部言ってくれて助かりますよ。それ以前に気配を消す意味が分かんない。

あ、驚かせるためだったか。

「ミーは久遠君ラブ！ それ以外の男にはなびかないわよ」

「意味分かんないし……それに、彼氏出来たって言ってたじゃないですか」

「うん？ ああ、便宜上そう言ったまでよ。 “あれ” はただの飼い犬よ？」

可愛い顔してあざといと言いますね。

「あざといとか酷いわよ？ ミーは久遠君の事大好きなんだから」

「……相変わらず、健在ですね？」

「そ〜ね〜？ 今日は調子いいから、久遠君と忍廼ちゃんの恥ずかしいことあることないこと、全部言ってしまうそうね」

この人は、岬千里^{みさきせんり}。孤児院時代のお姉さんの存在の人だ。

テレパシー、念力、透視、サイコメトリー、レポート、パイロキネシス etc と未来予知以外は何でもござれな超越者だ。『全て

の事象を超越する才能』だそうだ。

超心理学の学会の最高権力者を裏で操ってる奴を操ってるって言われていない。だって気づかれていないから。

そんなお偉いさんな訳だが、僕らと同じ高校生。一学年上だけど美人だ。唐突に言うが美人だ。僕と同じ黒髪黒目だが目が死んでおらず、鳩眼鏡がよく似合う。パツと見、文学少女だ。学校では彼女を狙うさかりまくってる男子も多く、その多くが彼女の隷属化に入るといふ悪循環だ。

「美人だなんて、嬉しいこと言ってくれるわね？」

「そうですね。嬉しかったんならよかったです」

「けどミーは文学少女じゃないわ。どちらかというと、理系よ」

千里眼使えるから、いつつもテストは満点だ。せこい。ずるい。

「せこくないわ。生まれつきのアドバンテージよ」

「そうですね」

「ああ、素直すぎて興奮しちゃうじゃない！ チューしている？」

「嫌です」

「そこでダメじゃなくいやと言えるところもまた素敵ー！」

なんか知らないけど、オープンに万年発情してる。

隙あらば、チューだ。

そんなのはさせない。僕だって高校生だ。

「高校生だったら、喜んで襲ってくれると思うんだけどな〜？」

「そうなんですか？だったら、いいですよ。高校生じゃなくて」

「つれないわね〜？ 食べちゃうゾ？」

カンバニズム的な意味で？ なるほど、人肉食でしたか。あれだ、人の肉を喰らってその人の能力がもらえるとこの噂のあれか。

「違うわよ〜。もう……………」

指をこずき合わせてもぞもぞしている。上目遣いが扇情的で、なんだかいつもより幼い印象を与えてくれる。何かを我慢しているような感じさえ窺わせる。そこから導き出した僕の答えは、

「トイレなら、あつちですよ」

「違うわよ！ ふん！」

あ、拗ねた。

「拗ねてないもん！」

やけに子供っぽい。

「だって、高校生だもの」

だって人間だもの。みたいな感じか。

「ほら、学校行きますよ？ 遅刻したら、めんどくさいですし」

「久々に久遠君とラブラブ登校ね。そしてそのまま夜の街へ」

「朝ですよ。ほら、行きますよ」

「あゝん、久遠君ったら強引」

……この、万年発情猫め……。

「ひどい。今のは傷つきました」

「もういいです」

そうして、二人で自転車登校をした。

そういや、なんで千里さんはテレポ使わなかったんだろう？
謎は深まるばかりである。

四話・超越者のおねいさん（後書き）

感想待っています

五話・甲斐性なし(前書き)

いゃっほーっほーっ

でほ、でほ、でほ、

五話・甲斐性なし

今日は学年実力テスト。またの名を地獄の三時間。ようするに、僕たちの限界。

「終わった……」

英語、ちつとも全然分からないや。

数学と国語はまだましなだけだな。先生にも英語頑張れ言われているし。

文法も単語も分からない。中学時代にもっと頑張っておけばよかったと後悔。しかし、後悔先に立たずという奴で、ないものねだりはしない主義だしね。

「どうした？ ウジ虫？ そんなに悪かったのか？」

珍しいな。二日も連続で話しかけてくるなんて。

なんか悪いものでも食べたのか？ 今のは自分で言って気分を害したな。まるで僕が普通の状態じゃあ話しかけられないほどにケガラワシイと言っているみたいだ。

「ふむ、無視か。無視できなくするような薬を投与してやるっか？」

「まあまあ。とりあえず、謝れよ」

「何がだ？」

何がだ？ おいおい。忘れてもらっちゃあ困るぜ？

「携帯勝手にいじくっただろ？ あれ、どうやっても着信音もとに戻らないし」

「性能は三世代上ぐらいにしてやったが？ 文句あるか？」

それはそうだけど。はずいよね？ 死ぬ、ウジ虫だよ？

耐えられるかっての。諦めるといふ選択肢はこれについてはない。ない選択肢を選ぶなんて芸当、僕みたいな一般市民にはできないっての。

「この僕様の御声がいつも聞けてうれしいだろう？ 声を使って変なことはするなよ？ たとえば「それ以上言ったらお前のあだ名は変態メカニックだ」まだ何も言っていないぞ？ そんな妄想をしてウジ虫の思考はほんとウジ虫だな？」

くそー！してやられた！

いや待てよ、そんな妄想ということは忍廻もそんな妄想が理解できるといふことであって、僕だけがウジ虫ではないということ。ということとはつまり、忍のは自分で自分を蔑んでいたんだあ！

今の自問自答にも自己嫌悪だぜまったく。

「もういいよ。で？ 何のご用でしょうか？」

「ふむ。今日お前、千里さんと来ていただろう？」

何故知ってる？

もしか、道路の隅の角っこで僕たちの方をジロジロと舐めまわすかの如く見てたのか？

「……いや、やはりなんでもない。それとも何か？ 用が無かったら話しかけてはいけない仲なのか？ 小六まで一緒に風呂に入っていたではない」「ちよ、やめい！」

何を暴露しようとしてんだ。僕は決してロリコンではないぞ！

いや、興味が無いと言ったらそりゃ嘘になるかもしれないけど、けど可愛いじゃん。可愛いは正義なんだ！

「変態ウジ虫。僕様のロリボディを思い出してさかってたのか？」

「違うよ。ああ、めんど。もういいよ。下がってくれたまえ」

「ほほう？ いつからそんな上等な口のきき方をしやがるようになったのだろうか？」

「最初からだよ。忍廻様」

ん？ なんだ？ なんでそんな辛そうな顔を？

おいおい、そんな弱い君じゃないでしょ？ ちよ、僕が悪いみたいじゃないか。

「そういつぶつに言うなって……いったらどう……」

な、なななな、なんで？ ちよ、え？ほんとなんで？

僕、女子との会話センスレス。そんな僕のセンスに免じて許して下さいお願いします。

「し、忍廻？」

「ウジ虫の馬鹿ぁ！」

ゴスッ

僕の顔面にどこで覚えたのか、正拳突きを放ってきやがった。避けられるはずもなく、直撃だよ。

「そこで殺虫剤巻かれて死んでろお！」

あう。な、なんで？僕、泣くようなこと言った？

ちよ、外野ウルサイ！女子泣かせてサイテーとか、けしからんもつとやれ、とかうるさいし。けしからんもつとやれって言った奴後で体育館裏集合だ。

「僕、何言っただらろう？」

え〜と、忍廼様？ え？ これで怒ったのか？

まじで？ ……ああ、めんど。

「……………帰りにでも、謝りに行くか……………」

あんな顔見てね、ほっとけるほど鈍い神経は持ち合わせてない。ほんと、僕ってサイテー。

「忍廻〜?」

忍廻のクラスを訪れてみる。ん? うん。僕と彼女は別クラスだともさ。そう言えば、わざわざ別クラスに話しに来るって言うのも珍しいよな。

いない。ああ、帰ったのか。めんどいな、かえろ。

とはいかないよな。そこらへんで帰りの用意をしている女子に、

「あの〜、忍廻知りませんか?」

「ああ、学校終わってからなんか俯いたまま帰ってたよ」

まだ落ち込んでる。う〜ん、このまま行っても何しに来たこの腐れウジ虫とか言われるだろうし。

あれだ。忍廻の好物、え〜とたしか駅前のケーキ屋のシュークリームだったかな? ホイップとカスタードが混ざってるやつ。時々買ってあげると喜ぶんだ。その時の顔がまた可愛くて。

「めんどいけど、行くか〜」

学校

ケーキ屋

忍迺の家

相も変わらずでつかい家だな。庭だけでも僕の住んでるアパート全体より広い。その奥には西洋館みたいな家がドンっ！と構えている。

とりあえず、無駄にでかいインターホンを押して、

『……なんだ？』

うは。すっごい不機嫌だよ。ちょっと眼もとが赤いし。僕の少ないながらの良心がすごいきずきしてる。

「えっと、これ。シュークリーム」

『……でっ。』

少し生唾を飲み込む音が聞こえた。

最近忙しくて食べれてないんだな。ちょっとえっちいことを見返りとして、いや冗談。

「その、すみませんでした。僕はサイターの腐れウジ虫です。泣かせてしまつてすみません。二度とこのような事がないようにするのでどうか機嫌を直して下さい」

『……敬語が気に入らない』

「……ごめん、忍迺。なんか知んないけど泣かせちゃって。物で釣るわけではないけどこれ食べてよ」

『………とりあえず、中に入れ』

これまた無駄に大きい扉が物々しく開く。両隣りには龍の紋章が入ったこれだけで芸術品としての価値がありそうな大きな扉だ。

中に入ると、綺麗に取りそろえられた調度品の数々。気がなすぎ室内。

「こつちだ」

奥の部屋で手招きしてる。なるほど、あそこが僕と忍迺の愛の巣になるわけですか、これも冗談。

忍迺、まだ誰も雇ってないんだな。両親いないのに、一人で暮らしてさびしくないんだろうか？

まあ、僕は例外と見てくれて構わない。

部屋の中に入ると、

「忍迺？」

「………一緒に、食べるぞ」

「う、うん」

なんかやけに真剣な面持ち。クールで知的。多分学会に発表する時の論文を提出するときは、いつもこんな表情でキーボードを打っているんだろう。

顔が可愛いからGAP萌えって言っただろうか？

「はい、どうぞ」

「うん。……もむもむ」

.....。

沈黙がイタイ！ 痛すぎるよ！ 貧弱な精神を持つ爾宮君には耐えられませんよ！

「もむもむ……じー」

僕が手に持つシュークリームをじっと見つめる忍廻。

なんだ？ 欲しいのか？ いやでも、少しかじっちゃってるし。再度確認するために僕はシュークリームを上下左右に動かす。するとあら不思議、忍廻の首も上下左右に動きだす。まるで、猫じゃらしを追う猫みたいだなというのが僕の感想だ。まあ、可愛いな、というのが正直な感想で。

「いるか？」

「うん」

両手にシュークリームを持って少し顔が和らぐ忍廻。ちよつとだけ機嫌が治ったのか？

「もむもむ」

「ほら、口ついてるぞ」

お手拭きふきふき。はっはっん、まだまだ子供だねえ。

「むふあ!?! にやにしちえる!?!」

「なにつて、口を手で拭いてあげただけだけど……」

そんなに嫌だったのか? 激しく落ち込むぞそれは。
— 人心の中で両手両膝を地面についていると、

「べべ、別に嫌という訳ではないが……」

む、いやでは無かったら怒ってるのか。顔真っ赤だし。

「機嫌は直ったつぽいね? じゃ、僕はこの「今日、泊まってけ」
いや、で「泊まっていけ」「い」「いやか?」「……分かったよ」

泊まるのが初めてという訳ではないからいいんだけど。

ほら、いい年した男女が一つ屋根の下っているんな妄想が働くの
もめんどくさいわけだけど。

男子としたら働くじゃん。妄想が。それって仕方のないことだよ
ね? 男子の生理的な現象なんだ。それを気持ち悪く感じる女子は
格好いい男子とそばにいてそれが思い浮かばないでも? 否、断
じて否だ。

「今日は、僕様がサービスしてやるから覚悟しておけよ?」

ちよ、読者が勘違いするようなこと言うんじゃない。

そして、僕自身が勘違いしそうになったことは誰にも秘密だ。

「じゃ、風呂入るから、入ってくるなよ？」

「期待して待っておけ」

この変態メカニックが……前泊まった時だつて入ってきたときは心臓が止まった。文字通り止まった。

忍迺の話によると僕様がいなかったら死んでいたらしい。お前が原因だけだな。

風呂場についてもやっぱり無駄にでかい。風呂場に入つてすぐに目に入るのが、全面白を基調としたメルヘンの様なタイルに、金色の馬の飾りが施されたバスタブ。

ぱぱつと脱いで風呂へ入る。

うん、やっぱり風呂には浸かった方が気持ちいいね。まだしみるけど。くそ、あの不良覚えておけよ。

「邪魔するぞ」

「ぼぶッ!？」

一瞬で後ろを向く。ソノミヤ史上最速だ。

あいつは馬鹿か!? いや天才だった。いや、やっぱり馬鹿だ。そんなことどうでもいい! 僕の心臓がまた止まってしまいそうで怖い! そして僕は僕自身が忍迺の素晴らしき裸体（うきむら）を見ることが我慢していることに、褒めてやりたい気分だぜ!

「せ、おつさと出てけよ」

「ここは僕様の家だぞ? いつ入ろうが勝手だ」

「じゃ、じゃあ僕が出るよ」

「絶対的権力者も僕様だ。命令に従え」

「じゃ、じゃあ僕に君を襲えと？」

「襲いたいなら襲っても構わぬぞ？」

「……………ポフンッ」

頭が、おぼろびろびろとう。

「く、久遠？くおー……………ん！！」

久しぶりに、あいつの口から僕の名前が……………どうでもいい。

「知ってる天井だ」

よくは見えていないけど何度か見たことのある天井。
忍廻の家の客室だ。なんか知らないけど、今日はいろいろと厄介
だったな。

いや、眼福にはなったけど。あいつ、胸ないんだよね。

本当、高校生か？ ってぐらい絶望的に胸がない。小学生よりも小さい。いや、それは言い過ぎか？ いや、待ってほしい。僕が小学生の旨の大きさを知っている前提で話したような気がするが、それは間違いだ。それはまあ、銭湯とかに行くとき々みかけるが、その時ちらつと見えちゃうぐらいだ。
断じてロリコンなどではない！

「……ま、いつか」

ん？ それよりも、僕なんでここに居るんだ？

確か、風呂に入って、忍迺が入ってきて……あいつの衝撃発言で、僕の頭が……。

あいつももうちょっとは危機感持ってくれたなら、一層可愛く見えるんだろうけどな。警戒心がないんだよな。いや、警戒し過ぎるのもなんだかどうかと思うけど。

それよりも、僕の横に何か柔らかい感触があるのは気のせいか？

「……すゝすゝ……」

忍迺でした。おいおい、警戒心なさ過ぎだろ。

襲われても文句は言えるかもしれないけど、仕方がないと言える状況だぜ？ こう、がばつとぐぐぐつときゃあ！？ みたいな展開になっても本当に仕方がないと思う。

ほんとやになるよな。僕の甲斐性なし。

心地よさそうに眠る忍迺の髪を一撫でして。

「おやす」

みは、布団の中で。

「.....甲斐性なしめ.....」

五話・甲斐性なし（後書き）

感想待ってます

六話・ホント、あれだな（前書き）

つ、疲れてきた

では、どいぞー！

六話：ホント、あれだな

その日の夜は、不思議な夢を見た。まあ、夢の全てが不思議だと断定したら、その時点でこんな独白は意味を為さなく成るんだろうけど。

一人荒野にたたずむ僕。周りには夥しいほどの死体の山。死臭、腐臭。吐き気を催すような光景が僕の前に広がっている。

そのどれもが殺され方がばらばらだ。

焼けていたり、どこかが切れていたり、吹き飛んでいたり。

やけにリアルな夢だなーと思いつつ、地平の方を向くと地平線が埋め尽くされるほどの砂煙。

一、二分するとそれが騎馬であることが分かる。

リアルだ。そう思いながらぼーっと突っ立っていると体が急に動き始める。

え？

「天叢雲剣！」

右手に日本刀と思しき剣が現れる。

「天羽々斬剣！」

左手にまたもや日本刀と思しき剣が。そして、なんだかとても力が溢れてきた。今なら何でもできるような気がする。

それにしても、なんだ？ この剣使って無双すればいいのか？ 速攻でやられそうなんだけど。突っ込んだ瞬間小石みたいに蹴飛ばされそうなんだけど。

なんかぼーっと考えているとまたもや体が勝手に動き出す。

右手の剣を袈裟がけに空を切った。

そしたら、空間が切れて荒野で大洪水が起こった。溢れ出す水はとどまることを知らず、騎馬の大群を飲み込み機動力を減少させる。

え？ チート？ ってこの二振りの剣、神剣だよな？

それも、ヤマタノオロチを倒した剣と、その尻尾から出てきた剣ふぶん。こういうのには少し興味があるんだ。この知識に関しては人並み以上だと自負している。こんなもん覚える前に勉強しろと言われればおしまいだけだね。

訳が分からず体が動き出し人の塊に突っ込んでいく。

「シッ！」

左手の剣が霞むほどの速さで振られると、大地が斬れた。

すると逆側から雷が襲ってくる。

「雷切！」

天叢雲が消えて美しい青色の刀身の日本刀が現れる。こんどは身体が質量がゼロになったかのような感覚に襲われる。

今度は自分の体が霞むほどの速さで移動し、雷を切り刻んだ。

どんなチートなんだよ。

また、今度は両手の剣が消えたかと思うと次は神々しい矛が現れた。

「天沼矛！」

それを振りかざすと大地が隆起し人間を打ち上げる。

ずいぶんと爽快感たっぷりな夢だな。これだったら主人公になれるぞ。何の主人公化は置いておいてだ。

またそれが消えると、バカでかい弓が現れた。

「天鹿兎弓！」

その弦をギリギリと音を立てながら引き絞る。

パツと手を離れた瞬間、極大の光の束が人間をこれでもかというほど貫いた。その駆け抜ける光の束は戦場をさんざん食い散らかすと遙か彼方で霧散した。

ほんとすごい、ハイクオリティな夢だな。

けど、人を殺した感触もリアルなので気持ちが悪い。人なんて殺したことはないけど、直面したことはあるからね。

ああ、めんどいな。

ガバツ

「ふう、やっぱり夢だったか」

春先の温かい室内がとても心地いい。いつまでも眠っていたい気分にも襲われた僕は、もう一度寝ようと視線を落とす。

隣では忍廻が幸せそうに眠っている。ほんと、僕には過ぎた幼なじみだよ。

ふっと時計を見る……いや、見ても関係ないか。今日休みだし。もうひと眠りしようかな？

「くお……ん……いやあ……」

僕の名前呼びながら悶えるとか、僕の事そんなに嫌いなのか？
まあ、とりあえずもうひと眠りしよう。今日はバイトも休みだし。
千里さんはこの状況千里眼使って覗いてるだろうし、僕の理性が
飛んだとしてもテレポで来てくれるでしょう

「おやす」

みは、布団の中でー。

「また寝るのか？」

「ん？起きてたの？いや、僕土日は寝て過ごすよ、ウジ虫の様に過ごすよと決めているんだ」

「そうか……ならば、僕様も一緒に寝てやるよ。どうだ？ 襲うなよ？」

「……保証はしかねるね」

「な、なななな、何を言ってる!？」

Sって、攻めには弱いよね。言葉攻めでSの人を陥落させてみよう、と思ったたらその時点であなたもSだ。

「大丈夫だって。僕の理性が飛んでも千里さんがテレポで来てくれるから。という訳でお休み」

……ちよつと質問してみよう。

「なあ、忍廻」

「なんだ？ く、ウジ虫」

別に言い直さなくても。

「……僕がいなくなったら、どうする？」

「はあ？」

「はは、冗談だよ。どうする？ 一緒に寝るか？」

「う、うむ」

「じゃ、おやす」

『みは、布団の中で』

僕、よく我慢したな。世界中の人に褒めてもらいたいよ。

僕の理性がサラダバーして本能がこんにちはするところだった。

ホント、襲いたいなら襲えとか言ってたけど。

襲うかもしれないって言ったら顔真っ赤にして怒るし。

ホント、せこいよな。どうせ襲ったら泣くんだろうし。

ホント、好きな子の涙なんか見たくないに決まってるだろうし。

だからと言っちゃあなんだけど、自分を諦めて忍廻を護
れてんのかなあ？

大丈夫か。自己満足だし。忍廻が笑っていてくれればそれでいい。
忍廻の傍に入れたら、それで……………。

ホント、めんどい性格してんな、僕……………。

六話・ホント、あれだな（後書き）

感想待ってます

七話・スゴイセツテイデスネ（前書き）

や、やば……

では、じいじー！

七話：スゴイセツテイデスネ

積み重なる夥しいほどの死体。むせ返るような血と臓物の匂いリアルだ。いや、本物を見たことがないから分からないけどもあゝ、夢の続きかゝ。

『……………見つけた』

え？見つけたって何を？いやはや、見つけるべきものなんてどこにもないっすよ

いや、夢に突っ込んでみてもどうにもならんけども

『……………神殺し……………』

え？神様殺されちゃったの？それは大変だ、すぐに新しい神をたてたまえ

それにしても神様殺すってすごい非現実的だな

でも、神様殺せそうなメカニックと運動神経の持ち主とサイキツカ―なら知ってるけども

忍迺いわく「必要とあらば地球をふっ飛ばすぐらいの爆弾いくらでも作れる」だそうだ

いや、それを実行に移さないでほしいものですよ。まだ死にたくないし

『爾宮 久遠。永劫なる狭間、久遠なる狭間にて、神々の力を受け継ぎし者』

え？僕？いや、いやいやいや、それはない。有り得ることがないと書いて有り得ない。

なんで僕？設定的におかしすぎるでしょ？

もっと、金髪碧眼の超イケメンとか

そう、運動神経抜群で熱血漢の人とか

こつ、思い悩む主人公が悩みを超えて成長するとか

あるでしょ？もうちよつと主人公っぽい人が

『その御力にて、神々を打ち滅ぼせ』

はい矛盾発見。神々からもらった能力なのになんで神々を滅ぼしちゃうんでしようね。

もう、黄色い救急車呼ぶしかないか

それに神々打ち滅ぼす力があつたのなら、まずお前を打ち滅ぼすし

『我が世界とその世界の神々との契約なり。我が世界乱れしとき、神殺しの力を持つ者を送ると』

シラネ。そんなのシラネ。

勝手にやつとけよ。僕は平凡に暮らすから

なんで大体、こつちの神様がそつちの世界救う理由があるんだよ

『我が世界は、原初の世界。その神々も彼の地で生まれ育つた』

日本神話とだいぶ違うよ。ようするにだ。こつちの世界に最初に降臨した神様は、そつちの世界で育つたと

大分ゴリ押し設定だな。それともそつちの世界の間違った考えなんじゃね？

『今、この世界の神々は荒れている。世界を気まぐれで滅ぼそうとしてる』

だからシラネ。気まぐれだったら気まぐれでやめてくれるんじゃない？

『それでは、こちらに来てもらおうぞ』

そうなのか、行くなら一人じゃなくて忍廻と一緒にがいいな。な
くんで、忍廻巻き込む訳にはいかないしな
それにこれは夢。有り得ないって

『忍廻？意中の相手か』

ああ？お前に何の関係がある。夢の中なんだから黙ってみている側
が幸せになる様な夢を見せやがれ
ほんと、精神的に疲れる夢だな

『ふむ、ならば其の者も呼ぼう』

……………忍廻を危険に巻き込んだら、コロスゾ

『……………ヴァルク……………』

ヴァルク？なんだその厨二的な名前は？

絶対コイツATフィールドとか普通に叫んでそうだな

『世界渡りの術式だ。もう、止められん』

ああ、スゴイセツテイデスネ

本当だったら、そっちの世界で神々の方についてやるし

『……………む？他に数名、引っかかってしまったぞ』

この欠陥魔導士め！だから落ちこぼれって言われんだよ！

『言われておらぬわ！今回はただの失敗だ！』

おお、夢のくせに切れたぞ？からかいがいのある奴ですね。ぷ
くく

『ふん！まあ、目が覚めたら我が力に慄くがよい』

目が覚めたらあんたとはサラダバーだよ

『あ、座標間違えた』

こんの、欠陥落ちこぼれ魔導士がああああああああああああ
あああああ！！！

そして僕の意識は、夢の中なのにブラックアウトした

七話・スゴイセツテイデスネ（後書き）

感想待ってます

八話・夢であってほしい(前書き)

ふむむ。ターニングポイントだ！

では、じじい！

八話・夢であってほしい

柔らかいベッドの感触。心地よい気温

「ふあゝ。よく寝た」

やっぱり夢だよね。夢以外の何物でもないよ

どうしてあんなに疲れる夢を見たのかよく分からない
最近疲れてんのかな

横では忍廻が可愛らしい寝息をたてて眠っている
周りはいつも通りバカでかい……………

「忍廻、起きて忍廻」

「むゝ。なんだ？騒々しい。僕様の眠りを妨げるのは誰だ」

「僕だよ。なあ、忍廻」

忍廻がゴゾゴゾと起きて周りを見る
その瞬間、体の動きが止まった

「おまえんちって、森の中だったっけ？」

「……………地下に、疑似森林を作っているが、こんなに鬱蒼と茂って
いない」

「いや、それも驚きだけど……………え？」

「え？」

だからな

あ、今日のパンツは水色だ
眼福眼福

ドゲシッ

そのままゲシゲシと踏まれ続ける。痛いと思う僕はMじゃない

「この変態ウジ虫め。みたいなら見たいというがよい」

見せてと言ったら見せてくれるような発言だな
今度頼んでみよっかな。うそうそ、全部ウソだよ

「で、殴られた感想はどうだった？痛かったか？」

にやにやしながら聞いてくる忍廻

「ボールで殴る馬鹿がどこに居るよ、まったくもう」

「ふむ。痛かったようじゃな。なら、夢ではないと」

「……………なあ、忍廻夢の中でなんか誰かに話しかけられなかつたか？」

「うん？話しかけられたぞ？お前に欠陥落ちこぼれ魔導士と呼ばれてご立腹の様子じゃったな」

…………マジでか。リアルでか。本気でか。だとしたらここ、神様とやらが暴れている異世界？

まさかの異世界！？え？異なった理を持つ世界！？

「し、忍廻、お、おおお、落ちついて聞けよ?」

「お前が落ちつけ」

あう。なんでお前はそんなに落ちついていられるのさ。

「お前の夢の中で出てきた欠陥落ちこぼれ魔導士は、僕の夢にも出てきたんだ。で、そいつが言うには……………」

じっくりゆっくり話した。忍廻が落ちついているのに僕がきよどつてて恥ずかしかったけど

僕が、神殺しの力持っているのは伏せながら、ごまかしを聞かせてみた

こう、平静を装っているが忍廻だって少しぐらい不安なはずだ。多分

「……………そうか。ここは異世界で、お前がごまかしを入れた部分に核心があると」

あう。なんでばれちゃうんだよ。いや、それに僕が神殺しの力持っているとは限らないし

本当は、あの欠陥落ちこぼれ魔導士の間違いで忍廻が神殺しだったりするかもしれないし

まあ、見つめられて話しちゃったんだけど……………ほんと、情けない

「そっか……………で?神殺し殿?どうするのだ?」

「ちょ、やめてよそついつの!?!?」

「で、どうするのかということを知っているのだ、このウ……………ジ

「く、久遠。僕様捨てて逃げる」

「大丈夫任せて。逃げ脚だけは速いから」

こんなときもあるつかと、“それなり”に体は鍛えているつもりだ

「そ、そんなことを言っているのではない。僕様を担いだままだったら」

「ええい！黙ってる！舌嚙むぞ！」

今さつきから追いつかれにくいように、木々の間を走っているが、どうにも無意味みたいだ。

木々を吹き飛ばしながら、こっちに突っ込んで来る。車みたいだ

「大丈夫。お前は僕が護るから。泣かせたりしないから」

忍迺に言っているのに、自分に言ってるみたいだ

最近、自分のキャラが壊れてきたな。すぐに諦めてたのに、今は、こつも諦めるのが悔しい

諦めるのが悔しいって思うのは、ほんと十年以上ぶりだよ

あの欠陥落ちこぼれ魔導士が言うことが本当なのなら、今は是非に神殺しの力が欲しいね

あの、夢みたいに叫べばいいのか？

「天叢雲剣！」

……やっぱ、無理か……はは、神殺しって言われるのあんなに嫌だったけど、今は

『普通の人間であることが、こんなにも悔しい』

悔しくて、悔しくて悔しくて、悔しすぎる。目の前に救いたい命があるのに、この手に掴んでいるのに、救えないと思うと、死ぬほど悔しい。悔し涙が出るなんて、生まれて初めてだ

「久遠……」

「そう！そのまま名前と呼んでよ。頑張れるからさ」

そう言いながらも、距離はどんどん近くなってくる
相手のスピードが上がった訳ではない。僕のスピードが落ちているんだ

僕の手の中には、いくら天才と呼ばれようが、ただの女の子
それが護れなくて、なにが幼なじみだ
護りたいものが護れなくて、何が男だ！

「忍迺。走れるか？」

「ぼ、僕様を、誰だと思っている」

「ただの寂しがり屋の女の子だよ」

「ぼ、僕様は天才だ」

「じゃ、一緒に走れるかな？横も後ろも見ずに走りぬけるよ？」

「分かった」

震える忍廻をタイミングを見計らっておろす

「走れ！」

僕は、残るから

君は、生きなくちゃ

僕が言った通りわき目も振らず走り抜ける忍廻

はは、遅いなあ。だったら、時間稼ぎぐらいはしなくちゃだなあ

一番は、このまま忍廻が誰かに拾われて、僕も合流できる事なんだけど

そんなに人生甘くない

二番目にいいのは、忍廻が誰かに拾われて、僕がこいつに食われて

コイツが腹いっぱいになること

そう思いながら、そこら辺にある手頃な木の棒を拾う

はは、最初で最後の武器は、樫の木ですか

「ああ、めんど……」

樫の棒を構えて突っ込む。お世辞にもカッコいいとは言えない

大丈夫。カッコよさなんて最初から求めてないから

最初から最後まで求めていたのは、忍廻の無事だよ

グガア！

トカゲの右前脚が思いっきり振られる。体格差からして、一撃で骨

とかがバキバキに折れるだろう

バキィ

僕の骨が折れる鈍い音。ああ、痛いや
ほんと、殴られたりするの慣れているといつても、全然感じたこ
とのない痛み

このまま、意識を失ってくれば、生きたまま喰われるなんて現場
に遭遇しなくて済むんだけど

ん？トカゲやろうが、明後日の方を向いている？あっちの方は……
忍遁が！

そのままトカゲは走りだす。もう一匹の餌を仕留めようと

「させるかあああああああああああ！！」

叫んだ瞬間に骨が肺を引っ掻いたのか、血が口の奥から零れおちて
くる

なあ、欠陥落ちこぼれ魔導士。お前の言ったこと、やっぱり嘘だっ
たよ

神を滅ぼすどころか、トカゲ一匹仕留められない

滅茶苦茶だよ。本当に

『ハローハロハロ。お困りのようですね』

死ぬ。誰だか知らんがとりあえず死ぬ

『ひつどい！折角神殺しの使い方、教えてあげようと思ったの
に』

今すぐ教える。さもなければ死ぬ

三秒ルールだ、1、2

『はいはい。ではですね？頭の中に、まあ、武器の形を想像してください。あ、あなたが思う形なら何でもいいですよ。』

形は、日本刀。で？そのあとは？

『あとは、貴方の知っている、貴方の世界の伝説の武器の名前を言っちゃえば、それでOKですよ！』

なるほど。形を想像してなかったから駄目だったか

「天叢雲剣」

そうすると、小さな光と共に僕の手には、素人目でも名剣だと分かるような日本刀があった

「誰だか知らないけど、感謝しておくよ……」

頭の中は、痛みでドロドロ。幻聴だったのかもしれない。けど、この掌の中にあるのは、本物だと信じたい

『あと、神殺しの能力は『神速』^{カシハル}、『神威』^{カミイ}、『天の羽衣』の三つです。神を超える素早さと、神を打ち滅ぼす攻撃力、圧倒的防御力の三つです。ではでは、頑張ってください！』

………忍廻！

地面を蹴ると、世界が吹っ飛んでいく。視界に映るのは、線。景色が線でしか捉えられない。体感時間は長かったような短かったような、すぐにトカゲに追いついた

その下では、忍廻が震えている。泣いていた……コロス

「死ぬ、このトカゲ野郎が!!」

手にあつた剣を横一線に振り抜く

夢で見たとおり、空間が裂け、今度は超高圧縮された水の刃が現れる
水の刃はそのままトカゲの首めがけて飛んでいき、首を落とした
断面から血が噴水のように拭き出る

「……忍廻……大丈夫か？」

「く、久遠……うぐ、うう、ひう」

すすり泣く忍廻

「ごめん、怖かったろ。もう、大丈夫だからさ」

「うん、うん!!」

泣きながら頷いてくれる。

サラサラした髪をなでる。孤児院のおばさんが泣いたときによくや
つてくれていたような気がする

「これからも、護れよ？僕様を」

「……あたりま、え……だ」

ああ、そう言えば肋骨何本か折れてたな。アドレナリンのお陰で忘
れてたけど、もう、無理

「く、久遠？」

「だ……いじよ、ぶ」

血がコポコポと喉の奥から出てくる。息をするたびに、血の量は増していくばかり

片方の肺でも潰れてんのかもしれない

「な、よくき、け？ぼ、くが、意識、うしな、っても、一人、で行け？」

「ば、馬鹿言つな。二回も置いて行けるか！」

「ああ、耳、痛、いな。女、の子は、も………つと、おしと、やかに」

意識が、薄れてきた。おそらくただけど、この森の中には他にもあんな生物がいるだろう。下手すれば荒れているとかいう神様だって……神様でなくとも、血の匂いで獣が……だから、多分戦闘能力は子犬以下の忍廻は、逃がさなきゃ

「ほ、ら。逃げ……ろ」

「久遠？久遠！久遠！！」

ああ、ほんと、めんど

死ぬのも、めんどくせえ

だから、死にたくないな……だから、忍廻と一緒に居たかったな……

これが、夢であると、切に願った

現実には、無情だけでも、希望を寄せるのは自由の筈だ

だから、起きたら、全部、無かったことに……………

八話・夢であってほしい（後書き）

感想待ってます

九話・何このクソイケメン（前書き）

うにっ、ここはどこわたしはだあれ？

では、ぐんぐんー！

九話：何このクソイケメン

『久遠はほんとドジだなー。僕様が護つてやるからな！』

十数年前の鮮やかな記憶

あの頃はお互いにまだ幼く、世界に対して何の知識もなかった無知で、幸せなぐらい無知で、僕はただの馬鹿だった。

二人して泥んこになるまで遊び、大人の人に悪ふざけもしたりした。本当に楽しくて、けど、いつから楽しくなくなったのか分からない。毎日一緒に遊んで、幸せすぎた。

幸せすぎて、怖かったのだと今は思える。僕は、その毎日が壊れるのが酷く怖い臆病ものだったんだ。

そんな僕も、どんどん成長して世界というものを中途半端に知ってしまった。中途半端に絶望してしまった。

いろんなことを諦め出したし、いろんな事が面倒になってきた。

そんな僕からは、最初から少なかった周りの人たちも離れていったし、それを引きとめもしなかった僕がいる。そんな自分を仕方がないし、面倒くさいというどうでもいい理由で諦めた。

唯一つ、忍迺を、護ることだけは、諦めなかった。ただ、しがみついても離れたくなかった。

それは、僕が絶望した世界の中で、燦然と雑踏の中で際立って見える電灯。僕はそれに引き寄せられた蛾の様なものなのだろう。

離れすぎれば一様に不安が増し、近づきすぎればその身を焼く。

僕にとって東雲 忍迺は絶対不可侵の絶対的な存在だった。

そして僕は、その周りをふわふわと飛び回る、哀れな蛾。

起きろ。起きてよう。久遠。

誰だろう？忍迺を泣かせる馬鹿者は。忍迺を泣かせるのならそれな

りの覚悟は必要だよ？

まず機嫌を取らなきゃ。そして駅前のシュークリーム。あ、カスタードとホイップミックスの奴ね？

そして叱咤激励という名の暴言に身を晒さなきゃいけない。

よほど奇特な人じゃないと一緒に居られない。あ、自分の事変な奴って言ってるようなものだな。

けど僕の名前呼びながら泣いてるってことは、僕のせいで泣いてる？ だったら機嫌を取らないとね？とりあえず、泣いている原因を聞いてみなきゃね？

「どしたの？そんなに泣いちゃって」

「……久遠？」

いや、僕以外の誰だと？とりあえず、体の重さも気たるさも、意識を失う前の肋骨の痛みもそれなりに変わらないんですけど？

これで僕以外の誰かだしたら、誰なんだろうね？

とりあえず、思考能力は僕のモノだし、考え方のひねくれ方も僕のモノだ。

手を握る力も、まあ、多分僕のモノだろう。そんなのいちいち気にしたことないし。

「久遠！」

アリエナイー！忍迺が僕に向かって抱きついた？天変地異でも起こるのか？

それとも異世界に召喚……されてるんだっとな。

それにしても、ここどこだ？たしか記憶が飛んだときは森の中だったはず。

いくらなんでも忍迺一人でここまで担いで来るのは不可能に近いだ

るう。ちっちゃいころに、カブトムシにひっ繰り返されて泣いてたのを知ってるし。今だって50メートル走12秒ぐらいかかるのを知っている。

それでも体育の時間を笑って過ごせるのだから凄いと思う。

「お熱いところ申し訳ないのだが、いいかな？」

横を見ると、中世騎士のような格好をした金髪碧眼主人公然としたイケメンがいた。

こういう人を、主人公と呼ぶに相応しいんだろう。とりあえず、ピツクリするぐらいのイケメンだ。

けど、特徴を上げようとしたらそれぐらいしか見当たらない。印象がイケメンか。

「私の名前は、フラン。フラン・エグゾディア。陽光の国・トワイライトの騎士だ」

……いきなり突き付けられる、異世界というもの。さらに言うと、トワイライトというのがどんな国か知らないし、この世界がどんな世界であるかなんて知らない。

「君たちがサラマンドー……まあ死体なのだが、その横でその子が泣いているのを発見してな？私が保護したという訳だ」

「……………あろう？」

「む？なんだい？」

イケメンスマイルを向けるフランさん。

「その、トワイライトというのは？」

「なに！？知らないのか？」

驚愕している様子のフランさん。ヤバいな。しばらくは、いや、望めるのなら一生隠し続けたいよ。僕たちが異世界召喚されたことを。

「はい。田舎から出てきたもので。さらに言うと世間知らずなモノで、世の中の動向がちつともわかりません。そこらへんも教えてくださいと助かるのですが……」

苦し紛れの言い訳だ。よくある小説のうたい文句でもあるだろう。今、一番大事なのは現状把握だ。

情報がなさすぎる。あの鬱蒼と茂った森や、この人の鎧のような格好を見る限り文明的にもそんなに進んでいないだろう。よくて中世ヨーロッパレベルだな。

「ふむ、そうだったのか。ならば、教えよう」

スラスラと台詞を話すかのように言葉が止まらないフランさん。説明を聞くと

「この世界は今、混乱の極みだ。大陸、アクト大陸の中央では四
大国、北の龍族が治めるロンガン。東のアンデッドが治めるクルー
シオ。南のエルフが治めるフリージア。そして西のヒュームが治め
るライブド。その四つの大国が大陸の覇権を握らんとして戦争に明
け暮れている」

あれ？トワイライトは？

「あの、トワイライトは？」

「ああ、小国なんだよ。ちょうどライブドとフリージアの西側にある、小さな国さ」

少し彼の顔に影が差す。え？地雷だったのか？

「まあ、それは置いておいて。さらに重要なのは、この大陸は存亡の危機に立たされている。四大国の東に広がる、神帝国・アルカディア。神々とそれを信仰する者たちの超大国が大陸の半分以上を占めている。その国が、最近動き始めたのだよ」

なるほど。僕が欠陥落ちこぼれ魔導士に呼ばれたのはその国の所為ってわけか。

「圧倒的国力を持って、侵攻してきた。それで、永久中立国だったエターナルも重い腰を上げた」

「ちよつと待って下さい？エターナルと言うのは？」

「ああ、やはり知っている程で話してしまうよ。エターナルと言うのは原初の種族、神々から最初に生まれた種族が治める国でね？アルカディアに及ばずともかなりの戦力を保有している超大国さ。けど、ずっと昔から戦争をしていなくてね？今回の事でやっと腰を上げたんだ。その治めている種族の名をアルケミス。最強の種族だ。数は少ないんだけどね？その力は神にも及ぶといわれている」

どんな種族だよ。今までの種族は名前で分かったけど、今度のは分からないぞ？

「あはは。少し話し過ぎちゃったかな？まあ僕のいる国は多種族が住んでいる。あと、西の海にカグラと呼ばれる結構大きな国があるらしいけど、行った事がないからあまり分からないなあ」

カグラ？なんか日本みたいなのところなんだろうなと勝手に予測けど、なんとなくつかめた今の現状。

「君たちは見たところヒュームだね？」

「はい。ヒューム以外見たことがないんですが、見分け方とかがありますか？」

「そうだね。龍族は本当に龍の姿をしている者もいるがヒューム人型の者もいるよ。戦闘能力についてはアルケミストにならぶとも言われている。見分け方は、体の一部に鱗があったり、龍の面影があったりするものだね。アンデッドは、ちょっと言い方が悪いかもしれないが、どこか腐っていたり、逆に人そのままだったり。見分けは結構付きにくい。まあ、匂いを嗅いだら分かる奴もいるがね？エルフは耳がとんがっていたりほっそりとした体形の者が多いところぐらいだね」

「アルケミストは？」

「個人によつて大分姿かたちが変わるらしい。まあ、他の種族以外の形をしていると思えばいいんじゃないだろうか」

なるほど。消去法か

この人、説明キヤラかな？

「そうそう、たしかエターナルが『神殺し』を異世界召喚をした

らしい」

僕と忍廻の方がびくりと揺れる
なるほど。元の世界に返してもらうためには、最強の国に行かない
といけない訳か

「けど、召喚の巫女が呼び寄せる座標を間違えたらしく、只今捜
索中らしいよ。はは、史上最強と呼ばれる巫女にもドジを踏む時ぐ
らいあったんだね」

あの性格で史上最強ですか……まったくもってうっとおしいよ。欠
陥で落ちこぼれどころか、天才で最強とはね？

「まあ、いろいろ分かったと思うが。で？君たちはどうするんだ
い？」

「……忍廻、どうする？僕は神速で史上最強の巫女とやらをぶつ
飛ばしてきたい気持ちなのだけねど」

「め、目が据わっておるぞ？」

当り前だよ。僕はともかく忍廻まで危険に巻き込んで。とりあえず
一発ぶん殴って引きずりまわして溶岩の中に放り込みたい気分だよ。

「えへあへ。あのへ、そのトワイライトに連れて行ってくれたり
しませんか？僕たちあてもなく旅をしようと村を出てきたものでし
て」

「（いい訳が痛すぎるぞ？）」

「（大丈夫。この人一周回って基本馬鹿そうだから）」

「うん？いいとも！ちょうど仕事がなくなったものでね」

仕事って……まさか

「君たちの横に転がっていたサラマンダーを討伐するのが今回の任務だったんだが、まあいいさ」

あのトカゲやるうか！

「あおう。あの、サラマンダーって強さ的にはどのくらいのレベルで？」

「ああ、あの大きさになるのは珍しいけど、サラマンダーだったら、下の中、強くても中の下だろうね」

なるほど。あいつは中ボス的な感じだったと。ダンジョン的になると「ふっはっは。俺が倒せるか？」一瞬で倒されるキャラの訳だ。泣きたくないね。強すぎじゃね？

「では、行こうか？」

「はい……」

「ん。頼むぞ」

こうして、僕の報復（笑）の旅が始まった

あの欠陥落ちこぼれ魔導士。絶対ふりくりまわしてやる！

九話・何このクソイケメン（後書き）

感想切に願うww

十話：マスター！（前書き）

ふむふむ、着々と、む？

では、どいぞー！

十話：マスター！

あれから僕の傷はみるみる内になおっていった。そんな自分を見て、本当に化け物になってしまったんだな、と感じてしまった。僕が化け物になるうがならなかるうが、世界にたいした支障など起こらな
いだろうが、僕の世界では大きな支障だ。

この、本物の化け物が、小さくて寂しがり屋な女の子のそばに居てもいいのだろうか？

今までは、なんとなくだけでもそばに居てもいいという訳ではないけど、そばにいたからと言って大した問題になるわけでもなく、漠然とそばにいた。

けど、ひよつとしたら、ふとした拍子にこの少女を粉々に破戒してしまうのではないかという恐怖がこみ上げる。そんなことが起こるのなら、怖いけど自分でこの少女のもとを去るしかない。

勝手にいなくなったら、怒るだろうか？悲しむだろうか？それとも無関心なのだろうか？

そんな考えが、頭の中をぐるぐると回り続けていた。

「久遠？どうした？気分悪いのか？」

「ううん。大丈夫だよ」

「そうか？」

今、僕たちは馬で移動している。既にトワイライト領には入っているのだが、狭いといっても一國。それなりに広がった。フランさんに大陸地図を見せてもらったのだが、トワイライトとはなんともまあ小さな国だった。周りの国がでかいのかどっちかは分からないが、小さいのは確かだ。

いや、やはりこの大陸の大きさ自体を知らない僕たちにとって、大きさを決めつけるのは出来ないのだろう。

それよりも、今の状況がなんとも、心境に悪い。

フランさんはトワイライトでもかなり強い方の騎士らしく、単独での任務だったそうだ。

首都があるところから結構遠いかったらしく、食事などの荷物を乗せた馬と自分が乗ってきた馬の二頭。

それはまあいいのだが。いや、やっぱり良くないのだろう。僕の理性がほとんど本能に浸食されていていつている。高校二年生としては、本当に普通の反応だと思う。逆に、よく我慢できているモノだと褒めてもらいたいぐらいだ。

「うん。町が見えてきたね。今日はあそこに止まることにしようか？」

朝から馬を進めて既に夕方。夜に平原を抜けるには結構な実力と度胸が必要らしい。油断すると、モンスターに囲まれてガブリ。想像したくもない。

「この馬、本当におとなしいな」

忍迺が乗っている馬の背中をペチペチ叩きながら面白そうに言う。

そうなのだ、馬に乗ったことのないはずの素人の僕たちは、最初は馬なんて乗れないだろうと思っていたが、荷物を運んでいた馬の方はよく調教されているらしく、全然暴れなかった。

フランさんが乗っている馬に触れた瞬間、強烈な蹴りが頭をかすめたのは気のせいだと信じたい。

「ふう。やっぱり、結構時間がかかるね？」

「すみません……」

「あ、いやいや。気にしないでくれ」

多分、フランさん一人でなら休憩の数も少なく、今頃には首都の方にもついているところだろう。

少なからずの良心が痛む。少ないので痛みは少ないのだが。

それは置いておいて、ついた町は僕たちが知っている町とはほど遠く、コペンハーゲンの田舎みたいところだった。コペンハーゲンを知らないのてただの妄想だけど。

「ま、デイブレイクには明日にはつくさ」

このトワイライトの首都の名前らしい。黄昏に暁か……。カッコいいのね。

町の前で馬から降りた。それからフランさんが街門の前でたむろしているおじさんにお金を少量（お金の単位を聞いていないので分からないが）渡すと、戻ってきた。

「今のは？」

「ああ。町の厩に預けてもよかったんだが、予算は限られていてね？ちよつとした節約さ」

なるほど。あの人たちに明日の朝まで馬の面倒を見てもらってわけか。けど、大丈夫なのだろうか？

そのまま盗まれたりしないのだろうか？

「ああ。そのところは大丈夫だよ。まさか、この国の騎士を敵に回そうだなんて思っちゃんないだろうか」

それもそうだ。ここで盗んで、どこかの町で偶然鉢合わせ。そのまま斬り捨て御免！みたいな感じはいやだからね。お金ももらったし、こういうのに少なからず慣れているのだろう。

「君たちはここで待っていてくれるか？宿を取ってくるから」

「はい。何から何まですみません」

「うむ。礼を言う」

「はは、どういたしまして。じゃ、少しだけ待っててね？」

そう言うと足早に去っていった。

「本当、あーゆー人が主人公だったらいいんだろうけどね？」

「人がいいな。それも天然で。計算などしてないだろう」

ああ。カッコいいなあ。それは羨望の眼差しではなく、感嘆の溜め息でもなく、ただの諦めだろう。

はは、この世界でもすぐに諦めますか。やっぱり、人間ってのはそう簡単に変われないらしいね？

ちよつと主人公っぽい事をしたからって、自分が背景然としていることは変わらない。

「普通の女から見たら、モノにしたいと思うのであるな」

フツツと自嘲気味に笑う忍廻。やっぱり忍廻もあいう人がタイプなのだろうか？だとしたら僕は諦められるだろうか？よく、分から

ないな。

「そうして、人の思いに流される。自分という意見がどんどん薄れていく。つまらん人生を送るか。主人公のように激流に逆らい、確固たる意志を持ち続けるか。見ものだな」

訂正。ただの腹黒メカニツクの様だ。

「まあ、僕様は飄々と雲のようにたゆたっている奴の方が、こ、好みかな？」

僕の方をチラっチラ見ながら言ってくる。うん、僕もそんな人になりたくないけど。雲のように流されるままに流されたりするのは少し嫌だからな。ちよつとばかしの対抗心と、ちよつとばかしの悪戯心を持ってして諦める。うんうん。僕にぴったりだな。

例えるなら。雲より風だね。誰かを流すってほどの力は持ってないけど、一緒に流れるっていうことはできるし。

「おい。ヒュームの姉ちゃん」

呼びかけられたのは忍廻なのだろうけど反射的に僕も振りかえる。そこには、ほっそりとした体形の人？がいた。いや、顔のところには鱗がある。これが龍族か。

その横には、普通の人。この世界ではヒュームと呼ばれるんだったっけ？それがいた。

こんな時代にも、ナンパってものがあつたんだな。

「なんだ？」

臆面なく言う忍廻。おいおい、あんまり挑発しないでくれよ？

「俺たちといいことしね？」

「男同士でやってる」

そっけなく返す。いや、だからさ。挑発はやめてよ？

「気の強い女は好きだぜ？」

「死ね、ウジ虫」

あ、言い放ってしまった。やばいやばい、額に青筋が。

「てめえ。調子に乗ってんじゃねえぞ！」

そのまま殴りかかってくる。考えるよりも先に手が出てしまった。僕のキヤラはどこへやら。相手の眉間に向かって、上段回し蹴りだ。あ、これじゃ足が出ただ。

「あぐぼッ!？」

「あ、アニキ!？」

すごいね。体が羽みたいに軽いや。超回復という奴だろうか？それとも、死の淵から戻ってきて強くなる定番のあれか？

「あゝ、すみません。もうしません。もうしないので消え失せてください。今度は違うことをしそうです」

矢継ぎ早にそう言うと、ヒュームの人は顔を青ざめさせて龍族のア

ニキと呼ばれていた人を担ぎ、さっさとどこかに行ってしまった。

「おお。流石は神殺し殿だな？」

「……はあ。少しは後先考えてよ」

「大丈夫。僕様は久遠を信じてたから」

にっこりした笑顔で言われるとカンチガイしてしまいそうだ。こっちはそつぽを向いてしまう。

そのそつぽを向いた方に、フランさんの姿が。

「待たせてしまってすまない。何かあった？」

「いえ、別にありませんでした」

「この通り、平和な限りだ」

大法螺ふき。何かあってそれを排除した後だ。まあ、問題はなかったのでもいいか。

「宿がとれたから行こうか？」

「はい」

そういつて、ゆっくりした足取りで宿を目指す。

宿に着くと部屋割について話された。

一応二部屋取ってくれたらしい。なんとも、いい人だ。

「僕様は久遠と二人で構わんぞ？」

「僕の理性が持つかどうか分からないので却下だ」

「ん？二人は恋人か何かじゃなかったのかい？」

な、なななな、何を言うかこの人は！？

ぼ、ぼぼ、僕と忍廻が恋人？いや、僕としちゃうらしい限りなんだけど。

忍廻が顔を真っ赤にして、恥ずかしがっている。ほんと、こういうところでは普通の女の子だ。

「違うとだけ言うっておきます」

「けど、仲よさそうだし。それに……。うん、やっぱり二人で一つの部屋の方がいいと思うよ？」

この人は、何を言っている？そもそも何を考えている？いや、読心術が出来ないからこの人でなくとも分からないけど。

「ふむ、そうしようそうしよう。フラン。名案だな」

「グッ」

今のは苦しむ声じゃない。フランさんが親指を思いつきり立てた音だ。

名案どころか愚策だろ!?

「じゃ、荷物をおろしたら、久々にか分からないけど、あったかいご飯を食べよう。ちよつとしたら降りて来てくれ」

「はい」

ああ、気だるすぎる。今日一日生殺し状態か……。悲惨だな。そのまま宿の二階に上がり僕たちの部屋を確認すると。

「何かの間違いの様だ。ベッドが一つしかない。よし家具屋さんに頼んでベッドを用意してもらおう」

棒読み。あのイケメン騎士やろう!これのどこが名案だ!

「ふむ。あいつもいい仕事をしておる」

どこがだ!それにこの部屋を仕立てたのは多分この街の家具屋さんだ!断じてフランさんじゃない。

「……なあ、久遠。今思ったが、僕様たちなんで、この世界で言葉が通じているのだろうな?」

……あれ?なんでだろう?

『お困りの様ですね!』

「うわ!？」

頭の中に響く比較的高い声。あの時の声と一緒にだ。

「どうした？久遠」

「どうしたもこうしたも、聞こえなかった？」

「なにがだ？」

まさか……

『そのとおりです！自分の声はマスターにしか聞こえてまっせ
くん!』

まじでか……。ん？マスター？

『自分、貴方の世界の神々からあなたをサポートするよう頼まれ
た式神でっす!』

……随分とエキセントリックな式神もいたもんだな。

『ん？自分の事に文句があるっすか？折角教えてあげようと思
ったのに』

教えてくださいお願いします。

『ん。いいでしょ』

……この傲慢大馬鹿者め……

『聞こえてますよ？ま、言語が通じるのはこちらの世界に来る際に神様があなた方に共通概念語を使えるようにしてくれたツ。共通概念語はどの世界でも自分の知っている言語をベースに話したり読んだり書いたりすることのできる力です』

はあ。ほんやくこんにゃみたいな感じですか。で？君にはこれからもお世話になりそうなの？

『もちろんっす！この世界の習慣とかその他いろいろ。戦闘に關しても任せてくださいっす！あと、生殺しがいやなら自分が実体化して夜伽も可能っすよ？』

いや、最後のはいらんな。で？それだったら、なんで僕が最初ぼこぼこにされるまで出てきてくれなかった訳？

『あ、あはは。寝てたっす！』

なあ。どうやったたらお前を僕の頭から追い出せる？ああ、実体化できるとはな。きるんだったね？

今すぐ実体化してよ。とりあえず引きずりまわすからさ。

『ごめんなさ。い！許して下さい！自分の頼みっす！』

……はあ。分かったよ。これから先長いんだろ？
なら、名前教えてよ。

『そりゃ、マスターがあつちの世界で生まれた時から一緒ですから！これから死ぬときまで一緒っす！』

それにマスターって呼ぶな。名前で呼べ名前で。

『……いいんすか？神様方からは、どんな要求にでも従えって言われてたっすけど……』

僕はそんなにひどい奴じゃないよ。ただ、忍廻を護るためだったら手段を選ばないだけだ。

『忍廻さんは、マス、久遠様に愛されて幸せっすね』

今度は様付かよ……。ま、いいか。

あと、その背中がむずかゆくなるような愛しているといっつのをやめてくれない？

恥ずかしくて、悶え死そうだ。

『……いっすね。忍廻さんは。羨ましいっす……』

ん？なんか言ったか？

『い、言っでないっすよ！？何にも言っでないっす！』

なんでそんなに焦ってんだか。じゃ、シキ。

これからもよろしく頼むよって言っておくよ。こっちの世界に呼ばれたのは不本意だけど、まあ、手早く帰れるように頑張ってみるぞ。

『……はいっす』

ん。そういえば、回線とかブチれるのか？

『出来るっすよっ』

じゃ、きつといてくれ。恥ずかしいから。

『いざという時、自分が昼寝していたらそのまま死亡っすよ?』

む。それも困るな。分かったよ、そのままでもいいよ。

『了解っす』

なんで楽しそうなんだか。

『じゃ、用があるときは気軽に読んでくださいっす』

あいあゝい。

「久遠！」

「つとお!?!いきなりどうしたの?」

忍迺が僕の前でプルプル震えている。

どうしたのかな?トイレか?

「いきなりとはなんだ!僕様がずっと話しかけていたというのに」

ふむ。シキと話しているうちは周りへの注意が怠るのか。これは要注意だな。

「ああ、もういい!で?心当たりはあるのか?」

「ああ。多分神様のご都合主義パワーでも働いてるんじゃないか

な？」

「そうなのか？」

「そうなんですよ」

まあ、シキが説明したのを一言でまとめると 神様パネエ ってことだろう。

「そろそろ降りよう。フランさんが待ってるかもしれないし」

「ふむ、そうじゃの」

そうして木張りの床のギシギシという音を聞きながら一階に降りると

「ん。そこらへんの席に座ってよ」

案の定フランさんが待っていた。進められた席に遠慮せず座る。

「注文はなににする？」

メニューには、『ボルゾイのクリームソース和え』『ホボラスのオニオンスープ』などなど、前半部分が全く見当もつかない食材が使われている料理が陳列されていた。むむ。どうすればいいかな。まあ、宿で取り扱っているのだから変な料理は出ないだろうけど。

「あの、お勧めとかありますか？」

結果、ギャンブルに出るのはやめた。そういうチャレンジ精神はあんまり持ち合わせていない。

「ああ、『ホボラスのオニオンスープ』なんかおいしいと思うよ？パンを浸しながら食べるとなお美味しいよ」

ホボラスってなんだ？もうよく分からなくなってきた。

「なら、それでお願いします。忍廻は？」

「ん。同じでいい」

「うん。じゃあ、ホボラスのオニオンスープ二つと、パン。ボルゾイのクリームスープ和えで」

ふむふむ、こういう風な料理なんだろう？

そうだ、運ばれてくる間に聞いてみよう。シキに聞けばわかるかもしれないけど、コミュニケーションも大事だ。

「あの。お聞きしたい事があるんですが」

「ん？なんだい？」

「僕たち辺鄙な村で暮らしていて、外部との関わりがほぼなかったんです。それであんまり分からなくて、よかったら教えていただけませんか？この世界について」

「そうなのか。じゃあ、この前世界の情勢については話したよね？」

「はい」

「じゃ、今度は身近なことについて。知ってるかもしれないけど、この世界には共通通貨がある。一番下が銅貨。その次が銅貨百枚分の価値の銀貨。その次が銀貨百枚分の金貨。で一番上が金貨千枚分のミスリル貨。まあ、これは滅多に見れるものではないけどね?」

ミスリル!?あの、ミスリル!?そういえば、ミスリルとアダマンタイトとオリハルコンってどれが一番堅いんだろう?

「普通の民家の月収が銀貨十枚ほど。一食当たり銅貨三枚ってところだね」

一日十枚銅貨を使うとして、一カ月で三百枚。食費は三割ほどか。結構飛ぶな。

あ、そういえば、この世界の暦は?

「この世界の暦は、1〜12までで、一年三百六十日。四年に一度、双樹年と呼ばれる年がやってきて、その時は13ヶ月目、一週間だけだけでもやってくるんだ。って、はは。それぐらいは知っているか」

いや、すごく役立ちますよ。うん。どんどん常識が身についてくる。

「っと、料理が来たみたいだね?続きはまた今度にしようか?」

「ありがとうございます」

運ばれてきた料理からは、なんともいい匂いがしてくる。食欲をそそるいい匂いだ。

見た目は、ホボラス？かなんか分からないが、どうみても魚だ。ボルゾイは貝だったらしい。巻貝の様だ。パンは普通にフランスパンもどき。

「じゃ、いただきます」

「イタダキマス？」

あ、しまった。こつちにはそういう習慣がないのか。当り前か。日本を離れたらあんまりない習慣だし。異世界となればなおさらだ。

「あ、僕の村に伝わる儀式です。食事になったものに感謝の念を示すんです」

「そうなのか。素敵だね？」

皮肉でも何でもなく、本当にそう思っているらしい。

「じゃ、私もその礼儀にしたがおつ。こつでいいのかな？いただきます」

ふは。偉い人だ。こついう人に男女問わず惚れるんだろうな。

ま、それは置いといて、食べようかな？

まずスプーンで一掬い。それを口に運ぶ。コクリという音と共に喉の奥に落ちていく。

美味しい。心からそう思えた。

うん、これはいける。パンを浸してもおいしいというのは本当だったようだ。

オニオンスープはオニオンスープだが、魚の出汁がすごく合う。香

ばしい匂いがさらに食欲を掻き立てる。
そうして、最後のスープを飲み干すと。

「ごちそうさまでした」

あう。また、やってしまった。癖なんだし、仕方ないか。

「ん？それもかい？なら、ごちそうさまでした」

ほえ。ほんと、律義な人だな。

忍迺も食べ終えている。

「ん。支払いは済ませておくから、今日は疲れたろう？部屋でゆっくり休むといいよ」

……やばい。ほんとにいい人だこの人。今の日本にはこんな奴いな
いだろ。

「お言葉に甘えさせていただきます」

「む。ありがとう」

「どういたしまして」

にっこりとほほ笑むフランさん。

そして、また木張りのギシギシと言う音を聞きながら二回に上がり
部屋に入ると、そのまま布団に突っ伏した。久々の布団の気がす
る。馬には乗っているだけでもつかれるのだ。

あ、やば……ねそ……

「む？寝るのか？」

「ん…………おやすみ…………」

相当疲れてたみたいで、忍廼も布団に突っ伏すとウトウトしました。今は春なのだろう。心地よい気温が僕たちを包み込む。
ああ、これから、どうしよ…………

十話：マスター！（後書き）

もう、疲れた

感想待ってます

十一話・言い忘れてた(前書き)

短め

では、さようなら！

十一話：言い忘れてた

早くから寝てしまったから、夜中に目が覚めてしまった。横では忍廻が気持ちよさそうに祝水している。大部疲れていたんだろ。はあ、可愛いな……。

けど、いつもみたいに気分は昂ぶらない。慣れたのだろうか？ だとしたら非常に贅沢な慣れだな。どうでもいいか。

忍廻のサラサラとしたこげ茶色の髪をなでて起き上がる。忍廻を起ささないようにゆっくりと。

「……月は、二つか……」

外に出て夜空を見上げると目に入る、二つの月。紅と蒼だ。非常に大きい。手を伸ばせば届くかのような錯覚に陥る。これを見ると、本当に異世界に来たんだと思い知らされる。僕はあの世界でちっぽけな存在。いなくなったとしても大した話題にすらならないだろう。

けど、忍廻はあの世界にとっての希望と言ってもいい。忍廻のお陰で世界の仕組みは大きく変わった。

けど、そうやって忍廻は自分たちとは違うからと言って、忍廻から一歩引いた目線で忍廻を見ている人間が全員だった。そうやって、忍廻は一人になっちゃったんだ。

忍廻にとって、こっちに来たのが良かったことか悪かったことか分からない。

もしかしたら、既にあの世界の事は知りつくしていて飽きていたのかもれない。

けど、時々見せる屈託ない笑顔は周りの人たちを幸せにしていた。あの笑顔は、偽りだったのだろうか？

「……馬鹿馬鹿しいな……」

忍迺があの世界に飽きていたかどうかなんて今となっちゃどうでもいいことだ。

要するに僕も、忍迺を護っている自分が好きだっただけなのかもしれない。純粹な愛なんてないのかもしれない。ただの自己満足なのかもしれない。

それも、最初っからどうでもいいことだな。

「フツ！フツ！」

どうしたのだろう？こんな夜中にハッスルって。まさか……外ではないよな？

少し興味を持ち、声のする方にふらふらと歩いて行くと、

「ん？ああ、すまない。起しちゃったみたいだね？」

フランさんがハッスルしていた。洗練された剣を持って剣をふるっていた。

「ああ、気にしないでください。早くに寝過ぎて、起きてしまっただけですから」

「そうなのかい？これは日課でね、やらないと寝れないんだ」

なるほど。僕が寝る前にいつも枕を抱きしめて寝るのと一緒か。ん？違うか？

剣、か……。よし。

「あの、僕に剣を教えてくださいませんか？」

「え？君が？」

「……………どうしても、生き残りたいんです。この世界で。護りたいものがあるんです……………」

多分、これまでも、これからも、一つしかない。

これだけは、諦めたくない。諦められない。

「……………よし！今日は遅いから、明日からにしよう。いいかな？」

「お願いします！」

ああ。もう、ほぼ僕のキャラじゃないや。どうでもいいか。

僕のキャラが変わろうが、たいした問題じゃない。

けど、なんかすっきりした気分だ。その何かが分からないんだけど。

「じゃあ、私はあと少しばかり鍛錬をしていくから。明日は多分早いから、寝ておいた方がいいよ」

「はい」

そうして、木張りの床の音を聞きながら、部屋に戻る。

なんだろう？今さっきまであんなに眠くなかったのに、今、大分睡眠魔が襲ってきた。

ベッドの方を見ると忍廻は相変わらず気持ちよさそうに熟睡中だ。

髪を一撫でして、僕も布団をかぶる。ベッドは大きいので、二人入っても全然問題ない。

最近、髪をなでるのが癖になってきたな。忍廻は知らないけど。

「じゃ、おやす」

みは、布団の中で。

「……………言い忘れておったな……………助けてくれて、ありがとう……………」

忍迺の小さなつぶやきは久遠の耳に入ることなく、異世界の空に消えた。

十一話・言い忘れてた(後書き)

あと、ちょっとなんだあああ！

感想待ってます

十二話・壊したい(前書き)

はいはい。こんな小説ですとも

では、ごんごんー！

十二話：壊したい

「ぐへえ!？」

なんともまあ情けない声をあげているのが誰かと言つと。

「速さは素晴らしいんだけどね」

僕だつたりする。そう、フランさんに剣の稽古をつけてもらっている。

基本は夜。フランさんの鍛錬のついでに教えてもらっている身だ。素人の僕の相手をして何の経験にもならないだろうが、それでも稽古をつけてくれるフランさんは善人だろう。

「よし、もう一本!」

何とか痛みをこらえて、剣、まあ木刀だけ。それを不格好に構えて突っ込む。

神様補正のお陰で速さ、パワーはかなりの速さになっている。が、フランさん、かなり強い。

「おお、見えないよ」とか言いながら軽くあしらわれる。フランさんいわく「いくら速くても来る場所が分かっていたら迎撃するのは簡単だ」だそうだ。

知られているというのが分かっているても、そんなことをしたことがない僕にとっては

「ぐはっ!？」

とりあえず、同じことの反復しかなかったりする。けど、剣道やっ

てなかった割には、結構筋いいんじゃないか？と自己満足している。ああ、痛い。腹を押さえて転がりまわる。ちなみにこれでチャレンジは十回目だ。

僕汗だくなのに対しフランさん涼しい顔。嫌味ではないんだろう。けど、やっぱり悔しい。

「立てるかい？」

「あ、あい」

ちよつとグロッキー。今の腹への攻撃は、クリティカルヒットだったようだ。

「ん〜。今日はどうするっ？」

「ま、まだ、まだやります」

「……よし。来い！」

けど、やっぱり

「ぐほッ!？」

同じような感じで。今度こそ沈没した僕。ぐうの音も出ない。ああ、痛い。

「速くて力もあるんだけど、経験がないね？そつ言つのが大事になつてくるよ。あの子を護りたいのなら」

「な、にやにを!？」

何を言っているんだこの人は!?

「ふふん。私の勘さ」

ちくしょうめ。自分に対しての感情になら鈍そうなのに。

「ま、あながち間違いじゃなかった訳だ」

くっそー。このクソイケメンめ! かま掛けやがったな!

「はは。明日も早い。もう、寝るといいよ」

「あ、あい」

……年上の、貫禄か? それに完膚なきまでにたたきつぶされた。身体的にも精神的にも。

今は野営している。今回は町らしきところが見えなかった。フランさんが警戒してくれるらしい。

そこまで治安が悪いところなのだろうか? あ、モンスターか。

『こちらの【神】もいるっす!』

そおい!?!いきなり出てくるなよ。シキ。

『こちらには、圧倒的力を持った神以外にも、獣神、九十九神、魔神、等々ポピュラーな神もいるっす』

神がポピュラーって……。

その全部が敵なわけ?

『うつす！時々奇特な神もいるらしいっすけど、基本敵っす』

あれ？けど、あつちの神様だってこつちの世界から生まれたわけだし、なんかおかしくね？

『最近、久遠様がいた世界に神は現れなくなっただすよね？』

いや、最初からいたかどうかも分からないんだけど。

『こつちが原初の世界だということは知ってるっすよね？』

うん。あの欠陥落ちこぼれ魔導士から聞いたよ。

『こつちの世界からあつちの世界へ。あつちの世界を創造するときに、こつちの世界の神々の力も借りたっす』

……少し、話がつかめてきたぞ。

『あつちの世界を創造した後、こつちの世界に戻った神もいれば、あちらの世界に残った神もいるっす』

なるほど。神話で語り継がれている神々は残った方の奴らだと。

『けど、だんだんとあちらの世界に残った神々の中でも意見が分かれてきたっす』

え？どんな？

『混沌と、あちらの世界を神々の遊びの場にしようとするもの。』

調和、あの世界に住むもの全てが幸せには出来ないっすけど、住人それ自体の力で暮らせるようにするもの』

前半部分の神、なんとも自己中だな。自分たちで作ったんだから自分たちの所有物説か。

『それで意見が割れて、こちらの世界に戻ったっす。混沌を望んだ神の代表例は戦神・アレスとかっす』

わ〜。知ってるその名前。名前の通り、戦の神様だ〜。で？そいつらを皆殺しにしたらいいの？僕、帰りたいんだけど？

『それで、こちらの世界に戻った神々は、今度はこちらを自分たちの所有物にしようとしたっす』

あ、無視？

『そしてあちらの世界に残った神々はそれを聞いて激怒するわけっす。で、こちらの世界に戻ろうとしたら、結界、神でも通れない結界を施してたっす。それで、久遠様の出番と』

あれ？あの欠陥落ちこぼれ魔導士、神々との契約とか言ってたけど？

『ああ、それもあるっす。昔、もしそっちの世界が神々の所為で荒れたら、神殺しを送ると。口約束っすけどね？けど、神様は約束にはシビアっす。ちゃんと護って、久遠様に神殺しの力を与えて、召喚魔法で召喚させた。その召喚魔法はですね？あちらの神とこちらの召喚士の間直通の道を繋ぐもので、こちらの神々には干渉できないわけっす。けど、当代の巫女さんは、おっちょこちょいのようで、数人巻き込んだみじやっただけっすけど』

やっば、あいつ欠陥落ちこぼれ魔導士だわ。

『で、久遠様の目的は、神様を沈黙させることっす』

沈黙？

『まあ、倒すことと同義っす。その神殺しの力をもってして、神様を倒すと。そうすればこちらの神様の力が弱まり、あちらの神様方が、こっちにやっつてこれると』

神様ってどんくらいいいの？

『 億っす』

よし帰ろう。なんで地球人口よりも多いんだよ！

『ああ、大丈夫っすよ？この数は総勢っすから。最下級の神も含めたらのことっす。世界渡りに干渉できる最高位の神の数は、ほんとなんて数えるほどしかないっすから』

いや、いやまてよ？ 億分の数えるほどだろ？どんだけ強いんだよ？

『グーパンで山が吹き飛ばっす』

は？

『蹴りで海が割れるっす』

アルケミストは？

『あの者たちは、異端っす。力の塊、とでも言っておくっす。個体が少なく、その力は一人一人が神と同じっす』

だつたらこの世界はとつくの昔に滅びてんじゃね？だつて 億
だろ？無理じゃん。

『言つちやあなんすけど、最高位以外の神は、カスみたいな神もいるっすよ？それこそ自分はこれでも高位の神っすけど』

ええええええええ！？高位！？まさかだろ！？違つと言えよ！

『ほんとっすよ。頑張つたら山とか吹き飛ばせるっす』

そんな馬鹿なあああ！！マジでかあ。今度からシキ様と呼ばせてもらおう

『最高位の神様から頼まれたっすから。大丈夫っす、力を解放した久遠様の方が数倍強いつすから』

はあ。そうですか。

『と、いうわけで、弱い神もいるという訳っす。最下位の神は素手で倒せるっす。中位ぐらいになると種族の中でも強い奴じゃないと倒せないっす。高位ぐらいだと英雄と呼ばれるもの。最高位だと一対一で伝説と呼ばれるものぐらいっすかね？』

はあ。そうですか。

で、最初の問題に戻るけど、神様ってのはどこにでもいるわけ？

『そつすね。基本的に。獣型の神なんてのは中位ぐらいからですね。犬神なんてのも獣神つすね』

めんどいな。ようするに僕は神話的な奴らを相手にしなければならぬと。

もう帰ってもいいですか？

『自分のキャラを取るのはやめて欲しいつす。帰ったらダメつすよ？こつちの世界を掌握した神々があつちの世界に攻めてくるつすから』

はあ。前進も後退もできないと。なら、ヒキニートまっしぐらだな。家にこもって布団かぶってガツクブル震えてるよ。

『ダメつす！自分と一緒に頑張るつすよ！』

もうちよつと主人公公然としたやついるだろ？フランさんとか、フランさんとか。

『とにかく、頑張るつす！いいとこ見せて、忍廻さんにアピールつす！』

あーあー。忍廻はそう言うのには絶対になびかないよ。クラスで一番のイケメンを「死ぬ、ウジ虫」で片づけた女の子だから。

『うむむ。久遠様は鈍感と見たつす』

え？なんか言った？

もう一度今度は耳のすぐそばで言ってほしいんだけどな。

『あーあー。忍廻さんに殺されそうっすからいやっす』

ほんと、式神か？

『式神っす。神様方から力を分けてもらって強くなった式神っすへへ。いろいろあるんだねへ。』

式神のイメージとして、ことう人形のうすっぺらい紙が思い出されるんだけど？

『ちがうっす！自分はキュートでセクシーなダイナマイトボディを持ったウルトラ美少女っす！』

なるほど。あんまりに胸がぺたんこなものだから現実と反対の事を言いたがるのは分かるけど、現実と向き合うのも大事だと僕は思うよ？

『ぺたんこは酷いっす！双山っすよ？』

あー。はいはい、分かったよへ。分かったから。僕はもう寝るとするからねへ。

『ぐぐの音も出ないようにしてやるっす！』

ぐぐ。おやすみへ。

『~~~~~!!?』

はいはい。怒らない怒らない、焦らずに焦らずに。

『ふん！おやすみっす！』

あゝ、拗ねた。

「忍迺は、寝てるよな。うん、寝てる」

夜中ということもあってか、ぐっすり眠っている。

可愛いな。壊したいぐらい可愛い。

押し倒して、破壊衝動に身を任せて、滅茶苦茶にしたい。

けど、したくない。自分の中で起こる矛盾。

大好きなのに、壊したい。ずっと、あった時から胸にしまっている

劣情。嫉妬なのだろうか？

嫉妬なんだろう。我慢できないなら、もっと我慢すればいいだけの事だ。

さらさらしたこげ茶色の髪を一撫でして、その日も眠りについた。

十二話・壊したい（後書き）

僕には、文才がないのか！？ないんだろう

感想待ってます

十三話・何この状況笑える（前書き）

笑えねえし

では、どいぞー！

十三話：何この状況笑える

あれから数日。僕は毎晩フランさんに稽古をつけてもらった。最初はどうしようもできなかった攻撃（本人にとっては攻撃にすらなっていないだろうが）を避けられるようになった。まあ、こちらの攻撃はいまだかつてかすった事さえないけど。そして、ついに。

「ようこそ。あれが首都、ダイブレイク（暁の街）だ」

感嘆。すぐにその言葉が頭を駆け抜けた。整備された石造りの道路。しっかりとした家々。そして、活気のある人々。そのすべてに、感嘆の息がこぼれた。

「一応ダイブレイクについたけど、これからどうするの？」

「……どうしよう」

「決めてなかったのか久遠？」

そうだよ決めてなかったんだよ。とりあえず、欠陥落ちこぼれ魔導士はふりくりまわすと決めているんだけど、それ以外は全く。

「ほんと、ダメ人間の象徴のような男だな？」

「あう。」

それを言っちゃあおしまいだよ。そもそも、そういう頭脳労働は忍迺の方がいいと思うけど？僕なんか成績良くても上の下。体育は

まあ、それなりに良かったけども。

「うん。私が生活の面倒をみるわけにもいかないし」

ですよ。僕たちもそこまでお世話になるわけにはいかないんですよ。今までも面倒をおかけしているわけですし。

「うん。あ、そうだ。ギルドに入ればいいんだよ」

『ギルド？』

僕と忍迺の声が同時に重なる。まさかゲームの中みたいな場所があるなんて。イメージとしては、こう酒場みたいなところに粗暴な野郎どもがたむろっていて、今日も生死の狭間の中で依頼を達成する感じ？

「うん。依頼をこなして報酬をもらうところ。クオンくんは結構腕が立つから、そこで十分食べていけるよ」

んな馬鹿な！あなた、そんなこと言って僕の事さんざんぼこったじゃないか！いや、それが厚意ですけど。

「なあ、フランよ。魔法とかあったりするの？」

「魔法を知らないのかい！？」

あるんかい！？いや、神様いるからあるんだろうけど。マジでか！？イヤ本当に？嘘ではないよね？ね？憧れだよそりゃもう。男の子、いや、子供ならだれもが一度は夢見る甘い幻想だとも。

子供のころ、忍迺と千里さん（まあ千里さんは魔法っぽい事が普

通にできるけども」と一緒に、そう言う系のごっこ遊びをやったよな。

「うーん、教えてあげたいんだけど、そろそろ私の方の時間がかなり押しててね？報告に行かないと、ヘタしたら首に……」

「あ、いやいや。お気になさらず。大丈夫です！今までありがとうございました！」

「礼を言っぞ」

忍廻と二人揃って頭をぺこりと下げる。これは本当の感謝の念だ。本当、見ず知らずの人間をここまで面倒みってくれる人はまずいないよ。本当に、暖かい人だった。

「い、いいいいいよ。こう、改まれて言われると恥ずかしいな」

頬をぽりぽり掻きながら恥ずかしそうに視線をそらすフランさん。粗暴な男がやっても気持ちが悪いだけだが、ここまでイケメンだと言になる。

「じゃ、困ったことがあったらいつでも、トワイライト近衛騎士団長・フラン・エグゾディアを頼ってくれ！」

胸を張り、拳を作ってボンツと叩くフランさん。なるほど、通りで強いわけだよ。騎士団長だもん。ここまで上司の人が良いと、部下も変な意味でお困りの事だろう。

「じゃ、またね？」

「はい、ありがとうございます」

僕はまたぺこりと頭を下げ、フランさんの後姿を見送った。

本当、カッコいい人だった。何から何まで、全ての動作にカッコいいとつけても支障ないほどカッコよかった。

けど、そんな感傷に浸っているのもここまで。現実問題、ゲームの中のようにセーブだけしたら命が繋げるわけではない。ちゃんと働き、食事代や宿代も稼がないといけないのだ。

「ああ、そうそう。ギルドはあの大きな建物だから。じゃ、またね」

フランさんが戻ってきたかと思うと、最後まで親切な人であったいや、最後になるかどうかは分からないけど。

あの、建物ね。かなり大きい。街に入った一本道の先に、大きな広場がある。さらにその奥の方にお城が見えるわけだが、その次に印象を持つのがその建物。広場の中央にどっしりと構えた、白い石造りの建物。その建物の中には、人がひっきりなしに出入りしている。その人々の中には、大きな剣を背負ったものや弓をもったもの、ハンマーや斧を持ったもの。いろいろだった。

「忍廻、とりあえず行こうか？」

「うむ。そうだな」

そう言ってこちらに手を伸ばしてくる忍廻。何の冗談だろうか？忍廻がこちらに手を差し伸べている？これはまた、すごい幻想だ。

「ま、迷子になるからだぞ？他意はないからな？」

なるほど。そういう意味か。忍廻も顔を真っ赤にして恥ずかしがってるけど、自分の身の安全は確保したいと。古典的ではあるが、まあいい手だろう。それに忍廻は背が低いから（150ほど）（僕175ほど）と一緒に居れば安全だしね。

「分かったよ」

僕も手を握り返す。ああ、こうやって握ってみると柔らかいな。いっつもペンチやドライバー、工具類を持ってたから硬いと思ったけど、全然普通に柔らかい。

それから、人の波をかき分けながらギルドの中に入る。そして、受付らしき人の前に来る。

「あの……」

「どうしたのでしょうか？」

営業スマイルよろしくの可愛いと言える女性だ。僕たちの格好がまったくもって冒険者に見えないからだろう。迷子にでもなったかのような目で見えてくる。

「その、登録って誰でも出来ますか？」

「あ、はい。登録ですね？こちらの書面にお名前を書いていただければ誰でも我がギルドに加入できます」

少し焦ったように、仕事に戻る受付嬢。僕たちがまさかギルドに入るとは思ってもみなかったという顔だ。僕たち自身もまさかだったけどね。

文字は、そうだな。シキが言ってた共通概念語とやらで書けるよ

うになつていた。神様マジチート。

「はい！これであなた方もギルドの一員でございます！アクト大陸トワイライト支部以外での活動も認められるので、存分にその力をお振るいください！あと、これがその証明書です」

出されたのは、今書いたばかりの名前が彫りこまれたカード。身分証明書の様なものだろうか？それに、支部つてことは、大陸中にギルドがあるつてことだよな。

「あの、ギルドの仕事つて言うのが良く分からないんですけど」とりあえず、無難な質問を試してみた。今さっきまでギルドの存在すら知らなかったのだ。仕方ないだろう。

「はい。ギルドの仕事は大きく分けて三つ。『狩猟』『採集』『護衛』です。狩猟と採集は、あちらの掲示板に張られたものを達成していただければ結構です」

受付嬢の方が指さした先には、さまざまな人がたむろしている、いや、探しているというべきか。その人だかりの前には、いろいろな紙が張られている。イメージとしては、ゲームのまんまだと思う。

「護衛については、一定のランクに達した冒険者様の方のみに開示させてもらっております」

やっぱり、ランクというものが存在するらしい。やはり、ベターな感じとしてはSクラスとかだろうか？

「開示条件はBランク以上の方です。ちなみにランクはF〜Sま

であり、仕事の達成度によってランクが上がります。ランクが上がることによって、ギルドの対応も変わっていきますので、楽しみにしてください」

実力主義か。ああ、めんど。久しぶりのめんどいだよ。実力によつて対応変えるとか、まじめんどい。英雄とか伝説級になつてくると、Sランクなんだろう？ああ、めんど。

「初心者の方には、こちらのような仕事がありますか？」

受付嬢が見せてくれたのは『ハニーラビット10頭討伐』や『薬草10束採集』などだ。討伐といえば生き物を殺すということだ。偽善だが、生き物を殺すのはやはり気が引ける。あのサラマンダーのときは興奮しすぎて分からなかったが、あのあと酷い吐き気が襲つた。ヘタレだからね僕は。

「うーん。どうでしょうか。ハニーラビットって強いですか？」

「個々では虫けらの様ですが、集団で襲われると少し危険です。時々異常発生し、一つの街が食いつぶされたという記録も残っています」

わあ。すごい記録ですねそれは。

「あ、あと、モンスターの素材などはこちらで買い取ることできますので、剥ぎ取りなどをするといいかもしれません」

いや、殺すだけでも抵抗感がバリバリなのに、剥ぎ取るって……。

「久遠、ウジウジ、ウジ虫のようにしていたらウジ虫と呼ぶぞ？」

「いや、それは勘弁」

「????」

受付さんも僕と忍廻の関係を不思議に思っているようだ。傍から見たら恋人同士に見えなくもないだろう。近くから見れば、なんだこれ?である。

「出来るだけ報酬が高いものがいいんですけど」

「でしたら、やはり討伐系ですね」

やっぱり、生きていくうえで生物を蹂躪しなくちゃいけない場面は多々ある様な世界のように。現実に打ちのめされる。

「分かりました、ハニーラビットの方の依頼をお願いします」

「はい。依頼の方は原則ここに書かれた期間内をお願いします。これは初心者用の依頼でギルドからの依頼ですので、期間はありません。狩った際には、そのモンスターの体の一部が必要ですので、ハニーラビットは角となっております」

どうしても、解体作業は必要なようで。僕みたいななよなよな人間にはキツすぎる。

「狩れば狩るほど報酬も上がりますので。あと初回加入金として、お一人様五銀貨となっております。どうぞ、こちらです」

二人合わせて一カ月分か。かなり太っ腹だなギルドって言うのは。

もつと裏で手をまわしてあくどいことをしているとばかり……まあ、今でも思ってるけど。

「それでは、大精霊のご加護があらんことを」

今、新単語を耳にしたぞ？後でシキに聞いてみよう。ああ、でも拗ねちゃったからな。謝ったら許してくれるかな？

それからちゃっちゃと外に出ると、そのまま佇んだ。ハニーラビットに関しては街のすぐそばの平原に出現するらしい。

「久遠、僕様魔法が使ってみたいな」

佇んだ理由はこれである。他ならぬ忍迺のお願いである。出来る限り叶えてあげたいと思うのが思春期の男の子だ。手っ取り早いのが本屋だな。よし、本屋に行こう。ギルドに置いてあったパンフレットに街の地図もあったし、すぐ近くじゃん。

そうして本屋に着く。この街の構造はこの広場を中心に出来ているらしい。大体のものはこの周辺で手に入るみたい。中に入ると、古めかしい本から新品の本まで、びっしり。

その中でも魔法関連の本を手にとってみる。

『魔法とは世界への干渉。世界の理に反した現象です。人間の体内には魔力というものがあって……』

パタン

駄目だ。頭がパンクする。こういうの僕には向いていない。そう思い込もう。できたとしても好きじゃなかったら出来ないのと同じことなんだよ。

忍迺の方を見ると、手のひらで電気が蠢いていた。え？

「ちょ、忍廻？」

「うん？どうした？」

どうしたもこうしたもないでしょう？今、魔法らしきものを使っ
てなかったでしょうか？

「ああ、大体理解したぞ？一回出来たらあとは想像力だな。自分
のイメージを現実投影する。それが基本らしい。詠唱魔法なども
あるらしいぞ？ワクワクするな？」

「……やっぱりお前は凄いよ。忍廻」

「ん？どうした？」

こういう新しいものに触れてもすぐに飲み込み自分のモノにする。
今までも多くのモノを吸い込んだ筈なのに、それでもまだまだ底は
見えない。どんどん成長していくな、お前は。

僕は停滞したままだよ。ずっと、ね。

「この本は、入門系の魔法しか書いておらんな。全部記憶したぞ」

この短時間ですか。瞬間記憶。やっぱりすごいや。

「じゃあ忍廻。今度僕にも教えてよ。僕にも憧れの的なモノがある
からな」

「ん、いいぞ」

「じゃあ本は、中級の本を買うことにしようか？」

「いいのか？大事な生活費を」

ふむ。こういうところは律義なんだな。この本は銀貨一枚、ま、大丈夫でしょう。

「いいのいいの。ほら、ハニーラビット狩りに行かないといけなし、早く行こう？」

「う、うむ。ありがと、な？」

「どういたしまして。はい、勘定」

カウンターで肩肘をつけていた店員の方に料金を払い、その場を後にする。

とりあえずは、忍廻のお願い達成だ。杖とかはいらないんだろうか？

「杖は、あると魔力の伝達がいらいらいが、無くとも別に支障はないらしい」

だ、そうだ。なので、ハニーラビットを狩りに、平原に向かうとしようかね？大丈夫かな？ロープレ的に言っと、まほつつかい：シノノレベルと勇者（仮）：クオンレベル3（フランさんとの稽古を経て）ってとこだろ？

大丈夫なんだろう。よし、行こう。

この時の僕の安易な想像は、このあとの事象に押し潰された。

平原に着くとさわやかな風が頬を撫でる。今の日本じゃほぼお目にかかれない光景だ。なんたら高原に行けば話は別だろうが。僕の腰にはフランさんが「僕のお古だけど持っておくといいよ」と言ってくれた剣がささっている。ほんと、あの人いい人だよ。お古といっても手入れはちゃんとされているし、全然使えそうなものだった。さらに、刃には幾何学文字「雷」とか書いてるし（劣化していて読めなかった）結構価値のありそうなものだった。

神殺しの力はあまり使いたくないなと自分で思っている。目立ちたくないのだ。ヘタに目立って、祭り上げられたら大変だ。さらに、剣をふるっただけで、雷が降るとかできそうだしね。諦め人には諦め人なりの意地手があるしね？

「綺麗なところだなここは」

忍廻が風を一身に受け止めながら、気持ちよさそうに呟く。

「そうだね。人の手が入っていない、本当にクリアなところだ」

「ふむ、景観が綺麗とは言わなかったのは褒めてやるぞ？」

「どういたしまして」

忍廻が綺麗だと言ったのは、人の手が入っていないこと。人の手が入ればこの景色だって美しくはなるだろう。しかし、綺麗にはならないんだ。

ふと、遠くの方に眼をやると、見つけた。今回の標的、ハニーラビット。目を引くのは鋭く上がった角。黒い体躯。大きさは、そうだな、赤ちゃんぐらいだろうか？そして、そのモンスターが、人を襲っていた。

見るからに初心者装備。あれ？初心者でも大丈夫なんじゃなかったの？よく見ると、一匹ではなく、三匹。そう思ったら六匹新しく出てきて、さらにどんどん増えている。

「うは。運悪く、大量発生に出くわしたってわけか」

「よし、助けるぞ久遠」

「何を？」

「あの初心者君をだ！」

「へいへい」

いや、忍廻、変なところで正義感があるな。いつも僕を言葉の限りいじめてくるくせに。

けどま、人が喰われるところなんて見たくもないし、行きますか。

……あれ？今さっきよりも大量に。一目見て、百匹は超えている。

「こ、これは……」

まだ、まだ増え続ける。地面の中から、平原の向こう側から。どんどん増えていく。その数はいくらなんでも増えすぎだろう。素人目でも千匹はいつていると分かる。

初心者冒険者は、腰を抜かして動けないでいる。刹那、一匹のハニラビットが飛びかかる。

「奔れ、雷光！」

その瞬間、僕の横にいた忍廻が術を叫んだ。忍廻の手から、ハニラビットまで雷光が一直線に走る。その衝撃をまともにくらい、ハニラビットは黒焦げになり、地に倒れ伏した。

「ふむ、使えるな。よし、僕様が援護するから暴れて来い」

「ああ、はいはい。………ああ、めんど」

そう言いながらも、手に剣を構え突貫する。フランさんに褒められたように速さとパワーは人並み以上にあるっぽい。一匹のハニラビットに狙いをつけ、剣を切り上げる。

その瞬間、手に肉を切る感触が明確に伝わってくる。気持ち悪いしかし、そう思っているうちに剣が光だし、ハニラビットの大群に向かって、雷撃が奔った。

フランさん、これ、魔法剣だね？そんなものくれていいのかな？「いいのいいの」そんな声が聞こえたような気がした。

僕の横で今にも気絶しそうな冒険者に顔を向ける。

「大丈夫ですか？」

「あ、ああ。すまない。格好悪いところを見せてしまった」

「声からすると女性だろう。年齢は僕たちよりも少し年上と言ったところか。しかし、今はそんなとこどうでもよかった。」

「立てますか？立てるのなら逃げてください」

「いや、私も戦おう」

何言ってるんだこの人。今まさにやられそうになってたじゃないか。それとももう忘れたのか？

「いや、足を滑らせてしまってそこを襲われたんだ。いやあ、危なかったよ」

そう言いながらハニーラビットの大群に突っ込み、剣をふるう。なるほど、フランさんほどじゃないしろ、剣の腕はかなりの方だと、自分で思ってるだけ。素人だからどの程度強いのか分からない。そんなことを考えていると横からハニーラビットが襲ってくる。結構好戦的な性格らしい。ウサギなんだからもうちよつと愛らしい顔をしてほしいものだ。そのハニーラビットは僕に届かず、忍道の雷光によって焼かれた。結構グロイ。それでも角の方は結構堅いよ。うで、少し傷がついただけのようだ。

「はあ、吐きそう」

そんなことを呟きながら、剣を振る。そのたびに雷撃が大軍を蹴散らす。あの冒険者の人も大群の中で剣を舞わせている。血舞い。そんなふうに見えた。だって、その中心で笑っているのだから。

今度は三匹正面から飛びかかってきた。フランさんと比べるとおこがましい。三匹いようが十匹いようが、大した差じゃない。そ

れを剣を横に薙ぎ切り捨てる。そのたびに雷撃が大軍を焼く。今ではその数を半数に減らしている。その時

「二人とも下がれ！特大のをお見舞いしてやる」

忍迺が叫んだ。珍しく興奮しているようだ。

「雷よ。その聖なる輝きを持って魔を駆逐せん。その閃きを持って戦場を駆け抜けん」

忍迺の手に、雷が集約される。

「おいおい、それは中級魔法でもトップクラスだろ？なんで初級のお前らが」

いや、あんたも初心者だろうがよ。それにこっちも知りたいわ！忍迺、お前はどこまで行くのかこっちが知りたいわ！

「『雷双』！」

二つの極大の雷が大群の間を駆け巡る。今さっきまでの雷光と違って方向性があるため、破壊力が増しているようだった。これが魔法か。すごいな。今ではほぼすべて駆逐出来た。後に残るのは死骸の山と、虚無感だけだった。

生物を殺すというのは、こういうものなんだろう。果てしない虚無感。喪失感ともいうのかもしれない。

「あとは……………逃げたか」

生物的に、本能的に感じたんだろう。野生の勘というやつだろう。

圧倒的強者に頭を垂れる。弱肉強食、いろいろな言葉が頭をよぎった。

「いやはや、驚いたよ。初級者なのに魔法剣と中級魔法の中でもとりわけ難しい魔法を使うなんてな」

「あなたは、何者ですか？」

少し警戒して距離を取る。忍廻は大丈夫だろう、結構な距離だ。

「ああ、警戒しないでくれ。私はクラウド。クラウド・オシリスだ」

「……クオン・ソノミヤです」

「いや、私これでもギルドの者でな？君たちを査定しに来たわけだよ。あ、これは初心者全員にしているわけだから警戒しないでくれよ？」

査定？そんなもの聞いてないぞ？

「こちらもここまでの奴らなんて聞いてなかったよ」

「……読心術ですか？」

「はは、ただの勘だよ」

「はあ」

ようするに今の状況は、依頼を受ける、依頼をこなそうとする、

大量発生、この人助ける、査定でした？ドツキリか何かかよ！

「まあ、この査定で合格した者はBランクに強制的に格上げされるわけだが」

「はあ!？」

「嬉しい話じゃないか。このような大量発生を片付けるのはBランクからなんだ。それをこつも簡単にこなされるとな？こちらも嬉しい限りさ」

「で？なんであなたは初心者装備を？」

「ああ、これは初心者装備ではないぞ？かなり強化している、Aランクの装備だ」

「はあ。某ゲームに出てくるSシリーズとかか。なるほど、通りですごい切れ味な訳だその剣。」

「まあ、これから君たちはいろいろなことに巻き込まれる、というより巻き込まれるわけだが、異論は認めないからな？」

「……いいですよ。もう、巻き込まれるのには慣れました。めんどいけど」

「久遠、そいつ大丈夫だったか？」

「ああ、忍廻にも説明しないといけないのか。めんどうだな。ああ、めんど。ん？この人Aランクの装備ってことはAランク？は、見えるね。はあ、めんどうだ。」

「さあ、ギルドに戻るのか？」

ニコニコしながら話を振ってくるクラウドさん。 蠱惑的な笑みだ。その笑みは敵対心を和らげさせてくれる。 もう、どうでもいいや。

これが、僕たちと、クラウドさんの出会いである

十三話・何この状況笑える（後書き）

はは、厨二でしょっ？

感想待ってます

十四話・ぶじして僕なんだ？（前書き）

悩み

では、ぶじしてー

十四話…どうして僕なんだ？

人生つてのは大きな盤上の上で行われるゲームの様なもの。どう負けても、どんな悲惨な結果になっても、それは、やり直しのきくもの。

そう思っていた時期が確かに僕にもあった。いや、も、という表現はよくない。僕にはあった。

こんなふうにならぬ人生でも、いつかは終わりが来てまた自分を新しく始めることができる。新しい自分を構成した後には、前の自分にならないよう必死で努力する。そう、思ってた。

現実と言うのはそんなこと全くなく、やり直すことも、新しくなることもできない。

そんなものだ。と諦めてしまうのには、もう、慣れてしまった。

結局、僕は何がしたかったのか。何をしようとしていたのか。そんなの、考えてどうする。

そんな誰でも考えたことのあることを、馬鹿みたいに繰り返しながらギルドに戻った。途中でハニートラビットの角をはぎ取るのを忘れたと思っただけで戻ろうとすると、「大丈夫。ここに証人がいるさ。この目で、この身体で、しかと感じ取った」らしい。

Bランクか。Fだったから一気に4ランク上がったのか。災難だな。クラウドさんが言うには泣いて喜ぶらしいのだが、いまいちよく分からない。

僕としては、めんどいだけだ。

「あら？クラウドさん？」

「いや〜。期待のルーキーだよ。この子たちは」

手を広げ、空（まあ天井だが）を仰ぎながら大げさに言うクラウド

ドさん。なるほど、感情表現が豊かな人の様だ。

「もしかして？」

「ああ。私は知らないが十年ぶりなのだろう？この試験を合格した者は」

「……………正確には、十一年前の双樹年の十三月以来です」

なにやら思案顔の受付嬢さん。そして例によってニコニコしているクラウドさん。

十年ぶり（十一年だが）？あれが？まあ、それもそうだろう。本当は十頭倒すだけの依頼なのだ。それぐらいの準備しかしていないだろう。今回だって忍廻が魔法を使えなかったら、僕がフランさんから魔法剣をもらってなかったら、十年ぶりとはなっていないかっただろう。

ようするに運が良かったんだ。いや、僕の場合不運だな。

「その剣、どこで手に入れたのですか？」

少し怪しむように訊いてくる受付さん。盗んだとも思われていいのだろうか？

「その魔法剣はかなり高価なものでして、金貨十枚分はするかと……………」

え？フランさんそんな高価なモノを？いや、人が良すぎて逆に怖いんですけど。

「これは、あの……………トワイライト近衛騎士団長・フラン・エ

グゾディアさんから貰ったものでして……………」

茶化す場面ではないと判断したので、包み隠さず話した。隠しても意味がないし。

『え?』

正直に言ったら驚かれた。ただそれだけ。

「フランって、あの?」

あのってどの?

「あの、そんなに凄い人なんですか?」

「英雄です。この国の英雄なんです」

何かに思いを巡らせながらそう言う受付さん。英雄って、ヒデオ?

「時には襲ってきた神の軍勢を蹴散らし、最高位の神と渡り合い生還したりなど、いろいろ伝説的な方です」

うつとりと恍惚とした表情で言う受付さん。

最高位って…………。じゃあ、僕との稽古は息をするよりも簡単だったわけだ。さらに人がいいとか、もついいじゃん。あの人が主人公で。

「フラン様とは、どのような関係で?」

「えっと…………森で死にかけていたところを助けて下さり、さらに

言つと今日ここに来るまでの生活の面倒を見てくれた関係です」

「ふむ。なるほど。得心いったよ」

クラウドさんが手をポンとして納得顔になる。

そのままニツコリ微笑み、ズイと寄ってくる。すごく、色っぽい。紅い髪を後ろでポニーテールにし、澄み切った蒼色の瞳でこちらをジロジロ観察してくる。かなり、際どい。下から覗き込んで来るので、上目遣いが可愛い。どうでもいいけど。

「フランは元気だった？」

「あ、はい。それはもう聖人君主みたいでした」

「ふうん。元気でやってんだ。あいつには後れを取ってばっかだからな、そろそろ本気で頑張ろうかと思ってたんだ」

その眼は獰猛な獣のようで、子を見守る母のようで。

「で？Bランクの事についてはどうなったのだ？」

そんなことどうでもいいと言わんばかりに、忍廻が話を戻す。容赦ない忍廻クオリティー。

「Bランク昇給手当として、金貨五枚お一人ずつ差し上げます」

わあ。これで働かなくても3〜4年は暮らせるぞ〜。二ト一歩手前から帰ってこれるかどうかが不安だけど。

「Bランクになるとギルドから直接依頼が届くこともあり、先程

も申しあげましたように護衛の依頼も受けられるようになります」

え？絶対権力？なにそれおいしいの？

「こちらがBランクのギルドカードです」

ブロンズのカード。僕の名前が彫りこまれている。忍迺も受け取ったようだ。

「君たちはいろいろと面倒事に巻き込むわけだが」

「確定事項なんですね」

「うん。けど、こちらからオファーがなければ今まで通りでいいから」

……はあ。今日は何かと疲れたよ。

「あ、こちらがハニーラビットの報酬です」

おお。それっぽい袋に入っているぞ。

「クラウドさんが千頭討伐したと言っていたので、一頭一銅貨。千頭十銀貨になります」

なんともアバウトだな。それとも、クラウドさんが信用されているのか？この場合は後者のようだけどね。

「じゃ、後は自由でいいぞー」

「失礼しました」

そうして疲れた足を引きずりながらギルドを出る。早朝、この街についてずっと動きっぱなしだからクタクタだ。もう空は茜空。もうすぐ黄昏時になるだろう。

「忍廻、宿とろうか」

「そうだな。どうした？そんなに疲れた顔をして」

いや、疲れてるんだよ？今日一日動きっぱなし、昼食とれずに平原を駆け回って剣を何回も振るって、今度はギルドにとんぼ返りで、Bランク昇級で。

「……ああ、めんど」

「……楽しく、なかったか？」

「ゼーんぶ、めんどいだけだよ」

本当は誰がどうなるうと知ったこっちゃない。誰のために戦うでもなく、自分の場所を護り続けるために戦うだけだ。ほんとは、それさえ諦めたいのに。

「……僕は……ボソッ」

「ん？どうかしたか？」

そう尋ねると顔を俯かせて黙ってしまふ。気分でも悪いのだろうか。

「もういい。行くぞ」

そう言うとスタスタと歩いて行ってしまふ。若干怒っているようにも見えたが、僕何かしただろうか？

「ふうん」

スタスタ歩いて行く忍廻の背中を見ながら、忍廻も怒ることがあるんだなあと、当たり前前のことを思った。いや、この世界に来る直前にだって僕がはぶてさせてたじゃないか。

「ま、どうでもいいことだな……………」

本当、くだらない、どうでもいいことだ。とりあえず、忍廻を追いかけ……………」

「あれ？」

いない。忍廻がない。忍廻どころか、今さっきまで賑わっていた、これからいざ夜の賑わいに入る筈だった広場までもが静寂に包まれている。

異常だ。異常が起こるのも通常現象という奴がいるが、これは普通に異常だ。

「ここ、どこだ……………」

なんとなく、しかし決定的に違う。曖昧さと確実性を備えた空間。

「ここは、ハイ・アビリティ高位空間也」

後ろからするピロピロ声。おそらく人間ではない。振り向くとそこには、獣の体で、二足歩行、全身が漆黒で包まれた……生き物なのか？

「我は『アヌビス』、神々の尖兵也」

ああ、あのジャッカル顔ね、どこかで見たことがあると思ったよ……つて、尖兵？

「て、敵か」

ハニーラビットとは比べ物にならないほどの緊張感。ヤバい、恐ろしすぎるぞこれは。ヘタしたら失神しそうだ。

『敵つすねー。頑張るっすー』

おいおい、やる気も誠意もないな。

『ふーん、やる気と誠意を見せて欲しいなら、何か言うことあるんじゃないっすかねー』

ぐ。分かったよ。どうもすみませんでした。

『久遠様は素直っすねー。分かったつす。許すっすよ』

許したら助けてくれ。実戦なんて無理。無理に次ぐ無理。無理すぎて無理。

『いやっす』

てめええ！この野郎！野郎ではないけども！謝らせておいてそれかよ！

『久遠様、これは試練つす。相手は中位クラスの敵つす。恐れることは欠片もないつすよ』

僕は臆病者だからね。もしもに次ぐもしもを想定して、想定してありもしない現実を作りだしちゃうんだよ。自分でもびっくりするぐらいのネガティブシンキングな野郎なんだよ。

『とりあえず、神器を出すつす』

「ああ、もう！なるようになれ！」

集中。想像するのは日本刀。武器は

「布都御魂剣」

意味は確か、『断つ』って意味だった。

「む、神器か。慌てるな、我は争いに来たわけではない」

「じゃあ、何しに来たつてんだよ」

「お主、我らと共に世界を征服せぬか？もちろん分け前は」

「ウルサイ！黙れ！そんなベタなベタなには乗らないし、乗らされるつもりもない！」

何を感情的になつてんだる僕。いや、あいつの態度がいらつとき
たんだろうな、怖いけども。

「ならば、死んでもらうしかない」

ぞわり。こんなに短い間に死を認識するとはなんて危険な世界だ
よ。初めはサラマンダー、今度はアヌビスか……。もう、訳分かん
ねえ。

こちらの右手にも美しい日本刀が握られている。この剣が意味通
りの効果を発揮してくれるのなら……。

「では、ゆくぞ!」

ドスツと言う音と共に、広場の奥まで吹っ飛ばされ家にぶつかつ
て停止させられる。すごく、痛い。天の羽衣とかはどうした。普通
に痛いぞ。

『あいつは戦闘特化のようつす。攻撃力は高位の神に劣るとも勝
らないつす』

反対じゃないか？

『いいつす。来るつすよ!』

すごく、コワイ。何を捨てても逃げ出したい。この場から逃げ
出したい。けど、どうやって逃げるのかも分からない。あいつはハ
イ・アビリティと呼んでいた。おそらく、神様特有の空間なんか
だろう。

そんなことを考えていると、またもや鈍い音と共に上空に打ち上
げられる。

「かはッ!？」

思いつきり鳩尾に入れられる。痛みで意識が飛びそうだ。そう言えは忍遁はどうしたんだろうか?迷ってないだろうか?あ、そうか。この世界に帰るべき場所がないんだった。……コイツらの所為で。

上空にまで追撃をかけた来たアヌビス。右拳が眼前に迫る。それを自分の体をアヌビスの腕を軸に回転させ避ける。そのまま背負い投げる感じで左手で右腕を掴み引っ張りながら右腕でコイツの右腕関節、肘を思いつきり折る。

「ゲギツ!？」

痛覚はあるらしく、痛みで顔をゆがめる。

「お前らの所為なんだよ。潔く散つとけ」

完全に頭に血が上ってしまった。もう、止まらない。右手に持った布都御魂剣を思い切り振り抜く。するとアヌビスの体に一直線の閃が入り、地を撒き散らしながら地面へと落ちて行った。

僕はその死体を踏みにじって着陸。ああ、気持ちわりー。

こんな下種の中身なんて見たって、下衆なもんしか見えねえし。

「……落ちつけ、力に振り回されるな」

危うく暴走するところだった。自分が不本意ながら与えられたこの力、結構な毒性あるようで、これを使うと破壊衝動がふつつつと湧きあがってくる。多分、いや絶対、これは武器の所為じゃないだろう。僕自身がそう思ってしまう。小さいものが大きいものを手に入れたら試したくなる気持ち。

「……ふん。僕らしくもない」

何かの下に着くとか、何の戯言だよまったく。僕は着くんじゃなく、敷かれる。そんな存在の筈だ。

「なにはともあれ、生き残れたということかな」

今回は、僕の頭に血が上っても勝てたけど、どうだろう？ いや、無理だな。これ以上強い奴と戦って勝つことなんて。第一、経験も何にもない僕に戦闘を期待する方が馬鹿なのに。

『いや〜。久遠様、おみごとです』

「一度出て来い。喰らい尽くしてやるから」

『く、久遠様？』

「……冗談」

ほんと、何の冗談？僕の存在冗談みたいな感じなのに。

『どうか、したつすか？』

「なあ、シキ。僕はもう、疲れた。確かに、この力は凄いと思うよ？こんな半人前どころかまったくの素人でさえあいつに勝てたけど、凄いだけなんだ。すぐくてすぐくてすごいんだけど、もう、疲れた」

こっちが望んだ事は、ただひたすら僕の居場所がそこにあり続け

ること。それ以外の、すごいものなんて欲しいと思ったことなんて……まああるけど、思った事はあったけど、望んだ事はなかった。

『どうしたっすか？』

「どうしたもこうしたもねえよ。こっちは疲れたんだ。もう、違う奴でもいいじゃねえか」

『どうしてっすか？自分の手で忍廻さんを護れるっすよ？』

「馬鹿にすんな。僕は誰かのために戦おうだなんて一度でも思ったことない。いつもあるのは自分のみだ。自分が戦おうとする理由を誰かのためだとか擦り付けたことは一度もない」

これは断言する。僕にあるのは、居場所だ。居場所が欲しいだけなんだ。それがどうしてこんな拳句になるんだよ。正義とか悪だとかどっちでもいいんだよ。神がどうかどうでもいいんだよ。

「僕は、もう、疲れたんだよ！」

『久遠様……』

もう、やめさせてくれよ。まだ一体しか倒してないけどさ。ほら、もっと効率のよさそうな人いるじゃん。フランさんとかクラウドさんとか。

もういいじゃん。僕じゃなくて。何かが何かのために戦う戦いに巻き込まれたくないんだよ。

『自分、久遠様のことが、好きっす。これははっきりしておくっす。好きっす』

「それが？」

『自分は、久遠様以外が英雄になってほしくないっす』

「それはお前の願望だ」

『願望っす。エゴっす。自己中っす。それが？』

「……もう、解放してくれよ。もう、泣きたい気分なんだよ。もう、自分が化け物なのが嫌なんだよ。もう………何も、全部、これっぽっちも、背負いたく、ないんだよ………」

アヌビスを倒して、否、殺して分かった。僕が世界を救うということは、神を殺すということ。それがどうした？という奴もいるだろう。そう、どうした？なのだ。

その、どうした？の為に、僕は殺さなければいけない。どうした？の為に、僕は背負わなければならない。どうした？の為に………僕は居場所………忍廻の横に居られなくなるかもしれない。

「もう、僕を、僕たちを巻き込まないでくれよ！もう、いいんだよ！どうでもいいことに巻き込まれたくないんだよ！もう、失いたくないし、得たくもないんだよ！」

『ダメっす！自分、自分は、自分はあ』

「………どうして泣くんだよ。僕の方が、泣きたいのに」

『いやなんっす。自分、もう、いやなんっす。久遠様に強要させたくないし、諦めさせるのもいやなんっす』

「僕の存在価値は、諦めることだけだ。それ以上以下でもない」

『自分、久遠様はもつと強いと思ってるっす。自分、底抜けに馬鹿っすから、信じることしかできないっすよ。たしかに、そういう力を持たされて、他人から見たらそれをする事自体がどうした？程度の当り前のことになるっす。けど、どうもしないことの方が、なんか、辛いつすよ……』

「……………だあああああああー！！もう、いいーやるよ、やるから、やらせていただきますから……………泣くなよ……………」

姿は分からないけど、泣いてるといっただけが分かった。コイツを認識できたのは最近だが、生まれた時から一緒にいるんだ。なんとなく、分かる。自称だけでも、女の子は、泣かせたく、ない。そんな純情さを持っている、高校二年生です。

『ひっぐ、ふう。あざっす……………』

「はあ。で？ここから出るにはどうするの？」

『それは、ひう、っすね？グズ、時間が、ヒック、経てばでれ、うう、るっす』

「もう、なんか分かんないけど、いや、分かってるからごめん。泣かせてしまっごめん」

『いっす、よう。じ、自分、き、気にして、ない、っすから』

息も絶え絶えだっつうの。はあ。今さっきまでこっちが泣きたい

気分だったのに。ここまで気持ちよく泣かれると、泣く気分が失せる。

シキの言った通り、時間が経てば元通りの街に戻っていた。あの空間で起こった事はこの空間には作用されないようだ。

『じゃ、忍廻さん、さが、すつす』

「お前、寝てろ。ご主人様命令で回線ブチッてる」

『お言葉、に、甘え、させ、てもらっ、つす』

「……おやすみ」

『おやす、みつす。グスッ』

「……はあ。約束しちゃったなあ。まあ、破るも護るも僕の掌上なんだけど」

個人的な感情で他人の迷惑になるのは、まあ別に良いんだけど、僕はいやだからしないようにしてきた。けど、シキに迷惑かけてるって分かった。なら、かけないようにするだけだ。

ほんと、僕ってサイテー。男ならまだしも、女泣かせるなんてね？それも二回も。

「自分でも分かってるつもりだったけど、ほんと、存在最低だな僕」

僕がネガティブシンキングに陥っているとところに、忍廻の姿が視認できた。

「ど、どうしたんだ？そのボロボロの服？」

「階段でトリプルアクセルを決めて、そのあと普通に歩いてたら階段でこけた」

「変な冗談言つな。まあ、いいか。行くぞ、久遠」

「あいあい」

とりあえず。とりあえず。とりあえず、僕が戦う理由が一つ増えた。最初から戦ってなかったけど、僕の居場所を護り続けることと、シキの涙を見ないこと。

とりあえず。とりあえず。とりあえずは、一旦、空っぽの僕に、一旦ではあるが、二つの中身が出来た。

十四話…どうして僕なんだ？（後書き）

ふっきれ

感想待ってます

十五話・何この超展開。今度こそ笑える(前書き)

笑えねえよ

では、じじい

十五話：何この超展開。今度こそ笑える

人生というのは諦めが肝心だ。けど、こんなことを言うのはただの一人間としての逃げであって、手段ではない。

コソコソカサカサ、ゴキブリのように逃げ回っても所詮はゴキブリ。逃げ回ることしかできない。そう、逃げ回ることしかできないのだ。

これでも理由にはなっていない。理由は、そう。そこに居続けたかったのだろう。側にいたかったのだろう。潰される危険があっても傍に……居たかった。

けど、今はしがみついているだけ。足を引っ張っているだけ。依存しているだけ。自分から近づいておいてそれはないな、と自分でも思っている。

「どうした？」

「ん。いつものネガティブに陥っていただけだよ」

「そう、か？」

「うん」

このようにして、僕と東雲忍迺は共存
僕が依存しているだけ
関係

「で？この女は誰だ？」

逃げるのはやめよう。現実が痛すぎて思考に逃げた。

『自分は久遠様の式神。久遠様から貰った名前はシキつす!』

「……そんなこと、聞いておらぬわああああああ!?!」

『ひい!?!』

二人の声が惨めに重なり、二人で後ろに後ずさった。それはもう脱兎も吃驚する速さで。

「怒らない怒らない。焦らずに焦らずに」

「このスケコマシ!女ったらし!変態!ウジ虫!」

『言い過ぎっす!』

「うるさいわ!」

『ひい!?!』

どうして、こうなった?

あれは無事、アヌビスを倒して宿も取れた時の事だ。

「本当どこでこんなけがを?」

「……階段で精気の五回転を決めた後、普通にこけた」

いい加減、この嘘も苦しくなってきた。否、最初から終わっちゃってる嘘だ。

「……僕様にカクシゴトか?話したくないのか?」

「いや、いやいや。そういう訳ではなく」

異次元に呼び寄せられて、そこでアヌビスと戦っていました。なんて言ったら絶対引くだろ、ドン引きだろ絶対。

『久遠様、自分が説明するっすか？』

いや、お前が出てきたら余計にややこしく……。

『じゃ、シキ、いつきまーす』

こおんの！ぼわ〜ん……へ？

『久遠様！やつと会えたっすね！』

そこに現れたのは、白髪紅眼、豊満でバランスの取れた体。人間が洗わせられる究極の美の象徴ともいえるものがそこに居た。

これが体育会系（〜っす）キャラか？

『どっすか？ぐうの音も出ないっすよね？』

いじらしく笑みを浮かべるシキ？

「…………ぐう…………」

とりあえずのささやかな抵抗。忍迺にいたっては口をパクパクさせながら呆然自失。金魚みただ。

『とりあえず、今さっきの説明するっすね？』

で、冒頭部分に戻るわけである。

『久遠様、怖いっす』

そそくさと僕の後ろに隠れるシキ。大人っぽいのに小動物っぽい。

「ひつつくな！」

『ひい！？』

またもや声が重なる。これで三度目だ。

「式神と言ったな？だったら久遠の神殺しでやっちゃえ」

忍廻なんてこんなに怒っているだ？いつもの冷静クールはどこに行っただらう？

珍しく嫉妬か？シートトってね。あれ？スベッタ？

『ちょ、それはダメっす。自分死んじゃうっす』

「忍廻、とりあえず、もちつけ」

「……………説明しろ。一字一句、一句点細大漏らさず、全て、正直に、大衆の面前で、露見しろ」

そのあと、二人でガックブルしながら説明した。ゴゴゴという地響きが聞こえたが、多分気のせいだ。面倒すぎるようになってきた。

「……………分かった、理解した、覚えた、記憶した、記録した、聞い

た、見た、お前らシネ」

まさかのシネ。それはさすがに理不尽というものだろう。

「落ち着け、とりあえず落ち着け」

「……ああそうさ、どうせ胸小さいさ、子供っばいさ、ロリだよロリ。何がいけないんだよコンチクショー」

そのブツブツ言っている姿からは瘴気が出ていて、根源的な恐怖を煽った。

ときどき ひきちぎってやる ぶちまけてやる 殺して殺して殺して殺して殺して殺して殺して殺して殺してやる など……。あ、サイボーグにして世界壊させよう と言ったときはいくらなんでもあせった。

「……久遠」

「な、なにかな？」

恐る恐る、地雷を踏まないように、慎重すぎるほどゆっくり、ベタな返答をした。

「……おっきいのと、ちっちゃいの、どっちが好きだ？」

おっきいちっさいって？身長の話？それなら男として。

「おっきい方がいいかな？」

「久遠だけは信じていたのに……。さよならなようだな。久遠、

準備はできたか？あの世に行く準備はできたか？心配するな、その女もあとで連れて行ってやる。おっきいほうがいいんだろ？」

忍迺の視線の先には、シキの豊満な胸。ああ、そっちの話だったのか。

それよりも今は自分の命を保守しないと。保守保守。

「胸の話だったの？それなら僕は、形がいい方がいいな。ちょうど手のひらサイズ」

「……久遠、ドン引きだ。それにはいくらなんでもドン引きだ」

『久遠様。それはドン引きすぎるっす。ありえないっす。マジで』

あ、あれ？僕の欲望を忠実に言ったままでなのに。こういうときはあれか？貧乳の方が好きですとか、小さい方がこれから夢が詰められるよねとか、これから大きくしていこうとかのほうが良かったのか？

いや、貧乳も好きだけど、やっぱり大きいのも捨てきれないのって男としてあれじゃん。だったらいつそのこと普通の大きさでいいかなって正直そう思ったんだ。いらいらして言った。後悔はしてない。

「それはいいとして、もう、怒ってないか？」

「いいや怒っている。なんでかわからんが、胸のあたりがチクチクする。痛いぞ久遠」

胸の話をしたからだ。

「僕が怪我した理由とかいろいろ分かったら？なら、シキ戻つとけ」

『うーっす』

「ダメだ！戻るつてのは久遠の中にだろ？許さん。それだけは許さんぞオオ！」

天に向かって咆哮。天が落ちてくる。ガラスの破片のような……
噓。

「けどさ、こうやって僕の中にいた方が宿代とか、食費代とか浮くし」

「させん！やらせん！入らせん！」

持たず、作らず、持ち込ませず、みたいな！内側はシキに精神的にボコされ、外側は忍迺に精神的にボコされ、僕のHPは零に近いよ。

「分かった分かった。なんでそこまで拒絶すんのかわかんないけど、それなら宿主に許可貰ってこなくちゃ」

「ああ、急いで行って急いで戻ってこい。ちゃんとした話がある」
僕のくしゃくしゃの髪の毛をさらにくしゃつと掻きながら、宿主のところに行く。もち合わせなら、今は十分すぎるほどある。今は、だが。

こんな僕が未来のことについて思考すると、これからどうするのか微塵も決まっていない。一つだけ決まっていることは、あの欠陥

落ちこぼれ魔導師をボッコボコにすること以外は何も決まってい
ない。っていうか、それがこの旅の目的だ。異論は認めない。

その後のことは何も決まっていない。敵がどこにいるのか。どう
すれば帰ることができるのか。何も分からない。

あれだろ。ベタな召喚系のお話だったら、ラスボスである最強の
奴をぶっ飛ばしたら体がポウッと光って、そのまま帰れるんだろう。
僕はそれ以外の選択をしたい。何もせずに帰るという選択を！それ
だと、シキが泣いちゃうし、板ばさみだわこれは。

けど、それで忍迺を危険にさらすのはばかっているし。ああもう
！高校二年生が何でここまでのことを考えなきゃいけないんだよ！
普通に明日のことを考えるだけでいっぱいだったつうの！あ、高校っ
てどうなっているんだろう？これは確実に留年か？マジで悲惨過ぎ
るな。

未来のことについて考えていたのに、コメディ的なことを考えて
いた。不覚。

「坊主、用件は何だ？」

宿主さんだ。いかつい顔しているが話したら親しみやすい、そん
なおっちゃんだ。

「ああ、止まる人数プラス一人してもらってもいいですか？」

「ん、いいぞ。今日の宿代の一人分はまけといてやる。けど、し
たいんなら、違う宿に泊まれな」

「ぶほッ！？ち、違いますって。そんな関係ではないです」

「そうなのか？てつきりおりゃあ……」

なんでだ？なぜそう見える？フランさんに始まり、二人目だぞ？あっちの世界ではそんなこと言われたことなかったのに。けど、忍廻に対する話は、全て僕に矛先が向かっていたな。なんでだろ？

「あ、兄ちゃん。ちょっと忠告しとくんだけだよ？」

「何ですか？」

神妙な面持ちになるおっちゃん。どうかしたのかな？

「お前ら、今このあたりで起きていること知ってるか？」

お前らというのは、忍廻のこと含まれているんだろう。

「いいえ全然」

「やっぱな。最近な？ここら一体で猟奇殺人が続いてんのよ。こっ、体がきれいな刃物でバラバラになったよう死体がよ」

そうなのか。ここまでの賑わいだからそういう話はないのかと思っただけだ。中世っぽいから、切り裂きジャックとかかな？

「現場の多くは路地の入り組んだところだな？そいつを見たってやつあ、全身黒づくめ、指をくいと動かしたらバラバラになってたらしいんだよこれが。今じゃあ禁忌になってる黒魔法の使い手じやねえかって噂になってる」

黒魔法。相手を殺すことにだけ特化した魔法か。けど、それなら態々指を動かす必要ないんじゃないだろうか？魔法というのは詠唱だけで事足りるのだし。いや、詳細は知らないんだけど。

指をくいつ、か。嫌な予感がするぞ。

「もう、二、三十人は殺されててな？騎士団も手をこまねいている。噂じゃあフラン様が動くって話だ」

へえ。やつぱ英雄なんだ。ということとは、フランさんは黒魔法にも対抗できるすべを持っているのかな？いや、素人の僕が心配することではないだろう。ここからは、その道のエキスパートたちの話だ。

「情報ありがとうございます」

「まあ、死なないように気をつけな」

「はい。絶対に死にません」

「はつ。いい心がけだ。坊主、死ぬんじゃねえぞ？俺は、この宿から出て行って、また来ると言って、死んだ奴を何百人とみてっからな。そのほとんどな奴が、冒険者だったよ」

なるほど。僕と同じか。大丈夫だろうな、僕、悪運だけは強いし。ご都合主義には愛されているし。

それにしても、結構話し込んでしまった。忍廻に殺されないだろうか？すごく心配だ。それに、シキは大丈夫だろうか？置いて行つたとき食われる前の羊のような顔をしていた。

少しだけ焦燥感を覚えながらも、部屋に向かった。がちやりという音とともにドアを開ける。よかった、シキは殺されていないらしい。

「お帰り、久遠」

『お帰りつす、久遠様』

やけに満面の笑みを浮かべている二人。少し気味が悪いぞ？今さっきまであんなにいがみ合っていたのに、何があつたんだ？

それとも、僕がおつちゃんと話していた時間は聡明な二人からしたら和解するには十分な時間だったのだろうか？

「さあ決めてもらおう。どちらの布団で寝る？」

『もち、こつちのベッドっすよね？』

あ、そうか。ベッドって二つしかなかったんだ。それは失念していた。今からベッドが三つの部屋に変えてもらおうかな。いや、それでも駄目だな。ベッドが一つある部屋を借りよう。

「というわけで、部屋をもう一つとってくるよ」

『ダメー！』

二人の声がシンクロニシティ。ちょっとハモリ過ぎて気持ちが悪かった。

それよりも、ダメとは如何に？普通は「さっさととってこい！」のはずなんだけどなんでだろう？もしかして、節約？それなら仕方がないかな？

「なら、僕はそのソファで寝るから二人でベッド使つてよ。うん、それがきつと一番いい。その方がいいだろ？二人にとつても」

「あう。いや……そう、ではなく」

『へう。そうじゃ、なくっすね?』

なんなのだろうか?少しだけ、いやとても期待すると、一緒に寝たい!ってやつなのかこれは?そうだとしたら嬉しいなっていう希望的観測なだけだね。

それ以外の理由だとしたら、お前とは寝たくないから絶対にこっちの布団を選べ、ってやつなのかな?それだと激しく落ち込むのだけれど。

「やっぱりほら、僕はソファで寝るからさ。二人でベッド使つてよ」

「う、うむ」

『わ、分かったっす』

うむうむ。聞き分けのよい子には何かご褒美をと昔の人からの教訓だが、持ち合わせが何も無い。なので、子供イコールナデナデだ。

「な、にやにをする!?!」

『ぼわ〜』

シキは気持ちよさそうに目を細めてくれたが、やはり気持ち悪かったのだろうか?もしま、シキもあまりの気持ち悪さに気絶して。

「おやすみ。あ、あと、一人では外出しないように。なんか猟奇殺人があるらしいんだ」

そういつてソファに寝転ぶ。ちょうど外も暗くなって眠くなったところだ。気温も布団をかぶらなくても寝やすい気温だ。

「なあ、久遠。夕飯、食べてないぞ？」

「……………そうだった」

あんまりにも忙しすぎて空腹を忘れてた。そのことに意識を向けると、かなり、すごくお腹がすいている。ぐうという情けない音を立てて、いまにも一揆を起こしそうだ。

「じゃ、食べに行こうか？」

「うん」

『はいっす』

今思ったのだが、神様も空腹はあるんだろうか？そうだとしたら、世紀の発見、でもないか。神様に貢物つて当たり前だもんな。

それから夜でにぎわっている街に繰り出すと、殺人鬼がいるというのに凄い人だった。いや、人がいっぱいいたところの方がいいのか？

けど、黒魔法なら大量殺人も可能なんじゃないかな？と恐ろしいことを考えてみる。いや、そもそも相手が何の目的で。どんな思考に至って殺人をしているのか分からないのだから、意味がないか。

「……………分かりたくもないがね」

殺人鬼の気持なんて分かってたまるか。いや、でも僕はこれから殺神鬼になるのかなあ？どうでもいいけど、そう考えると少し、哀

しかった。

「どうした？久遠？」

『どうしたつすか？久遠様？』

二人の声が同時に重なり、睨みあう二人。仲がいいなあ。

『忍廻さんは、少し自重してくれっす！』

「貴様が自重しろ。紙ぺら式神」

『ぬわぁにおおう？』

訂正、すごく仲が悪いみたいだった。いや、本音を言い合えるということはそのままで気を許した仲ということで、親友と同義。希望的観測だな。

「はい、それ以上喧嘩すると、今晚の飯抜きな」

「ふんっ！」

『ふんっす！』

絶対に相容れない。こいつとは相いれない。油と水、カプコンとバンナムみたいな感じですか？ちなみに僕はカプコン派だ。

「なるほど、夜飯を抜きにしてほしいと」

「ち、違う！」

『違うっす!』

夜飯は食べたいそうだ。そりゃそうだ。

「じゃ、その出店で食べよう」

今の久遠ご一行の財布の緒は僕が握っている。忍廼のばかげた金銭感覚だと、庶民一年分の金も、一週間でペアだ。

それだけは何としても避けなければならぬ。

というわけで夜ごはん。今夜のおかずは？鶏肉つばい奴と、魚つばい奴でした。だって、メニューに書いてあるのが意味分からぬいんだもん。

「ふう。食った食った」

空を見上げる。今日も紅と蒼の月が妖しく輝いている。あれ？前よりも、月同士の間隔が狭くなっているような気がするが気のせいだろうか？

「なあシキ。あの月の間隔狭くなってないか？」

『ああ、あの月と月が重なる時が双樹年っす』

「なら、今年がその？」

『うっす。今は四月っすね』

なるほど、この世界は全体的に四季があるのか。それは、惑星としてどんなだろうか？地軸が一直線とか？

「なあ、久遠。帰らないか？嫌な予感がするんだ」

「ん？そうだな、それがいいかもしれない」

女の感は的中するものだ、孤児院のお母さんの存在の方から叩き込まれた。それはもう、数時間。その間ずっと正座だったし。説教じゃないんだからもうちよつと柔らかくしてくれたっていいじゃないかと心の中にとどめておいたあの頃。

「よし、帰」

ろつと言おうとしたとき、僕たちがいた広場に悲鳴が上がった。

「デイスマントラーだあああああ！？」

デイスマントル。解体……。殺人鬼か！？

こういふときは、焦らず焦らず、全速力で退避！

「逃げるぞ！あ、店員さん、お代ここに置いとくよ！」

こういふことは律義に行わないと。って、そんなこと考えている場合ではない！いきなり死亡フラグにエンカウントだ！

逃げる最中眼の端に移ったのは、みんなが逃げている方とは逆に走り抜けているボロボロの服の少女。何しに行っている？死ぬ気か？

「シキ！忍廻を頼む！」

群衆の慌てふためく声に負けないよう思いっきり叫ぶ。久しぶりの大声。喉を痛めたかもしれないと思う僕は、かなりの心配屋だ。

『久遠様は!?!』

「いや、ちよつとトイレ」

『嘘つす!?!』

「いいから行けつて。絶対生きるから」

そう言いながら、人の波に逆らう。さすがは神様補正。全然当たり負けないぞ。けど、ぶつかつて睨んでくる人の視線は怖いので、よけながら突き進んだ。

あれ? 僕のキャラつてこんなだつたつけ? 確かこんなはずだつた!

「あの、路地に入つてつたよな?」

路地に入ると、輪切りにされた人間の胴体と思われるものが陳列されていた。

こみ上げてくる吐き気。喉のところまで来たが何とかそれを飲み込む。これは、なんだ? 刃物をこんなところで振り回せないし、振り回せたとしても精々人間の腕の長さもあるので、ナイフぐらいのものだ。人間は輪切りにできないだろう。

ならば、魔法? それだつたら、態々狭い路地でなくてもいいだろう。

「とりあえず、何でここに来た僕」

それだけが不思議でたまらない。自殺志願者を助けにさつそうと現れる僕でも妄想したのか? 違うな。行動理由は何となくだ。

「あのボロボロの少女はいずこへ」

たしかにこの路地に入ったはずなただけど。

ぞわりと、僕の体に何かがまとわりつく感触。なんだ、これ？ 確かに想像できる、死。ああ、輪切りにでもされるのだろうか？ それは痛そうだな。いつそのこと頭をライフルで打ち抜いてほしいな。死ぬときまでつらい思いはしたくない。

「誰……だ……？」

後ろを振り向くと今さっきのボロボロの少女が。耳がとんがっている。エルフだろうと予想。

僕はこんな少女に殺されるかもしれないと思っていたのか？ とんだ間抜けだな。それは。

「貴様、何者だ……」

おお。貴様ですか。なかなか口が達者なようで。

「冒険者のクオン・ソノミヤです」

「そう、か……。で、貴様はこんなところで何をしている？」

「いや、君がこの路地に入ったのを見て、何となく追いかけてきたんだ」

「そうか、それは……… 災難だったな！」

僕の体にまとわりついていたもの。糸だ。細すぎる糸だ。それが幾重にも僕の体に巻きついている。ナルホド、マンガとかでよくある

弦術師か。マジものに出会えるとは夢にも思わなかった。

「犯行現場を見られたのなら仕方がない。死ね！」

少女が指をくいつと動かすと糸が食い込んで……こなかった。なるほど、これは、凄いな。天の羽衣。役立たずだと思っただらこんなところで役に立つとは。

「悪いけど、効かないみたいだ」

僕が恰好つけてそう言うと、少女は糸と格闘していた。

「あ、あれ？絡まっちゃった」

「……どんな落ちだよ」

「く、動くな。この糸を引けばお前の命は……効かないんだった。ど、どっしょしょ」

慌てふためく少女。なんか、愛玩を誘うものがあつた。

「お願いします。見逃してください。本当は殺してないんです。お願いしますお願いします」

今度は、そんな風に言ってきた。ザ・ドゲザでだ。なんだ？この少女は？

「実は……」

あれ？聞いてもないのに事情を話したぞ？なんでだ？僕な

んかしたか？何にもしてないけど、殺されそうにはなったぞ？

「実は、殺人鬼とは、私の師匠でして……」

「あ、話さなくていいよ。興味ないから。とりあえず、フランさんのところに行こうか？そこで話は十分してもいいよ？気が済むまで、ね」

「フ、フラン！？フラン・エグゾディア！？だ、ダメだ。殺される。確実にバラバラに。そ、それだけは！それだけは勘弁してください！」

僕の意地悪はクリティカルヒットだったようだ。まさか、僕が悪人を警察に突き出す善人だとも？まさか、あり得るだろうか？いやありえない。

「けど、君が殺してはいないといっても、君の師匠がやってんだろ？この、バラバラ。君と違って、何のためらいもなく、指をくいと動かしてんだろ？そして君はそれを……」

「止めたいです！」

なにやら超展開の匂いしかない。僕の一番嫌いな匂いだ。

「じゃあ、頑張れ。さようなら」

「いや、こいついつときは手伝ってくださる流れじゃ！？」

「僕にベタな展開を望むなんてまあ、バカ？」

「いや、あなたのこと指先ほど知らないし！会ったこともなかったし！」

おお、ツッコミの才能ありと見えた。僕たち御一行はボケしかないからな。新鮮だよ。

「せ、せめて話を聞いただけでも！」

「……君が勝手に話すっていうのなら、僕はどっちでも」

「実は、私の師匠がこの犯人なんです」

「今さっきも聞いた」

「そ、それで【ラグナロク】の時に歳殺に、歳殺に戦いを挑んで」

【ラグナロク】？なんだろう？今度シキに聞いてみよう。

歳殺、歳殺神・陰陽道における8人の方位神の1柱。殺気を司り、万物を滅する、か。そんな奴も、こちら側に来たんだな。そりゃ、武を好む神様だから仕方がないと言えば、仕方がない。

「そ、それで、何とか生きて帰ってきたけど、歳殺の陰気にあてられちゃって……」

殺しを始めるようになったと。うむう。けど、その【ラグナロク】っていつのから随分と時間が経っているようにも感じるのだけれど？

「ホントは、凄く、やさしい人なんです！助けてください！お願いします！助けてください！」

僕に抱きついてくる少女。泣いてた。

僕に助けてくれと頼んだ。

そんな少女が泣いていた。

大切な人を助けてくれと頼んだ。

そんな少女は泣いていた。

僕の頭の中で、ぐるぐると回る。反復される、助けて、という声。

僕に何ができる？いや、何もできない。

僕に何ができる？何かができるはずだ。

僕に何ができる？いつものように諦める。

僕に何ができる？いつもの自分にさようならを言おう。

僕に何ができる？できるできないではない。しない。

僕に何ができる？できるできないではない。やる。

「……問おう。君は、幸せになりたいかい？」

孤児院のお母さんの存在の言葉。それに僕は、どちらでもいいと答えた。

「……問おう。ならば君は、生きたいかい？」

それに僕は、生きたいと答えた。

「……問おう。君は、あの子の笑顔を護りたい？一緒に居たい？」

それに僕は、絶対護る、絶対一緒に居たいと答えた。

「……ならば、もう一度問おう。君は、幸せになりたいかい？」

それに僕は　と答えた。

「……問おう」

僕はこの子に質問をぶつけることにした。ホント、僕らしくない。この世界の空気にあてられたのか？それとも。

「え？」

「……問おう。君は、幸せになりたいかい？」

「なりたいです！」

最初からそう答えられるこの子を、僕は羨ましく感じた。

「ならば、来て。幸せに、してあげる」

孤児院のお母さんの存在の言葉。伸ばされた手に僕は、手を添えた。

「ほんと、何の冗談だよ。僕が、人助け？笑わせる。なら、この愉快的な感情に、身を任せてみようじゃないか……」

なるほど。僕にもまだ、人っぽい感情は残ってたということか。愉快じゃないか。これほど愉快的なこと、久しぶりだ。

「手を取れ。伸ばされた手は、放さないって自信はある」

「じゃ、じゃあ……」

「僕だけではないけど、まあ、大丈夫だろう。さあ、どうする？」

「助けて、ください！」

伸ばされた手を、僕は、掴んだ。

十五話・何この超展開。今度こそ笑える（後書き）

ね？厨二でしょう？

感想お待ちしております

十六話・前だけ、見てる（前書き）

毎回文量が違うのが作者の取り柄です

では、どござー！

十六話：前だけ、見てる

あれから、とりあえず宿に戻る。僕怒られる。何で？

「久遠！お前、僕様を心配させて嬉しいか？ええ！？」

『久遠様。あなた、どうしていつもそんな風にするっすか？』

よくわからないけど、小一時間ほど怒られ続けた。忍迺からは、僕のことをどれだけ心配していたかを。シキからは、僕がどれだけ素晴らしい存在かを。

一言でまとめると、眠いな。

「で？その横の少女は？」

「わ、私、クロエ・アスクレピオスです。よろしくお願いします」

「……またか。またなのか？久遠？」

「いいや。僕の人生初となる、人助けの相手だよ」

「久遠が」

『人助けっすか？』

いい具合にシキが忍迺の言葉を遮った。見る見るうちに忍迺の顔が真っ赤っかに。リンゴみたいだ、可愛い。

「もういい！で？何を助けてもらいたいんだ？」

「それが……」

僕に話したことを今度は丁寧な語り始めた。

途中でシキが【ラグナロク】のことについて話してくれた。

『【ラグナロク】というのは、数年前、この地に突如現れた神の軍勢とこの小国との間の戦争のことです。どこからどう見ても勝てる見込みのない戦争。その頃っすかね。永久中立国であるエターナルが動いたのは』

エターナル。アルカディアに次ぐ戦力を保持している超大国か。

『その戦争の時に高位の神が数体、最高位の神も来ていたっす。奴らにとっては、暇つぶしだったんっす。人を殺すことも、世界が壊れることも』

暇はつらいからね。何かにつけたい気持ちはわかるけど、それで他人に迷惑をかけちゃあいかんよ。

『その時活躍したのが、フラン・エグゾディアさんとクラウド・オシリスさんっす。そのころはまだ久遠様たちと同じぐらいつすね。フランさんは最高位の神を退け、クラウドさんは高位の神を退けたっす』

それで、英雄、か。まさに、国を守ったってことか。自分の命をかけて。僕には到底できない芸当だ。僕なら、一目散に逃げているだろう。

『それでも、当時大きな被害と、多大なる犠牲が出ました。英雄

と呼ばれる方も多くなかったそうっす』

そして、とクロエちゃんの方を向き続ける。

『そして、この子の師匠。弦王とまで呼ばれた男性、クラム・アスクレピオスさんもその戦争に……』

それで、歳殺の餌食になってしまったと。なんとも悲劇的だね、それは。けど、あれ？アスクレピオスって名字……？

「もしかして、君って……」

「はい。実の父親ではありませんが、私を拾ってくれました。その時の言葉が『手を取れ。伸ばされた手は、放さないって自信はある』でした……」

そうして、僕の方をちらちらとみる。意図せずして、被ってしまったようだった。不覚。そして、ものすごく恥ずかしいことを言っただんなあと後悔。

僕と忍廻と一緒に境遇ってことか。けど、かけられた言葉を覚えているってことは、物心は付いていたんだろう。そしてそれは、自分を捨てた親の姿も覚えている……。

「正義感の強い人でした。泣いている人がいれば悪人でも助けると、誰にでもわけ隔てなく接することのできる人でした」

クロエちゃんの顔は、寂しさに歪んでいた。金眼がうるってきている。それが今は殺人鬼だ。御し難い気持ちでいっぱいのはずだ。それを慰める術を僕は知らない。そんなもんだな、実際は。

けど、その話を聞いて心の片隅に何かが引っ掛かる。

何かがおかしい。そんな感じ。けどそれは、なんか鼻が詰まっている感じぐらいの違和感で、気にはなるが、気にしすぎるほどのものではないこと。多分。多分だとしてもこんな疑問はこの子の前で言ったらいけないだろう。

「私、もつと師匠に習いたいことがあるんです。まだ、師匠に恩返しもできていないんです。だから、お願いします。師匠を、助けてください!」

また土下座だ。土下座が流行っているのだろうか?だとしたら悪い兆候だ。

「で?助けてもいいかな?」

「久遠が助けたいというのなら」

『自分たちは従うまでです』

「ん、ありがとう。いってさ、クロエちゃん」

「ありがとう!」

「けど、それならフランさんに端だほづがいいような気がすんだけど」

今にいたってそのことに気がついた。

「ダメです!師匠が、バラバラのバラバラにされてしまいます!」

民衆のフランさんに対するイメージってなんだろう?そこまで恐

ろしい人ではないぞ？実力は恐ろしすぎるけど。

「分かった分かった、だからひつつかないで」

なんともオーバーなりアクションの方だ。抱きついて懇願してくるとか、僕は金貸しじゃねえつつうの。

それでも騎士団に引き渡されると思っているのか、抱きついて離さない。肩がぶるぶると震えている。そういえば、その師匠とやらに置き去りにされて今までどうしていたのだろう？簡単だ。この年齢14ぐらいの少女が働けるわけもなく、物乞いなどしていたんだらう。

なんとなく。やるせない気持ちが生まれる。

気持ちを落ち着かせてあげるには、頭をなでてやるのがよいとのことだ。僕の持論だがね。そうしてクロエちゃんの藤色のふわふわとした髪をなでつける。ふむ。忍廻やシキとは違った感触だ。

「ほ、ほえ？」

「落ち着いた？」

「は、はい」

顔を真っ赤にしてうつむいてしまうクロエちゃん。怒らせてしまったようだ。僕って女性とのそれてきな感じのあれがセンスレスなのだろうか？

「久遠、お前、やはりロリコン……」

「は？違う違う、ロリもいけるだけだ」

『く、久遠様？それはドン引きっす。マジで』

なぜだろう？そこまで引かれることなのか？僕は本音を言っただけで、いや、それがいけなかったのかもしれない。あれ？なんでクロエちゃんまで引いてるの？

「ま、まあ、それは置いといて、搜索は明日からにしようか」

「そ、そうだな（僕はロリだよな？いける、いけるぞお！）」

『そ、それがいつすね（変なところでアドバンテージを取られたっす）』

「あ、明日からお願いします（ろ、ロリコン？うええん、師匠）」

三人で百面相を始めてしまったぞ？一人百面相は面白くないと思うんだけど。まあ、それも置いといて、またひとつ問題が浮上した。そう、寢床だ。

「ソファは一つしかないし。仕方ない、部屋借りよう」

そうしてドアノブに手をかけると。

「大丈夫なんじゃないか？それにほら、固まって寝た方が安全だろっ？」

『一つのベッドに二人寝れば平気っす』

「へ？そ、それはなんとというか……」

「じゃあ、僕ソファで決定だね。お休み」

今度こそ寝れると思いソファに手をかけると。

『ここは公平にじゃんけんで決めるっす』

「グーとパーで別れる奴でな」

「……分かったよう。もう」

「せうの、ぽん」

グーグーパーパー。その振り分けとは!?

グー：僕、クロエちゃん
パー：忍廻、シキ

最終的にこう落ち着いたわけであるが、ムリ。寝れない。眠りに落ちれない。やばい、何でここまで意識しているんだ？忍廻だと全然意識しないとっては何だが、意識はするが逆に眠りやすいの!なんだこのドキドキはああああ!?

「なんで貴様なんかと」

『なんで忍廻さんなんっすか……』

反対側のベッドでぶつくさ言っていた二人も今では静かになっている。時々『久遠様、そこはだめっす』とか意味分からんことを寝言っているシキの言葉が聞こえたりするが気にしないでおく。クロエちゃんも寝たのだろうか？寝息は聞こえない。

「はあ。よく、分かんねえな。全部」

何でこの子を助けようと思ったのだろうか？僕と似ているからだろうか？いや、似ていない。実を言うと真反対の存在かもしれない。諦め人と希望人。それは鏡にうつしたかの如く対極で、絶対不可侵のはずだ。それに僕は、羨望を感じた。だから助けたのだろうか？よく、分からないな……。今まで理由を与えられないと動けなかったから分からない。これが無意識ってやつかな？人を助けたいっていう、誰にでもある。

けど、僕が感じた違和感。それは、今後に関する重大なものになるかもしれない。僕の予想が本当ならば……。

「考えるな、前だけ、見てろ、か……」

今は横を向くべき時だと思っけど、僕なんかの予想に振り回されるものじゃないな。

それも、極大的に悪い予想。忍廻やシキのようなポジティブシンキングな奴らにはぱっと考えて分からないようなもの。

それは……。考えない方がいいな。前だけ見てることに、するかな。

そうして、一時の回避とともに、睡眠をむさぼろうと思った。前だけ、見てろ。

その夜の夢はなんとも、優しく、朗らかに、爽やかに、おぞましかった。

十六話：前だけ、見てろ（後書き）

どうでしたか？とりあえずの一話

とりあえず、前だけ、見てろ。

そんな感じの一話です。作者が気を抜くとすぐにネガティブシンキングに陥る久遠君。困った子ですww

では、次回も宜しくお願いします

十七話・可愛いなあ（前書き）

初めての一万文字越え

では、ごっごー！

十七話：可愛いなあ

次の日の朝、いつもどおりに目を覚ますと、僕の布団が異様に膨れ上がっていた。一つだけならクロエちゃんだと分かったが、三つある時点でおかしい。

もしかしてアレな感じか？クロエちゃんは本当は魔物で朝は三つに分裂するという魔物なのか？そうなのか？

バカなことを考えるのはやめよう。現実に向き合え。朝起きていたら布団が異様に膨れ上がっていた。これが現実だ。ますます分からんぞ？そうだ、引っぺがしてしまえばいいんだ。

「よいしょ」

なんで？クロエちゃんとはかく、忍迺やシキまでなんているのさ！問題じゃない？そう、問題ではないよ。大問題だ。僕の男としてのあれがどうなんだって感じた。

もはや僕、男として見てもらえていないのか？それはたいそう傷つくな。僕の心はどんどんすり減っていくよ。

とりあえず落ち着け僕。現状を把握するんだ。美少女三人が僕のベッドの中で眠っていた。何の冗談だ？こいつらは寝惚けるとあれか？ベッドとベッドの間を渡ってくるというのか？

「とりあえず、迅速に、こいつら叩き起こそう」

もちろんクロエちゃんは抜きだ。だって最初から一緒に寝ていたんだしょうがないだろう？

「起きろ、おい起きろ！飯抜きにするぞ？」

「むう？なんだ騒々しい」

『朝はもつと爽やかに起きたいっすよ。おはようのチューぐらいするっす』

何だこいつら？何様だこいつら。僕様と神様か。なるほど、こりや朝飯抜きだわ。

「な！？それだけは！」

『朝ご飯を抜くのは美容の大敵っす！』

こいつら平然と人の心を読みやがった。こいつらの性能はどうなってるんだ？見た目は美少女、素顔も美少女、その名は、超絶美少女忍廻ってか？

「起きたか？なら理由を聞こうか。聡明な君たちなら分かっていると思うが、君たちが夢遊病者でもない限り、あそこから、ここまでの間を寝惚けてくることは不可能だ。そこで問う。これは、故意に潜り込んだのか？そうでないのか？」

「あれだな。久遠に隠していたが医者から処方される薬を最近飲めていないから夢遊病なんだ」

『ほら、自分と久遠様は魂で繋がってるじゃないっすか。だから寝惚けてでも引き寄せられちゃったんすよ。どう責任とってくれるんっすか？』

こいつら舐めてやがる。いいだろう。そこまで言うのなら朝飯は

抜きだ。異論は認めん。

『そんな〜』

「重ねてもダメ。食べたいなら、あれだ。誠意を見せる誠意を」

『え？自分を思う存分に弄くりまわしたいっすか？しょうがないっすね。久遠様の命令には逆らえないっすから。けど、嫌々ってわけじゃないっすよ？』

「だあああああああああ！？服を脱ぐなああああああ
!?!」

いそいそと服を脱ぎだした時は本気で焦った。いや、眼福にはなるかなと思いつつ、手で目を隠して指の隙間から覗いていたわけではないからね！

『けど〜、朝ご飯食べたいっすよ〜』

「僕様も脱いだら食べさせてくれるか？」

……こいつらダメだ。面白いぐらいに話がかみ合わない。

「分かったよ、僕が折れるから。もう、次からこんなことすんなよ〜」

『うっす』

「分かったぞ」

絶対分かってないんですよ。僕をなめてるアルか？中国拳法を一通り修めた天才児アルよ？……苦しすぎる。

「したら、とりあえず、【ゲイボルグ幻想棘】だから」

『OKエイ！我が命に代えても！』

二人の声が重なる。その通りだね。けど、その言葉は命に代えても潜り込みますに聞こえたんだけど気のせいかな？

そのとき！

「ぐう〜……」

可愛らしいお腹の鳴る音が。ふむふむ。

「す、すみません！」

顔を真っ赤に赤らめるクロエちゃん。むむ、なんか、いい。

「ああ、ごめんごめん。おなか減ってたよね？よし、ご飯食べに行こう」

「……ガキ子供には優しい」

『……ロリコン』

いいだろう。もう否定はしない。だが君たちは間違っている。僕は、ロリイもイケるだけだ！あれ？なんだろう？涙が出てきたな？

「いいから、飯食いに行くぞ！」

『……逆切れ、ぷっ!?!』

「こいつら……。いいだろう、そこまで言うのなら見せてやるっ。

【絶対不敗の炎光】クラウ・ソックスの力、思い知るがよいわあああああ!

「よし、みんな行くぞ〜」

……の字、の字、の字、の字、の字、の字。

「あ、あの〜、行きましょ?」

ハニカムクロエちゃん。……うん、そうだね、君は優しいね?けど、何で口元を押さえているんだろうね?時々、ぷっ、て聞こえるのは気のせいかな?

気のせいなんだろうね。うん、そうなんだろうね?ね?

「おい、早く来ないと飯抜きにするぞ?」

「ちよ、それは勘弁」

……あれ?立場が逆転してるような気が。気のせいだろうか?ね?行こうかな。僕も結構お腹が減っているし。ああ、めんど。途中であったおやつさんにこの状況を見られたら。

「おう、見た目どおりに女はべらせてんなあ?」

見た目どおり?何がだ?おやつさん、それは禁句だぜ?あれだよ?マジで、周りが華々しすぎて、僕まで恰好よく見えるという変な効果だよ。時々女子からも言われたよ。忍廻と一緒にいるとよく言

われるんだよ。なんか知らないけど。

それからというものの僕はそういうこと言われんのは、あんまり好きじゃなくなつたんだよなあ。暗い過去だよ。そりゃあ「久遠君ってかっこいいね！」って言われてたのは気分がよくなかったとは言えないけど、あれはからかってただけだよね……。はあ。

「まあ、夜の方は違う宿でしてくれな〜」

「だから、違いますって」

僕がとほほとうなだれていると。

「……夜。久遠。太い。きやつ」

『……子作り。いっぱい。子だくさん。きやつ』

……二人がなにやらつぶやいていた。最後に顔をうつむかせて頭をぶんぶん振るといふ動作が二人でシンクロしていた。やつぱり、仲良いよな。けど、今はいがみ合ってるから、うっん、めんど。

「ほら、行くぞ」

街に繰り出すと、やはり活気のある街。昨日あの殺人が起きた街とは思えない。絶対の安心感があるのか？

日本と同じだな。自分は殺されない。まさか自分が狙われることはないだろう。自分はこんなところで死ぬような人間じゃない。そんなところか？まあ、自分には関係ないって思ってる時点で関係ある。

「まあ、フランさんいるしな〜」

なにしろ、あれだ。ヒデオだもの。安心せずしてどうしようか！
って感じなのかな？

「それはそうと、今日は何を食べようかな？」

この世界に来て食べることの面白さを感じた僕。食べるって、幸せだ。おいしいものを食べると気持ちが和む。多分。あっちの世界では考えられないことだな。あっちではマヨネーズが至宝にして至高だと思っていたから、とても新鮮だった。

そこで何やらいい匂いが漂ってくる。これは、なんだろう？とも食欲をそそる匂いだ。やばいな、このままでは僕は満腹キャラになってしまつかもしれんな。

「あれは……、フランさん？」

視線を横に向けるとフランさんの姿が。相変わらずイケメンだった。けどその顔は真剣そのもので、僕たちといたときとは何か違っていた。

うーん。こういう場合は話しかけないほうがよいのだろうか？仕事集中っぽいし。

「おお！フランではないか」

……忍廻、君は頭がいいキャラなんだよ？天才キャラ。分かる？

「ん？ああ、君たちじゃないか！……ふうん。クオンくんは見た目どおりの行動をとっているわけなんだ。ふうーん」

……今日二回目ですよそれは。見た目どおりって、僕そんなにチヤライか？質素で質素すぎる格好しかしていかない気がするのだけ

ど？

まあ、話しかけてしまったのだから、話して行こう。この人としてやべってて、嫌だということは別にないしね。

「フランさんが居るってことは、あの、猟奇殺人のことですか？」

その時、クロエちゃんの肩がびくりと揺れる。顔も俯かせて、今にも泣きだしそうだ。けど、今は情報収集だ。助けるからには助ける。最後にどんなことになっても、だ。

「うん、そうだね。国からの命令でね、まあ近衛騎士はそういうことをするんだけどね。父上からも、言われているしね……」

ん？どうしたのだろうか？フランさんの顔が暗く……、気のせいではないよな。けど、家族関係のことに顔は突っ込まないほうがいいとみた。めんどくさくなるのはごめんだ。

「く、クオンさん。行きましょ？」

僕の服の裾をちよいちよいと引っ張ってくるクロエちゃん。ふむ、可愛い。おびえている節があるけど、気のせいか？ああ、そういえばこの子フランさんに恐怖心をなんか知らないけどかなり抱いているんだった。なんでだろう？

けど、あとちょっと。

「なにか、分かったことはありませんか？」

「うん、そうだね。黒魔法を使ってはいないということと、あと殺人をしている本人が分かった」

早いな。ということとは、この子のことも……。

「その人の名は、クラム、アスクレピオス。私の恩人だ」

さらに、正解だし。どんな調査をしたら一日やそこらで分かるのだろうか？日本警察もびつくりだよこれは。

「どうして彼がこんな凶行に至ったのかは、分からないが、私はそれを止めなければならぬ。一人の盟友として、一人の戦友として、一人の親友として、彼を止めなければならぬ。そのクロエちゃんには悪いかもしれないけど、私は止まらない」

「ッ!？」

あちやく、やっぱりばれてたか。仕方がないよねこれは。フランさんをなめちゃあいかん。伊達に英雄と謳われていないってわけだ。なんかよくわからん超魔法とか使ってそうだし。

「クロエちゃん、私は君の養父を殺すかもしれない。どうか、恨んでくれ。それでも私は、止まることはできない。じゃあ、またね？」

「ええ、また」

一瞬、倒れそうになった。フランさんの気迫、いや鬼迫？あり得なかった。多分、核ミサイルを目の前にしてもあれほど戦慄することとはなかったと思う。多分。

「ん、ごめんねクロエちゃん。情報収集は必須だから。大丈夫、僕たちがフランさんより先に止めればいいだけのことだから」

「……はい」

『なんか自分たちに対する態度と違うっす。なんか優しいっす』

「そつだぞ、いくらロリイが好きだといつてもそれはないんじゃないか？」

「……お前もロリだろが」

見た目は中学生に入るかどうかってぐらいのくせに。

「もういいや。その定食屋もどきでいいね」

『はい』

む、異論はないようだ。

定食屋に入ると、中は微妙な時間帯なので人の数は少なめだ。さて、何を頼もうかな？

「クロエもじゃんじゃん食べよ？久遠の奢りだから」

『そつす。こういう時に食べないと損っす』

「そつだぜクロエちゃん。今日まであんまり食べれなかったんだろっ？」

「……お言葉に甘えさせていただきます」

ふむふむ。よく食べる女の子は見ていて微笑ましいんだよな。い

や、食べ過ぎとかはよくないけど。

朝は、この世界に来て初めて食べたオニオンスープもどき。やばい、この味にはまってしまったかもしれない。パンとよく合う、食欲をそそる香ばしい香り。

それを飲み終える頃には、クロエちゃんも至福そうな顔をしていた。ふむ、可愛い。

「で、これからどうするかということなんだけど。今のところ何処にいるかとか分からないから、次の事件が起こるまで傍観しかないよね」

無駄に動いてもね。めんどいだけだし。

「け、けど、これ以上師匠に汚れてほしくないです！」

瞳が潤むクロエちゃん。それもそうだけど、何もできないよ？行動を起こそうにも情報がなさすぎる。相手がどこにいるのかも、相手がどのくらい強いのかも、相手に自我が残っているのかも、相手が本当に歳殺の陰気にあてられてこんなことをしているのかも、全部分からない。

分かっていることと言えば、確かにクロエちゃんの師匠が犯人だということだけだ。あと、その人が糸を使うことかな。

「ふむふむ。僕様が集めた情報では」

いつの間集めていたのだろうか？

「狙われたのは、全部女だ」

……女？え？クラムさんって女好きだったのか？

「さらに、殺人現場を検証してみると、魔力の残留痕があった。黒魔法などの直接的な魔法は使っていないようだが、何かしらの方法で魔法を取り入れているな。たとえば、糸を魔力で強化しているとか。糸自体が魔力で構成されているとか」

……もうこの世界に適応しだしているぞこいつは。魔力という単語を違和感なく使いこなしている。

「つて、糸自体が魔法？」

「ああ。構築魔法と言つてな？ある人物が一つのものに執着したり思い入れがあったりすると、魔力でその物体が構築できる魔法だ。まあその場合、非凡な魔力の素養と、強い思い入れがないと発現できないらしいが、な」

さらりとそんなことを言つてのける忍廻。

むっ、じゃあそれって固有魔法と見ていいのか？ふむ、奥が深すぎて理解できない。僕には魔法とか向いていないのだろうか？

「上級魔法に、広範囲探索魔法などがあるのだがな」

それだあああああああ！

「上級魔法書だな？買いに行こう」

「え？高いぞ？」

大丈夫。今の懐には金貨十枚が……。

「一冊金貨五枚だ。感知系だけで、だ」

……背に腹は代えられない！

「頼れるのはお前だけだ忍廻。大丈夫、安い出費だ。金貨五枚ぐらい安いもんだ」

「……久遠。お前変なところで気前がいいな」

「僕は、いつだって尊大な心構えを持っているさ。さあ、買いに行こう」

「う、うむ」

この間、シキとクロエちゃんは硬直。僕はそんなに小さな男に見られていたのだろうか？ 実際小さいけども、忍廻の言うとおり、変なところだけ心が広いのだろう。

『その前に、服買いに行かないっすか？ 少ないっすし』

ふむ。それもそうか。クロエちゃんに至ってはボロボロだし。時々浴びせられる好奇の視線は奴隷でも子飼いにしていると思われたからだろうか？ まさかあり得ない。こんな可愛い子を奴隷など断じてあり得ない。した奴は潰す。

磨って刷って摺って擦って搦り潰しまくってやる。異論は認めん。女の子を泣かせる奴は悪だ。鬼畜だ。外道だ。ましてや自分で泣かせようとやるやつは人間ではない。これも異論は認めん。女の子は笑顔が似合う。これも異論は認めん。

「じゃあ、二手に分かれよう。僕様と久遠は魔法書を買っていく

から、シキとクロエは服屋に行って適当に見繕ってこい。さあ、行くぞぞ」

妥当な案だ。異論は誰もないかに思われたが。

『ちよつと待つつす！なんで忍廻さんと久遠様が一緒なんつすか？』

「それは決まっているだろう？僕様が使う魔法書を買うに行くのだから、僕様と一緒になのが当たり前だろう？」

『自分でも、魔法ぐらいは分かるつす！』

ギリギリといがみ合う二人。どうしよう、この二人面白すぎる。けど、なんでこの分かれ方に不満があるのだろうか？一番妥当なような気がするのだけれど。

「クオンさん。まさか……」

僕を見てはつとしたようになるクロエちゃん。何がまさかなのだろつか？まさか貴方は気づいていない？みたいな顔をしているような気がするが……うむ。考えるのがめんどくなってきた。

「ああもう、めんどいから喧嘩はその辺ね。ほら、行くぞ忍廻」

二人の喧嘩を強制的にやめさせる僕。

「うむ。……じゃあな、紙へら式神」

『ふんぬつうつうつー！？』

地団太を踏むシキ。なんでそんなに怒っているのだろうか？やめてくれ！そんな怒りと怒りが合わさって憎しみの籠った目で見ないでくれ。

僕は背中に鬼も逃げ出すような視線を刺されながら、その場を後にした。大丈夫、お金は渡してある。なんとかなる、なんとかなるさ。

そんな希望的観測とともに魔法書を買いに前に行ったところを歩を進めた。

広場。やはりすごい賑わいだ。そんな人ごみの中をかき分けるようにして進む。当然のように忍廻が手をつないできたので、つなぎっぱなしだ。時々離れそうになるので、強く握ると握り返してくる。なんだろう？ドキドキする。

そんなことに思考を寄せていると、すぐに目的地に着いた。いや、はや、恐ろしき相対性理論。本当にあつという間だった。

店の中に入ると、外の喧騒とは無関係なののように静寂に包まれていた。黒い外套に目深にフードをかぶった人や、真っ白い髭を顎に蓄えた仙人のような人、アル・ゴラ・ビルボル・ゾンボなどどつぶやいている人などなど、個性溢れる人がたくさんいた。

本棚で、入門、初級、中級、上級などと区分された上級のコーナーに立ち入る。そこには、龍の息吹 構築魔法の会得 自然
帰 魔法理論、そして 感知系魔法上級。これだな。

「なあ、忍廻。これでいいよな？」

探し当てた本を手に取り、忍廻に見せると。

「むっ」

唸っていた。何やら一冊の本を前に悩んでいる。何々？ 発禁！

媚薬造りの書。……忍廻。

「……あ、く、久遠？こ、これはだな？そ、そのう」

僕に見られていると分かって急にあたふたしだす忍廻。

「……僕は何も見てないから、とりあえずお金は預けておくよ」

それはちょうど忍廻が見ていた本と同じ値段の金。金貨一枚だ。

「ち、違うわ！ただの誤解だ！」

忍廻が大声をあげたのでお店の人の視線が突き刺さる。少しは自重してほしいものだ。

「何が違うのか分からないけど、とりあえず、買いたいなら、買っとけ」

「だから違つと……言っているだろう」

途中で大声になりかけたのを何とか抑えた忍廻。まあいい。違つのなら、違つのだろう。僕も間違いであつてほしいと思つていたところだ。

「むっ」

そう思つていたら、また忍廻が唸つていた。今度は 雷魔法を使った機械からくりの応用。やっぱり忍廻はこういうのに興味があるらしい。

「欲しいのか？」

「い、いや、別にそんなことは言っておらんぞ?」

「ふむ。金貨二枚。こつちと合わせると金貨七枚。大丈夫だな。よし、買おう」

「い、いいのか?」

「大丈夫だと思われる」

これは決して買いでいるわけではない。決して違う。断じて違う。

「な、なら、ありがとう」

ぼそつと言ったのを聞き逃さなかった僕。今、最高に幸せかもしれん。

「なら、遅れるとシキたち（多分シキだけが）に怒られるから帰ろう?」

「うん」

欲しいものが手に入って、年相応の笑顔を見せる忍廻。まあ、見た目があればだからそれなんだが。可愛いのは確かだ。店から出ると、やはり人だらけ。

「く、久遠。手……」

その後は言わずに手を伸ばしてくる忍廻。む、仕方ないよね。迷子になったら困るもん。

そのまま手を握り、人ごみの中を駆けて行った。ここでも恐ろしく相対性理論。これもあつという間だった。

宿に戻るとまだシキたちは戻っていないようで、がらんとしていた。着いたら着いたで忍廻は魔法書に齧りつきだした。もちろん比喩だ。齧りつくように読みだした。

僕は急に置いてけぼりにされたような感覚になり、ベッドの上に寝転がってこれからのことについて思考することにした。

まず、現状把握。僕たちは寝ている間に欠陥落ちこぼれ魔導師にこの世界に召喚され……………って、そこまで遡ることないな。とりあえずは、当面の目的はクロエちゃんちゃんの師匠をなんとかするってことで……………これもアヤフヤだな。で、今現在は一縷の望みをかけて上級魔法を忍廻に覚えてもらうことに。今のところ、それ以外に手はない。

ないと言えばそれは違う気がするけど、効率的な手立てはない。街の中を走り回るのもいいかもしれない。けど、そんなので見つめることができるのなら近衛騎士団がとつくの昔に発見してフランさんが戦っている。問題はそこなのだ。何百人といえるはずの騎士団の捜査網をすでに何週間もの間すりぬけているその人。逃げるのがうまいと言ってしまうえばそれで終わりだが、終わらないのが現実問題そこにある。

さらに、見つけたとしても直接は見たことはないが、弦王というネームバリューからして大そう名の知れた実力の持ち主なのだろう。僕たちが束になって勝てるという見込みはない。まったくもってないというわけではないが、殺さないように捕まえるということになると難易度が格段に上がるとか何とか、よく漫画やアニメで言っていた。その通り。殺すだけなら、僕が一切を背負い込んで神殺しを発動し、勝負は一瞬で終わるだろう。多分。一瞬でなくとも、【絶^{クラッシュ}対不敗の炎光】などの神器が神話どおりの性能を発揮してくれるのなら、多分勝てる。けど、僕は素人。一瞬で勝っても多分勝てるも、余裕では勝てないだろう。場の空気にもまれ、もしかしたら負

けるかもしれない。その場合は、バラバラ、人間の輪切りの完成だ。想像しただけでも恐ろしい。現に僕はその死体を見ている。

五等分にされた人間の肉体。断面からは生々しい血液。頭部からはどろっとした脳髓。腹があつたとされる場所からは臓物の断面図が見える。思い出したら吐き気がしてきた。ああ、吐きそう。

閑話は休憩して、とにかく、生きて捕獲するとなると難しい。手足両断してダルマ状態だったら何とかなるかもしれないけど、クロエちゃんがどうにもならない。

「あちらを立てれば、こちらが立たず、か」

最終的に、フランさんに頼みこむっていうのもいいかもしれないけど、あの雰囲気からして、絶対に殺す感じだよな。そりゃ、まあ、相手は人殺しだけどそれなりの事情が………あつても、なくてもしてはいけないことはしてはいけない、か。

ほんと、これはどの世界でも一緒だな。やってはいけないことをやったら、問答無用で削除される。別にいいんだけどね。

けど、女の子が泣くのは、見たくないな。そこまでさなわけではないし、逆に不愉快になる。不愉快は嫌いだ。だって楽しくないし。

『ただいまっす』

陽気な声でシキとクロエちゃんが帰ってきた。両手には大量の買い物袋。これはまた、衝動買いか？苦笑いするしかないねこれは。

まあ、機嫌が治っているようなので、よしとしよう。

『いや、すつきりしたっすよ。お店の人はなんか知らないけどおまけしてくれたんっすよ』

見た目が綺麗だからだろうね。テンでプレートなテンプレですね。

「久遠久遠、大体理解できたが、試してみんことには始まりません。一回試してもいいか？」

「うん？人に危害を加えないのなら、いいんじゃないね？」

「そうか」

そうすると、魔法書を広げ、手を翳す。手が光に包まれ幻想的に照らされる。

「我は世界の傍観者。此の瞳、此の耳を以ってして、世界を見渡さん。全てのものを我に示せ」

忍廻の手のひらのから一層強い光が放たれる。

「『アン・ルッカー
見渡せる瞳』」

その瞬間自分が何かに包まれた感じがした。ああ、分かる。この感じは忍廻の視線だ。十年以上一緒にいたんだ。なんとなくだけで、これは、忍廻の視線だ。

その時間は数瞬。すぐに終わった。

「…………ふう。これは、凄いな。あり得ないほどの情報量が頭の中に流れ込んでくる。処理するのが大変だった」

自分を機械的に言うなあ。まあ、仕方がないのかもしれない。ずっと、機械を相手取ってきたのだから。

「ちゃんと注意書きをかくべきだぞこれは。普通の奴なら情報量に耐え切れずに脳神経が焼き切れてしまう」

なんちゅう恐ろしい魔法だよそれは。

ん？なぜかシキとクロエちゃんが固まってるぞ？なんでだ？

『ちよ、忍廻さん？今のは？』

「感知系魔法の上級版だ」

『使えたんっすか？』

「ああ、今使ったらできた」

そ、そんなに驚くことなのだろうか？これが忍廻のデフォだから大した驚きもないんだけど。これって、麻痺してるんだろうか？

『ちよ、なんてことしてんすか！上級魔法は一步間違えば攻撃系でなくとも使用者に危険が付きまとうっすよ！忍廻さんも分かってたっすよね。無茶なことぐらい』

「シキ、分かってる。けど、無茶であっても、無理ではない。やってみる価値はある」

そんな危険なことしてたのか。今度は自重させよう。危険なことダメ、絶対。

「忍廻、今度から自重しろよ？お前が居なくなると哀しいから」

「わ、わひやった……」

ん？なんで顔を赤くするのだろうか？分かった！僕に心配されたのがうれしかったんだ！……希望的観測だね。

「ん、なら万事OKだ。生き残ったやつが勝ち、そう思っとけば問題ない」

意外だったのはシキが忍迺の心配をしたこと……そこまで酷くないか。シキ基本は人？がいいし。

よく見なくてもだが、クロエちゃんの恰好が綺麗になっている。ふむ、可愛い。

「僕様にも、買ってきたか？」

少し不安そうに聞く。そりゃそうだ。仲が悪いんだもの。

『買ってきたっすよ？そこまで意地悪じゃないっす』

「そう、か……」

ここから芽生える友情の物語。そして二人は親友となった。そんなわけではない。すぐに睨み合いの始まりだ。

二人のにらみ合いを横目に見ながら、クロエちゃんに話しかけた。

「騒がしくてごめんね。けど、すぐに慣れると思うから」

僕を呆然と見上げるクロエちゃん。ベタなことを言うと顔に何か付いているのだろうか？頬を触る。うん、なにも付いていないみたいだ。

「……クオンさんって、優しいんですね」

「……シキにも言われたけど、そんなことは髪の毛の先ほどもないよ」

「最初の印象とは、大分違います」

こつちもただだね。最初はどこぞの貴族かと思ったけど、普通の可愛らしい女の子だったことが判明した。

「最初は、めんどくさがりで血も涙もない冷徹な男性かと思ってましたけど、全然そんなことなかったです」

いや、僕もそこまでは酷くないよ？めんどくさがりしか合っていないよ？

「師匠を、お願いします」

ぺこりと頭を下げるクロエちゃん。

「まあ、頼まれておくよ。助けられるかどうかは、別として、ね」

一瞬、その言葉を聞いてクロエちゃんが固まる。けど、すぐに落ち着きを取り戻した。強い女の子だなと、改めて認識。

僕だと、そうだな。師匠が一回目の殺人を起こした時点で現実を放棄して、諦める。

まあ、実を言うと諦められることができるほどのことをしたのかといわれると、何もしていない。ただ、現実を受け入れもせず、眺めていただけ。流されるままに流されてきただけ。

今回は、どうして助けたのかは分からない。多分、その場のノリ

だ。
ん？そろそろ二人の喧嘩が激化してきた。とめないと、この宿が吹き飛んでしまう。

「喧嘩終了。飯抜きにするぞ？」

『そのくだりは飽きた』

二人の声が重なる。飽きたらしい。今は僕の心に非常に深く突き刺さった。瀕死の重傷かもしれない。あ、大丈夫な感じになってきた。

「いいだろう、これは冗談ではないぞ？【絶対不敗の炎光】^{クラウ・ソラス}の力を見せてやる！」

『ちょ、やめるっす！最高クラスの神器じゃないっすかあああああ！？』

「う、嘘だよな？嘘だと言ってくれええ！」

「……ん、喧嘩やめたな。最初からそうしろ」

嘘だよ。いや、この場合人の為にだから、偽ったっていうのかな？まあ、それは置いておくとして。空は夕空。茜色。真っ赤っか。さすがトワイライトというだけのことはある。

「おーい、夜飯食いに行くぞ」

僕の冗談がもろに直撃したらしく、硬直している二人。クロエちゃんもあたふたしている。可愛いなあ。

明日も、平和じゃなくても無事生きていられるよう祈りながら
本気で夜の広場へと、歩を進めていった。

十七話・可愛いなあ（後書き）

感想、お待ちしております

十八話・嘘だ（前書き）

.....

では、さようなら.....

十八話：嘘だ

数日前から本格的に搜索を開始することになった。早くしないと騎士団に先に見つけられ残念な結果に終わってしまうからだ。

まず、ベタな隠れ家としては地下街などだが。この都市にはあるのだろうか？とても治安がよさそうに見える街こそ、裏では煮えくりかえるような憎悪や執念が渦巻いているものだ。

そんなことせずにも忍廻の探索魔法を行使すれば早いかもしれないが、最終手段ということになった。才能はあれど経験は少ない忍廻。忍廻はクロエちゃんと家で魔法の練習中だ。クロエちゃんは弦術師の訓練をするみたいだった。あんな恐ろしい技、これ以上攻撃力が上がったとするとどうなるのだろうか？想像しないでおこう。

とりあえずは、体力がぼちぼちあるシキと僕が外回りをすることに。

まずは地上を探索することに。

押し寄せる人の波。広場に響く人間の雑踏。僕の知る人間の特徴とは大きくかけ離れた人々。毎日毎日、見るものすべてが新鮮だ。

広場の片隅ではエルフと思われる大道芸人が、魔法を使って火を操っていたり。

またあるところでは龍族と思われる商人が、ヒュームの商人と値段交渉をしていたり。

肌が灰色の可愛らしい子供が走り回っている。多分アンデッドだろう。

なるほど、フランさんが言った通り、ここは多民族が平和に暮らしているみたいだ。

「こんなところにいるはずがないものな」

そう呟いてシキの方を見る。

白髪紅眼。服の上からでも成熟していると思われる肢体。そして何処の神話の女神が飛び出してきたかというほどの美形。はつきり言うと、ここまでの美人は知らない。完成された美。そんな感じだ。

『ん？どうしたっすか？顔に何か付いてるっすか？』

首を傾げながら聞くシキ。本人がこんなものだから話しやすい。これで見えた目どおりの性格だったら、絶対に話しかけられない。まず無理。ドキドキして近くにいるのも無理だろう。

「なんでもないよ、さあ、探そう」

『????』

本当にコイツは……。あ。

僕は今、非常に大事なことを思い出した。

「なあ、シキ」

『ん？なんっすか？』

「……クラムさんの顔、知ってっか？」

『……知らないっす』

やはりか。これだと横にいても気づくことができない。いや、そもそも人が多い所にいるわけがないか。馬鹿と犯罪者は高いところを好むってね。

そうだとしても、顔を知らないと始まらない。いや、今まで探そ

うという思考に思い至っただけでも奇跡だ。

『けど、大丈夫ですよ。クラムさんも英雄クラスですから、そこらへんの人に聞けばどんな人ぐらいかは、分かると思うっす』

なるほど。ちゃんとヒデオクラスなのか。だとしたら、僕たちは英雄と戦わなくちゃならないのか？

クロエちゃんでも僕が素人とは言え、気取られないように僕に糸をかけた。その師匠だ。会った瞬間、いや、会わなくても、殺そうと思えば三秒で輪切りだ。

そもそも糸つていうのは鋭い。摩擦をかければ人なんて焼き切れるし、硬く細い糸であれば鉄でも両断できる。さらに忍廻が言うには構築魔法？やらなんやらで糸が強化されているらしい。そう、たとえば人間がどんなに目を凝らしても見えないぐらいに細い糸を構築し、それが鉄よりも硬いのであれば……。

「これは、少しやばいかな？」

いや、少しどころではないな。かなりやばい。

魔力で構築されたのなら、相手の魔力が尽きるまで糸が尽きない。切っても切っても、切っても切っても切っても切っても、無くならない。その強度が鉄以上だとさらに泣いてしまう。

「弦術師には、弦術師、かな？」

蛇の道を知るには蛇。

いったん戻ってクロエちゃんに話を聞いた方がいいかな？それとも、僕のなんちゃって弦術師の知識で対抗するのか。……無理だな。いったん戻ろう。

なにせ早めに気づけたのが幸いだ。まだ時間は十分ある。さらに

言つと、僕たちの旅には制限時間的なものがない。あと数カ月以内に魔王を倒さないと世界が滅びるとかの。

まあ、言ってみたら神様が世界を混沌とさせる前に、神様滅ぼせつていうことなただけだね。

宿に戻ると人が一人増えていた。あれ？

「忍廻、その方は？」

「その方とはなんだ？僕様の自作のカラクリだ！」

ででーん！という効果音が聞こえそうなくらいに胸を張る忍廻。
こいつ、この世界でロボットまで作りやがったか。

「ん？でもこれ、誰かにそっくりじゃないか？え〜つと……忍廻？」

そう、忍廻だ。この胸がない感じ、忍廻だ。この童顔な感じ、忍廻だ。

あえて違和感をあげるとするならば、若干胸が大きい。
ぷっ、笑いそう。

「ふむ、この仕上がり最高だ！さすが僕様！やればできる子だ！
つて誉めてくれんのか？」

「……ぷっ、凄いよ忍廻。そうだね、名前は忍廻の願望でいいのかな？」

「な！？なんでそのことを！？」

へ〜。やっぱりそうだったんだ〜。

忍廻にも年頃な悩みがあるんだ。へへ、知らなかったな。

「【ご主人さま。何をイタシマシヨウカ?】」

しゃべるのか!?

「ちゃんと人工知能も付けておいた。手持ちの工具やキットではここまですが限界だな。それにしても魔法、便利だな。ある一点と一点を位置づけていたら配線などの心配は皆無だ。素晴らしい!素晴らしい!素晴らしい!素晴らしい!素晴らしい!素晴らしい!」

忍廻のメカニック魂に火が着いたようだ。僕、しっらね。

「まあ、コイツはしまっておくかな。旅の邪魔になるだけだし。まだ改良せねばならんしな」

「【ご主人さま。停止モードデイデシヨウカ?】」

「うむ、またの」

そうしてプシューという音とともに、忍廻2は動かなくなった。へへ、忍廻って大きくなったらああいう風になるんだ。それもそれで捨てがた………なんでもない。

「まあいいか。で、クロエちゃんに話があるんだけど」

「はい、何でしょうか?」

「クラムさんの外見的特徴と、弦術師のことについて教えてくれ」

「はい。そういえば一言も言っていないませんでしたね。師匠は、かつこいいんです!」

ガッツポーズをしながら堂々と言い放ったクロエちゃん。そして僕たちはずっこけた。

「特徴は?」

「ヒュームで、黄色の髪。切れ長の目に左目は眼帯です」

眼帯か。それは大きな特徴だな。

「で、弦術師の方は?」

「えっと、師匠に言っちゃだめって言われてるんですけど……」

上目づかいでそういうクロエちゃん。

「やつぱり、助けてもらいたいので言いますね?まずは基本的な技で【止糸】、相手を拘束する技です。【重束糸】、糸を束ねたりして扱う防御的な技です。【斬糸】、私が最初にクオンさんにかけた技で、相手に糸を絡めて輪切りにする技です」

そんな恐ろしい技だったのか……。

「【絞糸】、絞殺術です。【粉骨糸】、止糸の状態で相手の骨を砕く技です。【燃糸】、糸の摩擦によって発火させる技です。【操糸】、物体を操ったり、人間を操ったりと応用の効く技です」

……改めて聞くと、すさまじく恐ろしい。ってというか、クロエち

やんはなんでそんな技を習ったんだ？

「護衛の為だと、自分で自分を護れと言われ続けて、覚えました。あ、いやいやではないんですよ？」

「対抗策とかある？」

「それは……やっぱり閉塞的な場所でないとか効果が半減することですかね。けど師匠は、何も無いところで物を切っていましたよ？縛ったりなんだったり」

なんだそれ？謎は深まるばかりだな。

「ようするに、分からないと」

「……そうですね」

うつむいてしまうクロエちゃん。

「ああ、落ち込まないで。技が分かっただけでもよかったよ。何も分からないまま突っ込むのは、愚の骨頂だからね」

まあ、技が分かってても、対抗できないというね？これは、やばいな。

気づいたら輪切りになっていたということになりかねない。

「じゃあ、もう一度行ってくるよ」

『行ってくるっす〜』

そして、ドアを閉めた。

二度目の外は相も変わらず人だらけ。東京もびっくりだ。そのあと、一日中走り回ったが、痕跡すら発見できなかった。なんの痕跡だ。

これはやはり次の犠牲者を待つしかないのかな？

「出たああ！デイスマントラーだああああ！？」

……噂をすればなんとやら。これは、行くべきだろうか？

「……………」

少し悩んだ後に、人の流れに逆らうことに決定した。

「シキ、はぐれるなよ」

『うつす』

「【絶護^{イージス}たる悠久の英盾】」

想像するのは膜。体を覆い尽くす膜。体の動きを阻害しないための膜。

やばいな、正直ビビってる。命のやり取りは、一生慣れることができないだろう。それで、いいんだと思う。

人の流れに逆らいながら進むと、何やら人だかりがある。こんなときに人だかりと言ったら、騎士団しかない。フランさんはまだ来てないようだ。

「だったら今しか……………」

そう、今しかない。今を逃せばクラムさんは死に、クロエちゃんも精神的に死ぬ。最悪のパターン。

「突破するぞ！」

だが、それ以上歩が進むことはなかった。何かにぶつかった気がしたのだ。この感触……まさか！？

「シキ！進むな！糸が張られてる！」

『そのようっすね』

少し糸にぶつかってしまったのか、出血している。僕の方はとくと、イージスを展開していたおかげで無傷だ。

むう、どうなってんだ？かなりの糸が重ねられているはずなのにまったくもって見えない。

見えないのだが存在している。どうやらここら一体に糸が張り巡らされているみたいだ。どうにもなんねえぞこれは。神殺しを出すしかねえのか？

『久遠様！神殺しっす』

それしかないみたい。

想像するは西洋の剣。柄にはドラゴンが象られている。こういふところには細かい僕であった。

「【勝利と栄光の王剣】！」
エクスカリバー

ふっ、男なら一度は口にしたことのある剣だ。

ピーンという音とともに騎士の姿が八つになった。頭が一つ、その下が七つ。血を撒き散らしながら、広場に落ち、ぐるぐると回った後、血の噴出もおさまり、止まった。

「ひ、怯むなああああ！？」

部隊長と思われる男性が叫ぶ。その声に合わせて部隊が声のした方に突撃……しなかった。

「……弦結界」

「う、動けん！？」

「な、何でだあああ！？」

しないのではなく、動けない様子。なんだ？何をしている！？

「……燃系」

ふおんふおんという音とともに発火する。燃系か。

「アチいい！？」

「た、助けてくれええ！？」

すでに実力の差が丸わかりだ。それに騎士団も分かったのか、今度は後ろ向きに後退し始めた。そして、バラバラになった。な！？

「おいおい、クロエちゃん。聞いてた技と全然違うぜ？」

この声の主、規格外すぎる。アウトロー一分もしないうちに三十人はいただらうという人間がすべて細切れになった。

頭の中が、逃げたいという思いでいっぱいになる。口を開ければ泣き叫びそう。それはシキも同じなようで、震えている。絶体絶命だ。

後ろに引こうと思ったが、動けない。地面に糸で縫いつけられたかのような。弦術師だけに。上手くもねえしどうにもなんねえ。まさか、騎士団の連中と同じ技をかけられてんのか？たしか、弦結界。

「君たちは、誰だ……」

僕たちのことか？一応、理性は残っているみたいだ。

「あ、あなたの弟子さんからあなたを止めてくださいと頼まれたものです」

「クロエか!？」

殺気ではなく怒気がぶつけられる。怒られるようなこと言っただけな？

「は、はい」

「君たちは、クロエと関わっているのか？」

「は、はい」

「クロエは？」

「僕の仲間と宿で……」

そこまで言うと、声を遮られた。

「それは、どこだ!？」

「い、言えません!」

恐怖に震えながらも言った僕。やばい、今自分を褒めてやりたい。

「それは、ダメだ!君たちの、君たちの仲間が、危ない!」

……………え?それは、どういう……………。

「クロエは、俺のことをなんといっていた?」

「それは……………あなたが、歳殺の陰気にあてられて、狂って今の猟奇殺人を……………」

「……………逆だ。逆なんだ」

……………え?逆?

「歳殺の陰気にあてられたのは、俺じゃない。クロエの、ほんたんだ……………」

「う、嘘だ!」

あの笑顔が嘘だというのか?

僕に頼みこんできたのは嘘だっていうのか?

あの涙は嘘だっていうのか?

全部演技だっっていうのか？
だとしたら、なんで僕たちに接触したんだ！

「嘘だ！嘘だ嘘だ嘘だ！嘘に決まっている！あんたが歳殺の陰気に当てられて」

『そつす！今だっつて殺して……。これは』

「……ああ、こいつらは、神だ」

「違う！この人たちは人だ！内臓だっつてあるし血だっつて噴き出していた！」

認めない。認めれない！認めたくない！

「ああ、人にきわめて近い、鬼、だ。神気が弱く、潜り込めたんだろうな」

鬼……。は！嘘だね、角だっつてないし、力がそんなに強くもなかった。言い訳が苦しすぎる。

『久遠様、戻りましょう。忍廻さんが、危ない』

「シキまで何言っつて……。くっそおおおおおおお！」

『久遠様！』

認めたくなかった。絶対に、あの笑顔が嘘だなんて、嘘だと思いたかった。僕たちがクラムさんを助けて終了、そのはずだった。

あの、助けてくださいは、嘘だったのか？

あの、優しいですね、は嘘だったのか？

最初に見せたあのドジも、全部、嘘だったのか？

全部、僕たちに近づいたためだけの演技だったのか？

一心不乱に駆けだす。風景がぶっ飛んで、衝撃波が周りを破壊する。知るか。そんなことどうでもいいんだよ。

「くそがあああああああああああああああああ！！！」

僕のよく分からない、だが決定的に決定されている感情が、慟哭となつて街に響き渡る。

なあ、クロエちゃん。嘘だと、言ってくれるよな？短い間だったけど、十分、君のこと分かってたつもりだったんだ。ドジでロリだけど、どこか憎めない。なあ、違うのかよ？

「なあ、嘘だと、言ってくれるよな？クロエちゃん」

目の前にはクロエちゃん。虚ろいだ眼をしている。

「嘘に決まつてるじゃないですか。早くしないと、師匠が殺されちゃいますよ」

やけに無邪気にはしゃぐ。そういえば、忍廻は？

「ねえ、クロエちゃん。忍廻は？」

「え？ああ、部屋で寝ていますよ？」

「そうなのかい」

ほらみる。やっぱり嘘だったじゃないか……嘘だった、嘘だった

「シネ」

「え なんかに言いました」

「死ねと言ったんだ。君が何だろうと構わない。昔、誰からも好かれるようないい子だったとしても関係ない。死ねと言っている。僕が君が死ぬことを許してあげよう」

……愉快だね。これは非常に愉快だ。戦う理由が何だって？笑わせる。この子と関わらなければ忍廻は死ななかった。いつも通り僕が諦めていれば、忍廻は死ななかった。

「はっ！愉快だよ、非常に愉快だ！まさに道化だ^{ヒエロ}。君の手のひらの上で糸につるされて操られていたってかあ！？あああん！？死ねよ、死ねえええ！」

「不愉快ですね あなたごときに死ねって言われる筋合いはないですよ」

「筋合いならあんよ。君が忍廻を殺した。十分な理由だ」

十二分すぎる理由だよ。

「あんな天才を気取った奴 殺したって大して変わりませんよ それよりもどうですか 私の奴隷になるっていうのは ロリが大好きなんでしょ ちょうどいいんじゃないですか」

「……死ね、憐れな女狐」

「……そうですね あなたなら……」

その時、クロエちゃんの瞳が、潤んでいた。

「あ？」

「あなたなら、私を、救ってくれるって……なんでもないですよ、死んでください」

「クロエ！」

「……あちゃあ 師匠ですか 退散退散 じゃあねクオンさん
またあいましょー」

「……」

僕は、あほだ、バカだ、クズだ、下衆だ、カスだ。ああ、死んで、
しまいたい。

忍廻、虚ろいだ眼でこちらを見つめる忍廻。忍廻。忍廻忍廻。あ
あ、忍廻。

「……忍廻」

空を見上げた。蒼い空なのに、憎々しく見えた……。

十八話・嘘だ（後書き）

感想、まっています……

十九話・曇り やっぱり曇り(前書き)

ふむむ

では、じいじー！

十九話：曇り やつぱり曇り

忍廻が死んだ。それだけのことだ。ああ、そうだったの、死んじやったの。そうやっていつものように諦めればいいじゃないか。

そうすれば、この胸をすくような痛みは治まる。現実を受け入れもせず自分の世界に引きこもれば痛みなんて怖くない。

そうだ、いつそのこと忍廻のことを忘れよう。忍廻？誰だそれ？知らないなあ？

いやだ、忘れたくない。痛いけど忘れたくない。あいつを忘れるぐらいなら死んだ方がましだ。いや、僕はいつも死んでいるような感じだ。世界に目標も見返りも求めず、ありのままを受け流しているだけの。

けど、諦めない。諦められない。諦めたくない。あいつとの日々は諦められるほど軽いもんじゃない。傍から見たらどこにでもある小説みたいだよ？けど、登場人物としては、何物にも代えがたいタカラモノなんだ。

「しのの、しのの……」

あいつが居ない世界って何だ？そんな世界どうにでもなれ。いらん、そんな世界なんていらん。リボン付きでプレゼントされても付き返す。

「僕はあ、どうしよーもねーよ……」

僕があの子とさえ関わらなかつたら、あのととき変な感情が沸き起こったから、忍廻が殺された。

はは、皮肉だな。僕はいつも自分が居ない世界のことしか考えてなかつたけど、お前が居ない世界のことなんて考えたことすらなか

ったよ。

どうしてだろうな？運命？運命の中の鳥？そうだよ、そうなんだよ。あの運命かちの中でよかった。あの小さな世界で満足していた。窮屈はしてなかった。二人だけだから。

急に、お腹が痛くなり、その場に蹲る。

これから、どうしよう？

体の半身どころか九割無くなったような気分。それでも、死ねない。死にたくないと思っっている自分が卑しく思えてしまう。

ああ、何でもうちよつと早く気付かなかつたんだろう？

ああ、何でもう少し一緒にいられないのだろうか？

ああ、何で世界は僕の幸せを拒むのだろうか？

ああ、何で僕は無力なんだろうか？

ああ、何で僕は認めなかつたんだろう？

ああ、何で何でって思うんだろう？

ああ、何で僕は後悔しているのだろうか？

後悔できるような人生を送ってきたのだろうか？ああ、送って来たさ。少なくとも、一個ぐらいは後悔できるものはある。

絶対一緒に居たい、絶対護るって、マザーに言ったのになあ。顔向けできねえよ。

ああ、そういえば、神様が崩壊しているこの世界で、魂はどこに行くんだろ？なあ、忍廻？どんな場所か、教えてくれないか？僕が死んだときさ、パニックにならないように。僕、方向音痴なんだよ。それはお前も知ってるよな？知らないか。

「どうしよーもねー僕が、どうしよーもねーこと考えてらー……」

これぞ傑作だな。っていうかよく思い出せるな。毎日ぼーっと過ごしていただけなのに。こんな一日、あつたってなくなつて一緒……あつたのとなかつたのじゃ、全然チゲえよ。全然な。まったくもって似ている個所が見当たんねえ。

それにしても、はは。忍廻は首だけになっても、可愛いなあ。

『久遠様……』

「ん？なんだいシキ？」

思わず笑いが出そうになる。ダメだこりゃ、笑っちまう。

「あつはっはっはっは！笑えるねえ！傑作だ！こんな悲劇傑作だぜ！映画にしたら売れるかもなあ？」

こんなありふれたストーリー絶対に売れないだろうが、売れるって確信してる僕が居る。きつと売れるのだろう。

ストーリーは、主人公（笑）と天才が送る悲劇的な物語かな？途中でシリアスな感じをぶっ飛ばしたりするんだよね。

『久遠様』

僕の背中に暖かくて柔らかいものが押しつけられる。なんだ、シキの胸か。

ああ、そういえば忍廻は胸大きくなるとどうなるのだろうか？似合わないそうだな。

なんでだ？なんですぐに忍廻の話に行っちまうんだ？はあ。

「お前とした約束、全部、護れなかつたなあ」

人生諦めるなど言われて諦めたし、お前を護るって約束して護れてねえし。

『久遠様あ』

シキが暖かく抱擁してくれる。それでも、気持ちは、あれ？落ち着いてる？なんで？ああそうか。諦めちゃったのかい。悲しむことを僕の体は諦めちゃったのかい。
なんだろう？いらつくね。

「シキ。お前、可愛いなあ〜？」

『久遠様あ』

何を口走っているのだろうか？
僕は、誰でもよかつたんだらうか？

「お前僕のこと好きって言ってたよな〜。だったら今度抱いてやんよ〜」

『久遠、様あ』

どうしてお前は泣いてるの？どうして悲しそうな顔すんの？
ヤメロヨ。思い出すじゃねえか。泣くな、ヤメロ。

「……し〜のの。大好き！」

ああ〜、何となく分かる。これは壊れる一歩手前だということが鮮明に分かる。壊れた後のことも分かる。神に攻められ終了だ。

「それもいいかしんねーな〜」

どうせ何もない。この世界が混沌となろうが知ったこっちゃない。

まあ、一発だけ、欠陥落ちこぼれ魔導師をふっ飛ばしに行きたかったんだけどな。今となっちゃあどうでもいいよ。さて、寝るか。

「シキ。一時間後ぐらいに起こして。なんとなく、寝たい気分なんだ」

「……昼から寝るのか？」

「そうだね。疲れたし」

「その理由は？」

「さあ？なんでだろう？気づいてたら改善してるって」

「おい、お前ウジ虫に戻る気か？退行は生物としての罪だぞ？」

「ウジ虫って言うていいのは忍廻だけだ。それ以外は許さん」

何をするわけでもないけどね。

「イミフメイなことをぬかすな。いつまで二人で抱き合っているつもりだ？雷落とすぞ？」

「だから今さっきから君はなんなんだ？」

後ろを振り向くと忍廻がいた。真つ平らな平原を胸に携えた忍廻がいた。忍廻だ？なんでだ？

「ベタなこと言うと幻覚か。最後のあいさつのあれか」

「はあ？だから今さつきから何をぬかしている？僕はここに居る。そして最後の別れなんて来るはずがないではないか。僕様よりお前の方が早く死ぬんだから」

「お前死んだじゃないか。ほら、あそこに首が」

首が……首が？あれ？断面図、首の断面図が、やけにマシンっぽいぞ？

「な・ん・で」

とりあえず、クロエちゃんのしゃべり方を真似てみた。

「ほら、あれだよあれ。カラクリだって。ほら、これ胴体」

「じじい……じい……忍遁おおおおおおおおお
！……！」

思わず抱きついた。自然と涙が出る。諦められなかった。絶対に。どンドン、抱き締める力が強くなる。

「うぐう……しのお……」

恥も外聞も気にせず、泣く。鳴く。啼く。よかった、よかったあ。

「ちよ、恥ずかしいからやめい！」

「あう」

ぼんつと突き放されてしまう。あう。

無様に伸ばされる僕の腕。まるで抱っこを求める子供みたいだ。それが何度か空を切って、諦めた。

『……ほあゝ。よかつたすゝ』

シキがへたれこむ。ん？そついや、今さっき僕なんかものすごく恥ずかしいことを言っていたような気がするんだが？いや、場合によつちや気持ち悪いぞ？

「……君たち。クロエが、すまない」

頭を下げる男性。外見的特徴は、黄色い髪、眼帯、イケメン。うん、クラムさんだ。それにしても、クロエちゃんは、このことは本気で言ってたんだな。今度会ったら謝ろう。

「大丈夫です。この中のだれも被害にあわなかった、それで万事OKです」

時間という名の被害をこうむったが、それは仕方がない。気にするようないことじゃない。どっちかっていうと、クロエちゃんに酷いこと言っちゃったんだよな。絶対謝ろう。

「クラム！！」

「……フランク」

やっべーこれやっべー。

「……お疲れ様、だな」

「ああ、そうだな」

シニカルに笑う二人。あれ？神速の殺し合いが始まるかと思っただけど？

「あ、あの、状況に頭が追いつかないんですけど」

「ああ、実は……クラムには身代りの調査をやってもらってね」

「最近この街や、騎士団の中に神が紛れ込んでいてな？」

「ちよつと待ってください？そんなの、まったく分からないじゃないですか」

見た目で分からないのに、どうして分かるんだ？

「俺は片目が異質でな？ほら、この通りだ」

眼帯を外した奥には普通なら丸い黒目が、十字型になっていた。

「俺は、生まれたときから神とその他の種族が見分けがつくんだ」

「それで、炙り出し。一体の神を縛り上げたところ、内側からこの国を崩壊させようとしていたらしくね？」

「まあそれも、今回の瓦解したわけだが」

「じゃ、じゃあ、クロエちゃんは？」

「あいつは……歳殺の陰気に当てられてから、神に心酔するようになった。元はと言えば、俺の監督不行き届きなんだが……。それからというもの、毎日うわ言のようにつぶやきだしたんだ」

「クロエちゃんには、任務のこと言ってたわけですか？」

「ああ。言わないでおこうかと思っていたが、な」

「けど、もうあの子はアルカディアに向かったとみるべきだね」

「ああ、そうだな。いつの間にやら、あいつ、洗脳されてやがった」

いかな。話が壮大になり過ぎて意味が分からん。

「まあ、あつちは置いといてこっちの話をしよう。クロエはいつたいなにやった？」

「そこからか。えっと……」

歳殺の陰気に当てられていたのがラムさんではなく、クロエちゃんだったということ。ここまで話したら、忍廻は理解した。

「なるほど。泣き叫んでいたのは、僕様のカラクリがああなっていたから。僕様だと思っ込んでいたわけだ、この戯けは」

「面目したいもございません」

土下座する。ザ・ドゲザだ。

「ま、まあ。心配してくれていたということには感謝だな。うむ、褒めてつかわす」

「は、はは……」

『自分も指の先ぐらひは心配してたつすよ?』

嘘つけ、無事だと分かってへたり込んでたくせに。

「まあ。お前には期待してないよ」

『ぬうわぁにいいいい!!?』

いつもの喧嘩が見られることに感謝しよう。やばいな、あと数日は感謝しっぱなしだぞこれは。

「君たち。特定人物に絞ると黒髪の男の子。ちょっといいかい?」

「な、なんででしょうか?」

クラムさんに呼ばれる。そろーりと近寄り。

「君、召喚の巫女が召喚した神殺しだろ?」

疑問形で聞いては来るが、確信をもった目で尋ねてくる。僕がそんな威圧に耐えられるわけもなく。

「はいそうです。フランさん黙っててすみませんでした。この通りお許しをお許しを」

一日に二度も土下座することになるとは、これは僕補正だな。

「なるほどね。それでか。君たちの隣でサラマンダーが死んでい
たときは不審に思ったけど、これで得心いったよ」

「しかし、そちらの神々も残酷だな。まだ、少年と呼べる年齢だ
ろう?」

いや)。それは僕も全く全然ちつとも分ないっすよ。もっとい
ただろうに、ねえ。軍人さんとか、剣士とか。

「そして君の横に居る、その白い女の子は?神のようだが」

『ああ、あちらの神から久遠様をサポートするように頼まれた、
式神のシキつす』

「そ、そうなのかい」

やはり見た目と違うしゃべり方に困惑している様子。フランさん
にも男の子らしいところがあったせい。

「で、君たちにはいろいろと話があるのだが」

「逃げるぞ二人とも!」

「させるとでも?」

「ヒイ!?!」

凄まじいだけで動けなくなった。やっべ、漏れそう。

「あと君、クロエに手を出してないだろうな？」

「だ、出してないっす！」

『出してみました』

二人ともおおおおおおおおおおお！？こんな絶体絶命な時に嘘をつくんじゃないやねえええええ！？

「ほほう。いい度胸だ。少し、いいかな？」

古臭く指をべきべきしているクラムさん。

「……あぎゃあああああああああ！？」

その日、何度目かの咆哮が街に響き渡った。

クロエちゃんは？という。クロエちゃんは、忍遁に。

「これでクオンさんをびっくりさせましょう」

と言って、カラクリをつかって外に行ったそうなのだ。ようするに、全部僕を無様にさせるための……やっぱり今度謝ろっ。

十九話・曇り やっぱり曇り(後書き)

／(。□／)(／□。(／えらにじっちやえらじっちや！…？

次回も宜しくお願いします

二十話・諦めんなよ(前書き)

短いです

では、さようならー

二十話：諦めんなよ

あれから？言えと？あの恐怖を言えと？耳の横を音速を超えたアリアドネをも超える硬度を持った糸が過ぎ去る恐怖を！かまいたちが発生していたあの恐怖を。

……いいだろう。話すのはやめておこう。

諸君だって、知っているはずだ。僕がクロエちゃんに手を出していないということ！僕は不可抗力なあれで、あれだけなんだ。一緒に寝たよ？それは認めよう。ああ、認めようじゃないか。確かに僕はクロエちゃんと一緒に寝たさ。だからと言って、だからと言って、僕は生命の危機を感じるような罪を行ったのか？いいや、行っていないはずだ。

「さあ〜て、少年よ。俺のクロエに手を出した罪はこんなもんじや終わらないぜ？」

……この人もロリコンなだけだ。さらにまだ続行かよ。どうでもいいさ。終わらない苦しみなんで……あるかもね。

「おいおい、クラム。そこまでにしておけよ。早く行かないと」

フランさんがクラムさんの暴走を止めてくれる。とてもうれしい。やはりこの人はいい人だ。うん、いい人。いい言葉。くくく。

僕がに笑っていると、忍廻とシキが若干引いていた。まあいいさ。

「あの、僕たちをどうするつもりなんですか？はッ！？まさかフランさんは神たちの手先で僕たちをそこに生贄として……」

「違うよ。この国の王に会ってもらうんだ。で、その後はエター

ナルの召喚の巫女に引き渡す、ということだね」

「いやあああああ！？大して変わらねえ！どっちかってっと最悪なパターン！」

まだ神に引き渡されるほうが良かったです。これ、抗うことが出来ねえじゃん。これはフランさんのお願いだろう。恩人の頼みを蔑ろにするほど僕も人間を捨てちゃあいない。

「まあ、お前らが来たくないというのなら無理にというわけではないんだがな？」

ニヒルに笑うクラムさん。え？何で悪人面してんの？

「いやほら。周りを見ると大惨劇。嵐が過ぎ去ったよう。これは修復費用が大変なことになっているだろうな。ふむふむ、軽く見積もっても金貨百枚と言ったところかな？」

そこかあああ！？コイツ！弱みに付け込んで来やがった！確かにこれを壊したのは僕さ！ああ僕さ！けど、クロエちゃんだって……はいすみません僕の責任でした。

「はい、すみません。煮るなり焼くなり……こちらの二人ならどう扱おうと自由です。なので僕だけは見逃してほしいみたいなの？」

作戦G（ゴキブリのように這いずりまわっても生き残ろうぜ）発動。とりあえず自分の身を最優先。その後に必要な助けられれば重畳重畳。みたいなの？

「ああ、コイツ連れて行っていいから僕様たちは見逃していいよ」

『そつすね。自分たちなんの關係のない赤の他人つすから。さらに今さつき会ったばかりなのに「今夜いいことしねーべ？」とか言ってきたつす。助けてくださいつす』

……こいつら。

「分かりました。僕たち三人で行きます。行くつたら行きます。異論は認めません」

これ以上の問答はめんどいだけだ。めんどいんだぜ？めんどいは敵だ。そして自分だ。

「分かったよ。じゃあ、行こうか」

フランさんが額に手を当てる。

「理よ。概念よ。現実よ。世界よ。空には光、大地には闇を。全てを与えし一つよ。我は渡る者。進む者。次元を超えて、歩む者」

僕たち五人が光に包まれる。

「『^{ウォーカー}渡り歩く次元者』」

え？何でいきなり魔法を使つてんの？という思考が始まった瞬間、僕はなにやらあれなところに来ていた。そう、ぱつと見玉座の間には見えない。

大理石の床（見たことないけどね！）、英雄を象つたであろう彫刻、幻想的な光を放つ部屋全体、椅子に座っている年寄り1号2号、今さつきまでのメンバー。

ん？1号2号？

「ふむ、フランよ。この者たちは？」

1号（爺）がフランさん呼び捨てにする。なるほど、王様か。で、横の2号（婆さん）は王妃ってとこだらうね。もうすぐ後継の儀式でも行うのだらうか？先は長そつにないけどな。現役でいられる時間の話だけどね。

「はい。神殺し殿です」

「なんとツ！？」

「あらまあ……」

1号は椅子から身を乗り出し、2号は持っていた扇子のようなもので口元を隠す。1号は急に動いたために腰を痛めた。はん、ざまあ。

「それは本当か？」

「はッ、この目で確かめました」

「ふむ、ならば召喚の巫女を呼ばねばなるまい」

それはいいことだ。旅の第一目標が達成される。その後のことは考えていないけどね。

今僕が嘘だと言ったらどうなるだらうか？全部っつそです。あはは。死ぬな。

「それで、聞きたいことがあるのだが」

そついう1号。1号。

「なんでしよう？1号、王様」

あぶねえ。危うく首が、サラダバーを決めるところだった。

「お主は、いくつだ」

「16です」

「それはまた……若いな。若すぎる」

「そうですね。僕もそう思います」

「何故、君のような者が……」

「それも言われましたね。言われたからと言って、そうですね。何ででしょう？分かったら苦労はしないんですけどね」

「ふむ。分からないが、戦う、と？」

「いいえ戦いたくないです。戦うなんてそんな、何で戦わなくちゃならないんですか？こんな見ず知らずの世界の見ず知らずの人たちを救うためにまったくもってよく分からない敵と戦わなくちゃならないんですか？」

口がよく動くよく動く。びっくり饒舌マシン。

「ふむ。それもそうよな。まだ、子供じゃ」

「はい。びっくりびっくり子供です」

「久遠、少しは自重した方が」

ん？何をビビっておられるか？忍迺らしくもない。

こういうときは不遜に「このウジ虫、黙ってる」「って言うんじゃないの？

「まあよい。召喚の巫女が来られるまでゆっくりしておくがよい。あとフラン。作戦の状況報告を」

「はっ」

ふむ。これが現実か。近衛騎士だもんな。仕方がないよ。

「じゃあ、三人は俺と一緒に行くぞ。ついてきてくれ」

「はい」

クラムさんについてゆく。

玉座の間らしきところを出ると、長い長い廊下が。端の方が霞んでみえる。しかし、それでも光源をとりいれられているのか、薄暗くはない。むしろ明るい。

日窓から差し込む陽光は、廊下を紅く染めていた。

ああ、そうか。今日いろいろなことが起きたから……もう、夕方か。

この城は丘の上に建てられているらしく、ディブレイクの街が一望できる。夕日に染まる街。影を落とす街。そしてまた賑わいだす

街。この街のことが一目で分かる。

「ふむ。今日も夕焼けよし。ほら、この部屋だ」

歩きながら景色に見とれていると着いたようだ。

そこは、僕たちが今まで止まっていた宿と違ってあまりにも豪華で、おやっさんには失礼だが、月とすつぽんだ。

「ここでゆっくりしていてくれ。まあ、逃げようとしてもいいが。罪でもないのに逃げ回るのは趣味ではないだろう?」

ニヒルに笑うクラムさん。やっぱりイケメンなのに悪役面だ。

「クラムさん、クロエちゃんは……」

不意に口に出してしまう。しまったと思い、口を押さえるがもう遅い。あれだね、時すでに遅し。

「クロエは、助けるよ。親だからな」

「嘘かも知れないけど、クロエちゃんもクラムさんのこと誇らしげに語ってました」

「……そうか。そうか、それは重畳」

今度はシニカルに笑うクラムさん。はあ、イケメンだ。

「まあ、ゆっくりしてつてくれよ。神殺し殿」

最後の方を茶化すように言って部屋から去ったクラムさん。

フランさんとは違う感じがするよな。こつ、うん、男前？いや、フランさんもだろつそれは。なんて言えばいいか分からないが、フランさんとはまた違うカツコよさがある。

むう。はあ、今日はいろいろあった。

クロエちゃんに酷いこと言っちゃったなあ。最後の方、泣きそうになってたし。ああ、僕最低だ。下衆だクズだゴミだ馬鹿だ。ああ、ネガティブだ。

「久遠、今日は、いろいろだ、な」

『いろいろつす、ね』

「そうだな、いろいろ、だ」

クロエちゃん。僕に一度助けを、求めたよね？後悔した方がいいよ。

あの時の君も演技だとしても、僕は、君を助けることに決めたよ。何があっても、だ。君に裏切られたのは正直辛かったし、きつかった。

うん。そうだね。君の明るさが少しだけ好きだったのかもしれない。少しどころじゃあないな。凄く好きだった。好きだったし羨ましかった。

羨ましいからこそ、護ろうとも思ったし、助けようと思った。

だからさ、クロエちゃん。

「……諦めんなよ」

三人だけの部屋に、僕の、言葉だけが虚空へと消えた。

二十話：諦めんなよ（後書き）

急遽書いたので、話しがメタクタです

感想待っています

二十一話：あはははははッ！（前書き）

はい、久遠君の回想？です

“アレ”がです！“アレ”って誰だ？

では、どうぞ！

二十一話：あはははははッ！

僕たちが神殺しだというのは、おおやけに公表するかどうかは検討中のようだ。

国、というより世界的に土気が上がるか、世界的に混乱が巻き起こるか。それか、僕が一方的に襲われるか。

敵というのは一概に神だけというわけではないらしい。神に加担する奴らもいるわけで、いつの時代も、謀反と離反は戦の常ってね。さらに、そういう裏切り者（最初から仲間ではないから裏切つてさえないけど）はクラムさんの眼でも見えないわけで、防ぎようがないし、対策の立てようがない。

夢の見過ぎは要注意。綺麗事なんて、汚れ事と表裏一体。綺麗な戦なんてないし、誰も創ろうともしない。ただ相手を粉碎して、ただ自分が勝つ。

この戦いだって、どっちが正しいなんて分かんない。

戦争なんて、どっちもどっちが自分の方が正しいと思っ込んでいる。戦争なんて、どっちもどっちが自分は悪くないと思っ込んでいる。戦争なんて、どっちもどっちが自分が負けることがないと思っ込んでる。

戦争なんて、どっちもどっちが自分の方が強いと思っ込んでる。そのすきに、第三者が割り込んできて、既にどっちが勝つかなんて問題は、既に問題にすらされない。

生き残った方が、勝者。死んだ方が、敗者。

勝った奴は一樣に負けたものを見下し。

負けた奴は一樣に勝ったものを見上げる。

勝った奴は一樣に負けたものを搾取し。

負けた奴は一樣に勝ったものに寄生する。

戦争に勝って負けて、平和的に解決して暴力的に解決して、手を握ってナイフを握って、銃を下ろしてミサイルを構えて、調停を結

んで調停に縛られて、平和が訪れて不景気が訪れて。何事にも、裏は付き物である。どうでもいいけどね。

「ふは〜、暇だな〜」

暇は敵だ。人類最強最悪の敵であると言ってもいい。暇ができたから人間は人間になったし、暇ができたから人間は争うということを感じる時間ができた。

生きることに必死だったら他人のことなんて気にならないはずだ。いや、これは究極的に言っているだけだから。もし世界が百人の村で、その日一日の食料を手に入れることさえ苦勞することを仮定しることだから。

いや〜、それにしても暇だ。どうしよう？
そうだ。

想い出に通うとするか。はい、回想ドンッ！

「ぼわわわ〜ん」

回想って便利

あれは、そうだな、僕が小学校に入学する前だったかな？

あの頃はまだ僕も、まあ、それなりに人生に希望を持っている、幸せを見出そうと努力をしようとしていたお年頃だった。7歳にもなっていないけどね。

あの頃は、無知で無智で無恥で、なんもかんもが幸せだったような気がする。その大きな一因として、やはり忍廻、と言いたいたいところだけでも、マザーが大きく関係していたのかなあ、と想ってたりする。

名前は陽之咲霧ひなのさくきり？だったかな？何とも珍しい名前だった。インパクトがでかすぎて、でか過ぎ過ぎて……今さっきまで忘れてた。テ

へ
霧？さんは、優しくて、カッコよくて、強くて、それでいていっつも泣いていた。

孤児院の子供が泣くと一緒に泣くし、彼氏に振られたと言っっては愚痴をこぼしながら泣いてたし、ドッジボールの球がぶつかったときは、流石に泣かなかった。

孤児院のマザーが彼氏ってどうよ？みたいな感じだが、綺麗だった。

「別にいいや。ちよつと寂しかったただけだし。いいんだい、子供たちがいてくれればそれでいいんだい。ううええええええええんっ！？」

最後には泣いていた。それで僕たちもなんか悲しくなっただけ一緒に泣いていた。それを恥ずかしいことだとは一瞬も思わない。

今だって、哀しい時に泣いたりすることが恥ずかしいことだなんて思っていないのはその時のおかげだと思う。その哀しいと思えることが少ないんだけど。

で、霧？さんはどんな特徴だったかというのと、覚えていない。酷くはない。多分、孤児院仲間に聞いても誰も思いだせないだろう。それは忍迺も千里さんも例外ではなく、誰にも思い出せない。

響く悲鳴、飛び散る血液、剥ぎ取られるぶちちいという音。耳の奥に残っている、眼のそこに張り付けられている、脳の奥にぶち込まれている、ある情報。

最後に言った言葉。

「幸せに、苦しんでも幸せに、孤独でも幸せに、あたしの子供たちに前途多難の修羅しむわせの道を……」

そこまで言って、顔の皮を剥ぎ取られて、心臓を握りつぶされ、

脳味噌を掻きまわされ、内臓を食され、死んだ。僕の、眼の前で。僕と、“アレ”だけの目の前で。

その瞬間、糸がぷつりと音を立てて切れた。で、今の僕が出来上がった。

そのあと、忍廻との約束、それも破ったけどね。

“アレ”はいまだに逃走中。時効まであと4、5年つてところかな？警察の方もほぼ諦めムードだし、明らかに事件自体は大きく報道もされなかった。

あれだね。人一人この世から消え去ったところで、大した影響も与えることができない。この人が死んだから世界が崩壊する、そんなの絶対はない。世界は意外と頑丈だ。頑丈というより、修正力半端ない。

あの人がいらない、じゃあ代わりにこの人が。

あの人やらなかった、じゃあ代わりにこの人が。

これは大きな世界での話。小さな世界、僕だけの世界でああなたはあなたであって、その他のだれにも変わることでできないあなただった。だから、一対一の世界で代理品なんて立てられるわけもなく、ぽっかりと穴が開く。突然なく穴に、世界は耐え切れずにそこを心に壊れていく。

物語性という物語性が、小さな世界の物語が、大きな世界の物語に書き潰されていく。

それで大きな世界の物語の流れに乗ってしまった小さな小さな物語は「僕は朝、紅いリンゴを食べて学校に行った」というだけの物語に一遍になり下がる。

「息をしているだけの、人間ですってか？」

最早回想じゃねえな。

まあ、“アレ”だけは許さず忘れず諦めず、心の中心から退いたことはない、憎しみの……おっとお、柄じゃあないねえ。まあ、な

るようにしかならないでしょう。

“アレ”は地獄に墮ちる。以上終了。

「既に地獄です、ってか？じゃあ、天国で地獄を味わえ」

その時、僕のポケットから忘れ去られていた携帯の着信音『死ね、ウジ虫』が流れる。直せよ！？……あれ？

「声に出して確認。ここは異世界。もちろん携帯なんてない。電波塔すらない。さて、そこで携帯が使えるか？否、使えない」

何でだ？

忍廻だってそこまで改造したわけじゃあるまいし、あれか電波が飛び込んできただけなのか？まあ、とりあえず、見てみよう。

『不在着信1件』

……かけなおせるのかな？まあいいか。暇だし、したからと言って貞子が出てくるわけでもないし。ぽちつとな。

『やあ！元気かい？君の大好きな“アレ”だよ！』

え？……な、んで。

『あははははッ！君はほんとに、馬鹿だねえ？見殺しの次は、神殺しかい？何のギャグのつもりだよ。あははははははッ！』

「てめえ、何処に居やがる……」

声に殺意が込められる。

『私はいつだって君の中にいるよ？知ってるだろ？知ってるくせに。知ってないふりか？認めたくないのか？あははははッ！臆病者の上に、アレかい？卑怯者なのかい？戯言にもほどがあるよ？君はいつもあれだねえ。逃げて、迷って、惑って、混ざって、見失って、失敗して、黙って、気取って、飾って、真似て、流されて、巻かれて、困われて、騙されて、嘘ついて、偽って、頑張らずに、頑張ろうとせずに、頑張れないまま　　諦める』

「……うるせえ」

『あはははははッ！拗ねた拗ねた！まだ怒ってるの？怒ってるの？どうなの？怒っちゃってるの？一丁前に？君は怒れるような人間かい？よく考えろよ。よくよく、考えろ？おまえはおこれるようなにんげんか？』

一つ一つの言葉が、一つ一つの声が、一つ一つの思いが、僕を…

「……知らねえよ。てめえが騙る僕も、僕が騙る僕も、全部僕じゃない。知った風な口きくなよドカス」

『酷いなあ？酷い酷い。まあ、酷くて当然だね。君は酷いんだから。私よりも酷いよ。あははははははッ！酷い酷い、酷くて悲しいなあ？まあ、私も君のギャグな物語に参加したわけだよ。今度はどうやって、君を壊そうかなあ？やっぱり手頃な壊し方は忍廼ちゃんかな？それとも白い女の子かな？それとも無差別に殺したらいいのかな？両方殺せばいいのかな？殺すだけじゃあだめだね。その前に犯さなくちゃ。喘がせて泣き喚かせて、君の目の前でハジメテを奪って、あはははははッ！その後は今度は私が君に抱いてもらうんだ。

てめえと僕は違う。根本的に違う。原子的に違う。生物学的に違う。てめえなんかと一緒にゃねえ。一緒にゃない。一緒にはなれない。絶対に、確信的に、表裏一体じゃない。違うんだよ。てめえが表で僕も表。それだけで十分だ。

「いかん、荒らぶってきた。とりあえず、荒らぶる獅子のポーズを……」

せずに、ベッドに倒れ込んだ……。なんで、てめえが、いんだよ……。

「……くそお……」

霧?さん……僕、なんでだろうな?

……なんでもねえよ。馬鹿。甘えてんじゃねえ。頼るな、寄り掛かるな、黙ってる、考えるな、諦める……。

「そんでもって……いつもみてえに、泣いてる……」

霧?さん。あんたの泣き癖、うつっちゃまったみたいだわな……。

二十一話・あはははははッ！（後書き）

どうでしたか？

みんな「そうでしたー」

そうですか

次回も宜しくお願いします

二十二話・とりあえず狂乱。そのあとに死刑（前書き）

久遠君、暴走

では、どいぞー！

二十二話：とりあえず狂乱。そのあとに死刑

仕方がないなと思いつつ、仕方がなくなっと思いつつ、
眼をこすって、泣いた跡を消す。

僕、こういうの得意なんだ。

それから、忍廻やシキが帰ってくる。二人は、なんか知らんけど話をされてた。まあ、何をされるといっわけでもなさそうだったの
で、平和に泣いていた。

ん？平和じゃないから泣くのか？どうでもいいか。

「で？何の話したの？」

「これからのことだな」

……なるほど。僕はハブられたと。そうだよな。僕がいると話が
まとまらなそうだもんね。

「まあ、召喚の巫女はこっちに向かう魔法陣を築いているそう
だ。あと、2、3時間もすればここにくるそうぞ？」

「へえ。ようやく、あの欠陥落ちこぼれ魔導師に会えるわけだ。
絶対振りくりまわしてやる。……ん？どうやって連絡取ったんだ？」

「魔法だ」

「さいですか」

「ちいずすよ」

魔法、この言葉に尽きる。どんだけ便利なんだよ魔法。便利魔法。魔法便利。魔法便利。ん？違うな。

魔法。うん、怖いね。怖すぎるよ。便利は怖い。まあ、怖いものが便利なものだけってわけじゃないけど。

ま、便利だとめんどくなくていいんだけどね。

「でな？怖いことが分かった」

「ん？なんだ？」

忍迺が凄いということだ。それはもう、これ以上にないぐらいの世紀の超発見なのだろう。

「フランは王子様。以上」

「ぶふうううッ!? (胃液)」

あゝ、胃酸が喉を焼いた。くそいてえ。

つて、フランさんが王子様？

王子様がフランさん。いやいや、別に王子様が身分を隠していたわけではないか。

じゃあ、えっと、えっと、王様・王妃　フラン王子様？

わふー (混乱中)。

「まあ、そういうこともあるだろう。うんうん、そうだそうだ」

人間そういうことの二つや三つあるってもんよ。誰にでも、ね。それにしても王子様か。ま、今までどおりでいいのかな？いいんでしょう。

「まあ、それはいいとして。これからどうする？僕、計画性とかそういうのなんだよね。まあ、生き残るってのが大前提なんだけど」

『……やっぱり、帰りたいつすか？』

いつもの元気を陰に追いやって、僕にそう聞くシキ。

「そりゃ、まあ。帰りたいたいよ。あの世界に未練があるのかと言われれば、まあ、そうはないかもしれないけど。けど、やっぱり、帰りたいよ」

『……帰るっすか？帰れたとしたら、帰るっすか？』

「……どうだろうな。分かんねえよ」

人間その時にならねえと分かんないよ。いっつも能面で通してっからな。時々本当に分からなくなる。

人並みの感情はあるとは思っけどね。

「まあ、そんなことはウジウジ悩んでたらウジ虫って誰かさんに言われるから。その話は終了」

横目で忍迺を確認。うん、怒ってはりますわ。スルースキル発動！

「まあ。その召喚変態欠陥落ちこぼれ魔導師（笑）が来るまで時間をつぶそう。時間に潰されないよーに」

『じゃあ、セックス黙ってる………うつす』

いきなり何を言いだそうとするか。馬鹿なの？死ぬの？
それにお前はそんなキャラではないような気がする。知らないけど。

「まあ、僕の実力について考えるかな。神殺しんだけど、形はある程度なんでもいいっばいな？」

『そつすね。盾の神器なのに、剣の形をしたりするのは無理っすけど。まあ、形はなんでもいいっすよ』

「応用力半端ねえな。だったら、天之鹿兎弓でグングニルを射出することだってできんじゃない」

そうとなったらパネエ。神速の射出力＋神速の槍。マジで貫けぬものなしッ！って感じだよなあ。

「……なあ、久遠はどこでそんな知識を身につけた？」

「男のロマンだ。男の行動原理は謎でつまれている。知らないほうがいい時もある。無知でいい時もある。OK？」

「OK」

分かったらしい。男の行動原理はいまだに謎に包まれている。

「ソノミヤ様」

ドアの向こうで僕の名字が呼ばれる。

怒ってる。てめえに怒ってんだよ。他ならぬお前にな。お前のせいで僕が危険な目に会い、お前のせいで忍遜が危険な目に会い、“アレ”もこの世界に来て、全部お前のせいだ。お前のせいなんだよ。何度でも言う。お前が全部悪い。僕たちを巻き込んだお前が一番悪い。お前が、一番、悪い！今攻めてきている神よりも悪い。“アレ”よりも悪い。てめえの変なあれのせいで全部壊れた。分かってんのか？自覚してんのか？自分が酷いことやったって自覚してんのか？

「久遠……」

「マジでふざけるのも大概にしとけよッ！本気だとしてもこっちからふざけるようにしか見えねえんだよッ！なにが自分の世界救ってくださいだッ！なにが世界の崩壊を食い止めてだッ！一人でやってるッ！てめえ一人でやってるッ！一生やってるッ！僕たちを巻き込むなッ！」

「野蛮な……」

「……死刑でいいみてえだな。……【絶対不敗の炎光】」

クラウ・ソラス

今、最高にハイって奴だ。今なら人を殺しても何とも思わんだろ。ここまで人を憎んだのは二度目だ。

目の前にいるところも憎悪ってのは沸くもんだな。

「ク、クオン君ッ！？」

フランさんが止めようとする。

遅いってゆーか、最初から手遅れだよ。

「我に氣易く触れるなよ？」

「下等生物」

そこで僕の腹に鈍痛が。刺痛が。斬痛が。いろんな痛みが頭を突き抜けて、後ろの壁に吹っ飛ばされた。

一瞬、肺の中の空気が全部放出され、息ができなくなる。なんとか空気を吸い込み。敵を見やる。敵じゃないが、僕としたらもう敵だ。めんどいとか言ってもらえん。絶対吹っ飛ばす。

その敵は、驚くことに何にもなかったかのように、平然と乱れた服を直していた。

巫女、女だ。今回は例外。あいつは敵だ。

「その小さき女も一緒に連れてこられたことに腹が立っておるのだろうか？よいではないか。あの者も大概“ ”ではないか」

その単語を僕の脳が排除した。

体は驚くほど静かに鎮静化して行って、どンドン頭が冴えてくる。そして今度は驚くほど静かに、一言咳く僕。

「ダーインスレイヴ【血吸りの呪王剣】グラム【憤怒と激昂の解放剣】」

そこから静かに一歩ずつ糞に歩み寄っていく。

さようなら。

ばいばい。

会えてうれしかったよ。

じゃあね。

愛してる。

憎んでないよ。

僕が今から殺すのと。

君が言った言葉に因果は成立しないよ。

だから自分が言った言葉に後悔しないで。

大丈夫。

後悔する暇も与えないから。

まずはそのよくしゃべる口を切り落とすから。

まずはそのいらつく目つきをする目を潰すから。

まずはその鬱陶しい胸を吹き飛ばすから。

まずは殺すよ。話はそれからだ。

気持ちがいい方がいいだろう？

だから、トツテオキで殺してやるから。

そんなことを考えながら歩いていると横から二つほど塵が飛び出してきた。

それを軽く払って、再度歩みを進める。

いいじゃないか。今更滅るようなもん持ち合わせてないだろ？

だったら殺してもいいじゃないか。

凶忌。狂己。劫喜。

「あ……………ああ……………」

「不思議だね。人間って、一線を超えると、限界ってもんがないらしいよ？知ってた？ねえ、答えてよ。どうなの召喚の巫女様」

召喚の巫女の瞳から涙がこぼれる。

関係ないね。

「ほら、下等生物の反撃だ。高等生物の防御はどの程度なんだろうね？意外とあっさりと砕けるかもしれない」

「あ、謝るから、ゆ、許してく」何を？僕は怒ってないよ？全然

ちつともまったく怒ってない。けど、君を殺すってのには変わりがないね」

そこまで言っつて、剣を振り上げる。とりあえずは死なない程度に。

「クオン君ッ！剣を下ろすんだ！」

「少年、剣を下ろせ」

フランさんと、クラムさんだ。

「はい、ちゃんと下ろしますよ。まあ、コレの上ですがね」

そこまで言っつと、何かに巻かれる感触。恐らく弦術師だろう。その後が続く鈍痛。頭を押さえられ、床に叩き伏せられる。これはフランさんだな。床にめきめきいっとめり込む。不思議と痛くない。痛くないけど、体の方が耐えていないみたいで。思うように体が動かない。

そこから、なにやら言われて、それでも僕は召喚の巫女の方を見つめ続けていた。

冷めた目で。絶望した目で。

召喚の巫女の方は、なにやら抜けたような眼で。

脅えた目で。怯えた目で。

両者は見つめあっていた。

この日が、初めてかもしれない。

この日が、始まりなのかもしれない。

けど、そんなこと……。

「知らねえよ」

二十二話・とりあえず狂乱。そのあとに死刑（後書き）

久遠君、マジギレ

次回も宜しくお願いします

二十三話・色々あって、また色々ある。それって人生だから仕方がないよね！。

短めです。

では、じいじー！

庭や定理について考える知識もない。

なので、幼稚なことについて考えることにした。それなら考えないほうがましなような気もするけど。

世界の中心とは誰か？

やはりそれは世界を動かしている人のはずだ。けど、そんなモノはこの世界には存在していないし存在してはいけない。

個人で世界を動かすというのは、最早その人が世界そのものであるって、その人＝世界という等式が成り立ってしまう。

自己中心的な考え。この言葉は実に心理的なものをとらえていると思う。

究極的に言えば、世界の流れ自体自分を中心に回っている。そう、人間としてヒトとして存在したいのならば「世界は自分が中心だ」と胸を張って言わなければならない。

ま、その人の世界がどの程度なのかは知らないけど。
相変わらず、徹頭徹尾適当だ。

「時間つてのは、長いもんで……」

今でも10分経っていないだろう。僕の体内時計が壊れていなければの話だけれど。

何でもないが、天井を見上げる。牢屋だが閉塞感がない。たしか、今まで 世紀の大怪人 だとか 殺戮鬼 だとか、意味の分からん 奴ばっかが入ってたみたい。

知らんけどね。

今日は、色々、あり過ぎた……。

「……どうでも、いいけどね」

KOMが僕を呼びだしたから？

“アレ”が来たから？

「……分からねえよ」

そんなもんすぐに分かったら苦労しねえんだよ。人間、そんなに甘くねえんだよ。

何であんなに感情的になったかなんてのはすぐに分かる。というより、既に分かっている。

問題は、僕がどうしてこんなにも悩んでいるかってことだよ。いつもみたいに諦めればいいのに。

そしてら続かないのに。

流れないのに。

止まるのに。

終わり続けるのに。

終わらせ続けるのに。

ああ、神様。あんたって奴あ、最悪最低の存在だよ。

「サテ少年？鬱そうなきみに質問だ」

「……誰だ？」

「オレかい？オレは、バル。嵐と慈雨の神バルさ」

「……敵っぽく、見えないんだけど？」

現れたのは、蒼い髪をして、荒々しく猛々しい赤と緑のオッドアイ、背中には矛と剣。そして、中性的な顔立ちの男性だった。

「ん？まあ、味方だよ。こう見えてもオレは最高神の息子だからね」

「……知ってます。そして、時代の移り変わりとともに神から悪魔へと変わって行った……」

「ん、その通りだ少年。 蠅王：バル・ゼブル よつするに、ベルゼバブさ」

蠅の王にしては、イケメンすぎるような気もするけど……。

「まあ、そんな人間たちが勝手に決めたまらないしがらみに縛られるほど、神も悪魔も暇をしてないよ」

……さっぱりした性格の……神だなあ。

「それに、神も悪魔も、ベクトルは違えど信仰されるという点においては全て同じだ」

「……同一のものだと?」

「いやいや、違うよ。例えるならば、鏡だね。手を伸ばしても触れられない。それは、まったくもって同じようで左右反対の、全くの別物だ」

「……で、質問とはなんですか?」

「ん、少年。キミの夢はなんだい?」

「……は?」

いきなり何を聞き出すんだこいつ?

「……夢、ですか？」

「ちなみにオレのはみんなを幸せにしたかったんだがな」

……そんな人間たちに、裏切られた、と。

「まあ、オレはオレのしたいようにやったんだ。オレはいついかなる時もオレのやったことに対して裏切り憎悪その他諸々、全部受け止める覚悟だからな」

……違うねえ。僕の、夢、か……。

たしか、そんな残像、あったような気もする。いや、確かにあった。

「夢、ねえ……。たしか、7歳ぐらいまではあったかな」

「ふうん。それを聞かせてくれよ」

「確か……。繋げる人に、なりたい、だったような気がする」

「ん、十分で充分だ。少年、今さっき君の味方だと言ったのは嘘だ」

「……そうですか」

「今から君の味方になろう、少年。ソロモン72柱全員、全て、君の仲間だ」

「え？」

……いや、え？

「ん、なあに。簡単なことさ、序列1番のオレが神殺しの君と直談判。まあ、ベリアルが「私が行くッ！」とか言ってたが。ん、そんでもって、まあ、試したってわけだ。いろいろとな」

「……けど、悪魔でしょう？あなたたち」

「ん、少年。世界つてのは、バランスが大事なんだ。悪魔が壊すなら、神が、神が壊すなら、それは悪魔が均衡をとる番じゃないのかな？という感じになってね？」

……アバウトな。

「ん、少年。君の本当の危機に、世界の本当の危機に、現れてみせるよ。じゃ」

そして、消えた。面倒な……。
それに……。

「なにも、こんな牢屋の中で言わなくても……」

いきなり、味方になるとか、唐突すぎるだろ。別にいいけど……。

「問題は、いつつもいつつも、僕、か……」

それにしても、ベリアル、なんか可愛い口調だったな。眼福したいなあ。

KOMも、綺麗だったけど、全然眼福にならなかった。当たり前か。

あんな無機質な女、見ていて楽しくもくそもない。

けど、泣かせたのは、まずかったかもしれない。多分。謝ろう。あいつが謝ったらの話だけ。

ひよっとしたら、ひよっとしたらだけど、僕は“アレ”のことが好きなかもしれない。憎しみの裏は愛情っていうしな。

けど、“アレ”は、僕の……。うん。どうでも、よくはないけど、保留だな。

「……ソノミヤ」

いつの間にか、鉄格子の外、要するに牢屋の外にはKOMが。

「……スミマ、センでした」

深々と頭を下げる、KOM。初々しかった。

ここで、分かった気がした。なんだ、簡単なことだった。

僕があんなにも感情的になった理由なんて……。

「……ただ、謝ってほしかっただけだよ」

滑稽だね。笑えよ。幼稚だったな。

恐怖から頭を垂れるんじゃない、ただ、悪いと思って謝ってほしかった。

「名前、なんていう？」

「え？……ララ・A・ヴァーミリオン」

朱色の長髪。蝶の髪留め。蒼灰色の瞳。とおった鼻。そして、控

え目な胸。無いというわけではない、ちょうど手のひらサイズ……む。

「……眼福って、言っているのかな？」

「む？」

とりあえず、和解をした。それがいいと、僕も思った。
なんとなく、バルルさんのお陰だ、と行ってしまった自分がある。
けど、悪い気はしない。

まあ……。

「まあ、いつか」

二十三話・色々あって、また色々ある。それって人生だから仕方がないよね！。

KOM改め、ララ・A・ヴァーミリオンちゃんですー。ばちばちー。

推定、300歳ですー。ばちばちー。

次回も宜しくお願いします

二十四話： 凶行策（前書き）

うん、戦争フラグかな？

では、じじい！

二十四話：凶行策

「本当にもうこの子ったら、いっつもいっつも傲慢で人様に迷惑ばかりかけて本当にもう。なまじ力があるから調子にのっちゃっていっつも上から目線で本当に。だからお友達もできなくていっつも部屋で本ばかり読んで、頭ばかり良くなっちゃってコミュニケーション能力なんて皆無に近くて本当に。だから寂しくないのって聞いても黙るばかりで、けど、ちょっと人と話したら自分のことを一方的に通そうとしちゃって、それでまた人とのつながりがなくなっちゃって」

「い、痛い、痛いよ母上」

今、ララ（300歳なのでちゃんをつけたくなかった）が女性に頭を叩かれ続けている。

ララと同じで朱色の長髪。蒼の眼が特徴で、装飾が施された身の丈を超えるほどの杖を持った女性だった。

母上と言っているあたり、そのままなのだろう。

「本当にごめんなさいねえ？この子、常に上から目線で、それで友達ができなくて、所謂引きこもりって奴なのよ。だから、家族以外の人間に会うとすぐに気分が高揚しちゃって、偉そうな態度をとっちゃうの。本当は見た目どりのいい子んだけど、性格が本当に最悪になっちゃって、この子ったら本当にもう」

「あう、あう、あうう」

杖でぽこぽここと殴られ続けるララ。あうあう言ってるのが可愛かったりする。

横目でチラチラとこちらを見てくる。助けが欲しいのだろうか？いや、このまま見続けのもありかな？って思っちゃってるんで。なにになに？鬼畜？そこまで言われるいわれはねえ。

「久遠。随分と、あの女と仲がよさそうだな？」

『そつすね。かなり仲がよさそうっす』

「ないね」

一言で切り捨ててみた。

あ、顔真つ赤。南無南無。

「ほら、もう一度謝りなさい」

「あう……ソノミヤ「さん」、すまな「すみませんでした」あう」

「か、可哀想になってきたんでいいですよ」

300歳か。見えんな。

精神年齢が低すぎる。さらに、お母さんの見た目も若すぎる。なんだろう？そういう種族なのだろうか？

300歳で、見た目が15ぐらいなので。

300÷15=20!……20?20!?

20年で1歳ですか。

お母さんの方は、だったら人間年齢20の時に産んだとしたら、今こいつが15。

したがって、 $20 \times 20 + 15 \times 20 = 700$ 。……化けもんだ。

刹那、僕の耳を何かが通り過ぎ、後ろの壁にキイイイインという音を立てて突き刺さった。

ナイフだ。純銀製のナイフだ。
頬を生温かい、ぬるっとした赤黒い液体が滴り落ちる。
正面を見る。

「にっこお」

ララのお母さんが凄く、いい表情でいた。ベタだった。
とりあえず、笑い返しておいたけどね。お綺麗ですね、言うだけ
言ってみた。

「そういえば、自己紹介がまだだったわね。わたしの名前は、ユ
ラ・A・ヴァーミリオン。お察しの通りこの子の母親です」

そして、ララの後ろに回り前に押し出すと。

「この子と、仲よくしてあげてね？」

「……はい」

……命令……もとい、お願いだった。

「まあ、この子じゃ話にならないだろうから先代の私が来たんだ
けど……正解だったみたいね」

ですね。頭はいいんだけども、馬鹿みたいだ。

「カリス王。ソノミヤさん。会議の場を設けましょう。これから
のことについて話があります。国の重役など、総出席でお願いしま
す」

「分かり申した」

カリス王というのは、フランさんのお父さんのことらしい。それにしても、ユラ・A・ヴァーミリオン。なんか、本当に生物としての格が違うような気がする。

言葉の一つ一つに、重圧がかかる。

コツコツ、とワインレッドのハイヒールを鳴らしながらこちらに歩み寄る。

「……ソロモン72柱を、ねえ？まあ、期待しているわよ？神殺しクン」

「ッ!？」

「」

百枚ほど、上手だったようで。誰にも話していないのになあ。

「ソ、ソノミヤ、さん……」

「ん、どつしたの?」

いつの間にかララが目の前に。

「さんとかやめてよ。300歳だろ?」

「う、うむ。ス、スミマセンでした。」「これからよ、よろしく頼む」

……大分キャラが変わった。別にいいけど。

「ほら、早く来なさいララ」

「わ、分かりました……じゃ、じゃあな」

「うん」

ユラさんのあとを小動物のようにして行くララ。

あんなに偉そうにしているも、お母さん好きか。羨ましいな、お母さん。

ん？

なにが羨ましいんだろう？よくわからん。

ヒューマンが治める、超利己主義国家、大陸の中央で争っている

四大国の中でも2位の軍事力と、1位の研究力。

今現在、アクト大陸でもっとも繁栄に成功している種族である。

その、軍議。

円形の席に、6つの椅子が並べられている。

「ほう。神殺しが、出現しましたか……」

知性的なメガネをかけた、年若い男性。長い黒髪を後ろで束ねている。

「ハハアン。それつかつて、トワイライトの奴らア、打って出よ
うって魂胆じゃあねえのかア？」

短髪の、獯猛な男性。彼の横には、薄汚れた女性が。

「どうだろうねー。あそこは、戦争とかしない主義っぽいしー」

肩まで伸びた金髪を指でいじりながら、いかにもやる気がなさげに椅子に浅く腰かけている女。

「……フラン・エグゾディア……」

左腕がなく、片方の手で無い方の肩を握りしめる、銀髪瘦躯の男。

「とりあえずは様子見であろう？」

年をとってはいるが、厳格のある雰囲気をいまだに漂わせている
白髪の老男。

「ほつとけよ、どうせ雑魚だ」

そう言っつて、机の上でナイフを研ぎ出す天然パーマのかかった蒼
髪の男。

「いえ、欲しいですねえ。神殺し、ついでにフランエグゾディア
も」

「だが、どうする。今は、北のロンガンと冷戦状態であるろう？」

白髪の老男が、いぶかしげに眼鏡の男に話しかける。

「大丈夫ですよ。あそこだって、東のクルーシオと冷戦状態ですよっ？」

「えー、戦争すんのー？めんどー」

この金髪の女性は、ある男と繋がる場所があるようだ。

「どうせ勝てる戦争なんてー、しなくてよくねー？」

決定的に違うのは、この女が残酷ということだろう。

「ハッハー、馬鹿じゃねえの？やんねーと、意味ねエだろ」

「馬鹿じゃねーよカス。千切るぞ」

天井を見ながらさりと云う金髪の女。髪をいじるのはやめない。

「あゝアゝ？裂くぞ？」

「その奴隷のお姉ちゃんの股でも裂いてるカス」

欠伸を一つ。

「てめエ、一遍泣かされただけじゃあわかんねえ見てえだなア」

「一回だけねー。その他はアタシが勝ちましたー」

「てめッ」……やめなさい、二人とも」

割って入る眼鏡の男。それに嫌々ながらも従う二人。

「かつはつは！若いのは血気盛んであるな」

豪快に笑う老男。

「困りものですがね。先代が抜けたばかりですので、興奮しているでしょう」

やれやれと言った風に眉間に手を当てる眼鏡の男。

「で、どうするんだ？ローレライ公？」

蒼髪の男が、眼鏡の男、シャナ・ローレライに問う。

「もちろん、攻めますよ。利益になりますからね」

「策はあるのか？」

「愚問ですね」

「……失礼したな。凶行策」

「いえいえ。さあ、準備を急ぎましょう。『アダム』と『イヴ』も、出しますかね」

その言葉に、他の五人が、どよめく。

「……やりすぎというものではないか？」

顔をしかめながら、老男がローレライに言う。

「きつと、私たちに繁栄をもたらしてくれませうよ。絶対に、ね」

窓際で、天高く、天高くそびえる塔を見上げながら、邪悪に微笑む、ローレライ。

彼の眼には、利、しか映っていなかった。

「欲しいのですよ、全部……」

手を、広げ……。

「さあ、六大公爵殿方、凶行を始めます……」

翌日、ユラさんが言った通りに国の重役全てが集まった。
今、僕は凄いところにいるんじゃないだろうか？という、気付かなかった方が良かったことに気づいてしまった。

緊張するだろうが馬鹿。気づくなよ。

「皆さんに集まってもらったのは、他でもありません。この、神殺し、クオン・ソノミヤくんが現れたことは知っているでしょう？」

そのことに少しのどよめきが起こり、すぐに止む。このことは重役の人たちは知っていたようだった。

「それに呼応するように、神々が動き出しました。各地で被害が出ています」

このことは未知だったようで、どよめきが起こる。

「落ち着いてください。大した被害ではありません、さすがに高位の神は出てきていませんよ。今はね」

とりあえず、隅っこで小さくなっておこう。ちーさくまーるく。

「それで我がエターナルが動き出したのはご存知でしょう。それで、我が一族が各地に赴くことになりました」

悪魔狩りならぬ、神狩りですか。

「その折に、我が一族が自由に行動できることを許可してほしいのですよ」

「その程度のことでしたら、いくらでもござい」

「ありがとうカリス王。あと、」子息

「はい」

「フランさんのことか。」

「今までソノミヤ殿の面倒を見てこられたようですから、任せてもよろしい?」

「はい」

「よろしい。では、これでお開きと致しましょうか」

ユラさんが終了の言葉を漏らす。だが……。

「緊急報告ですッ!」

会議室の扉が乱暴に開けられる。それと同時に息を切らした男性が部屋全体に響くように叫んだ。

「何事だ?」

「ライブドが、宣戦布告を!」

ザワッ……

一気に、会議室がどよめきかえる。なんとというか、まあ、超展開? さて、逃げる準備でもするかね。

二十四話： 凶行策（後書き）

新キャラがいつぱいだろ、わっい。

中二乙と言ってわらってくれるー

次回も宜しくお願いします

二十五話：死は悲しいものだ。だったら、生とは喜ばしいものか？（前書き）

発想の転換

では、どうぞー！

厨二成分マックスだお。ようするに、戦闘でさー

二十五話：死は悲しいものだ。だったら、生とは喜ばしいものか？

結論から言うと逃げられなかった。

だってさー、戦争とか聞いてないしさー、神殺すだけでいいんじゃないのかよー。

神殺すのもいやだけどさー。

あ、誰も僕に戦えと言ってないや。ということは、部屋に戻ってみじめに布団をかぶって部屋の隅っこにでも行ってガクブル震えているとするか。

そして無言で部屋に戻ろうとすると。

「あら？どこにいくのかしら？ソノミヤくん」

「いや、部屋に戻ろうかなと思ひまして」

ユラさんに気づかれた。ユラに気づかれた。ユラさんに気づかれた。

昨日会ったばかりだけど分かる。この人腹黒女だ。

千里さんと同じ匂いがする。久しぶりにこの名前が出た気がするが気のせいだろうか？気のせいでもいいんだけど。

「ふうん。じゃあ、ララも連れて行ってあげて」

「……………何故そうなるし」

「ソ、ソノミヤ、い、行くぞ」

いつの間にか目の前にいたララが僕の袖を引っ張って、会議の場からつかつかと出ていく。

まあ、僕は後ろ向きに歩いているわけで」「とっ」とっとお」「になる
わけで。

「とわあいッ!？」

「キヤアッ!？」

……なんだよこのベタ展開。美味しくもくそもねえぞコンチクシ
ヨー。

まあ、ララを巻き込んで倒れたわけで。

……僕の手には、ちょうどいい感触があるわけで。

「な、にやにをするかッ!？」

「不可抗力だから怒らないでー」

「ぐ、うう……ふんッ!」

ふんッ!だって。時代を感じるねえ。300歳だから仕方がない
か。

それにしたら、胸の張りがよかったような気がする。あ、むっつ
りとか言わないで。

「わ、我がこの程度のこと取り乱してどうする。た、たかが胸
を触られただけではないか。生娘丸出しではないか」

何かをブツブツ言っているララ。

関係ないけど、なんで女の子の胸、所謂おっぱいって膨らむんだ
ろうね?だから生命の神秘というのだろうか?

こんなことを考える僕は絶対に病院に行くべき。どうして胸は膨

らむのかを。

とりあえず、頭の病院に行くか。

「ど、どうした？ソノミヤ」

「僕の頭のことについて考えてた。いや、でも……大丈夫か分からない頭で考えたところでそれも大丈夫か分からないということになるから、最終的に大丈夫か分からないという結果しか残らない。故に考えるのをやめよう」

「????」

言葉に出して確認してみたんだよ。

本当に僕の頭が大丈夫なのか心配になってきた。

窓を見る。蒼天が広がっていて、何とも気持ちのいい空だった。

気持ちいいが、不快だった。

何故かって？

そんなもん決まってる。ある者が目に飛び込んできたからだよ。

「クラウド・オシリス……」

城周辺にある幾筋かの塔。

その間。

眼に映ったのは、僕たちを巻き込むと断言したクラウドさん。

そう、その塔の間に、クラウド・オシリスは、笑ったまま、死んでいた。

会ったのは一回だった。

印象は濃かった。

なんとなく、なんとなくだけど、霧？さんの泣き虫をなくしたらあんな感じなんだろうなっていうのが、分かった。

死んだ？なんで？

死んだんではなく、殺された。

そう、他殺だ。

だとしたら、誰に？

あの人のことは知らないが、誰かに恨まれるような人ではないはずだ。

策謀？

けど、それにしただってクラウドさんは半端ではなく強いはずだ。

簡単には殺されない。

ヤバイ、ヤバイヤバイヤバイ。

禁断症状が……。知り合いが、死んだ。

僕が、殺したかった

違う、殺したのは違う人だ。

僕じゃない僕じゃない僕じゃない。違う違う違う。僕じゃない僕じゃない僕じゃない僕じゃない。違う違う違う。僕じゃない僕じゃない僕じゃない。違う違う違う。僕じゃない僕じゃない僕じゃない。違う違う違う。僕じゃない僕じゃない僕じゃない。

違っ、違っ、違っッ！

「ソノミヤ？」

「なにかなララ」

驚くほど冷静に返事ができた気持ち悪い。

「……知り合いが殺されたのが辛いのは分かるが、思いつめても始まらんぞ？」

「あはは何を言っているの辛いなんて思うはずないじゃないかそんなこと思わないよだって一回しか会ってないんだから交わした会話だって数回程度関係ない関係ない」

他人が殺されたからってなんだっていうんだ？

関係がないじゃないか。たかだか数回話した程度の人に、感情なんて移るはずねえだろ馬鹿。

所詮は、動物だ。豚が殺されても何とも思わないように、あの人が殺されたからってなんにも思う必要ない。
今更だ。

「廃終了。敗終了」

手をパンパンと鳴らす。

あの人は最初からいなかった、いてもいなくてもおんなじ存在でしたとき。めでたしめでたし。

事務的なことを考えようか。

あれは誰が殺ったのか。

今攻めてきている、ライブドか。しかし、一日でここまで来れる

というものだろうか？

誰が、何のために、どうして、あれを殺したのか。

謎は深まるばかりである！。

ちなみに僕たちは自室にいるわけで、忍廻とシキはクラウドさんの、何チャラ見舞いに行った。

どこにかつて？そんなの決まってる。

フランさんだ。

クラウドさんの幼馴染であるフランさんだ。

恋人同士であつたらしい。

あの死体を見たフランさんは、酷く落ち込んで安置室でぼーっとしている。

まるで抜け殻のように。まるで抜け空のように。

知り合いが死ぬのはつらい。だって居なくなるんだから。

本当の終わり。死んだら終わり？

なんて残酷な人生なのだろうか。人が生きると言うことは死ぬと
いうことなのだろうか？

生きていると、絶対に死ぬのだろうか。

だとしたら、死ななかつたら、生きていないのだろうか。

だとしたら、だとしたら、神々は、生きていないのだろうか。

死ぬという事柄が最初からプログラミングされることなく、いつの間にかそこに在った、存在は。

生まれた瞬間がなく、気付いたらそこに在ったという存在は。

やはり、生きていないのだろうか。

「ソ、ソノミヤ……言い難いことなんだが」

「……ふうん」

なにやら魔法を使ったのだろうか。いつも魔法が発動されるときの

光が耳元で小さく光った。

「クラウド・オシリスの死因は、内臓の破裂によるショック死だ」

「……見たところ、外傷はなかったよね」

遠目でしか見れなかったが、クラウドさんは綺麗なままだった。どこかが変形している様子もなく、ただ、初めてみたときのように笑っていた。

「ああ、外部的損傷はなく、むしろ、争った形跡すらない」

なんでそんなに細かいことまで分かるんだ？

ああ、忍廻か。

生物学も、博士号取ってたもんな。若干16歳で。

「殺害方法は、不明だ」

「だろうね」

「犯人も、不明だ」

「だろうね」

当たり前だ。分かってたまるか。

僕たちは会っていないから分からないが、あんなところに長期間放置できるわけがない。すぐに誰かに見つかる。

だとしたら、国の重役が集まっていたあの間に殺され、磔にされていたと見るべきだろう。

必然的に、主だった人物は犯人から排除されるわけで。

外部犯ということになる。

可能不可能を除外して考えるのであれば、やはり、ライブドの連中だろう。

それか、神。

それでもやはり、ライブドの連中であろう。

神なのであれば、とつくの昔にクラウドさんは殺されている。あの、ハイ・アベリリテイ高位空間とやらに連れ込まれてね。

「問題は、相手にクラウドさんを殺せるほどの人物がいるって、ことだろうな……」

Aランク。僕の一個上。

それでも、昇級試験には 野生化した上級竜種を単騎討伐 や 魔物に襲われた街を奪還せよ などの高難度のミッションがある。それに、クラウドさんはAランク如きの実力者ではないだろう。抜けたところはあるけど、実力は、違う。

そんな女性を、あっさりと殺して見せた、ソイツ。

今も、このデイブレイクにいるのだろうか？それとも、城内に残り、まだ、複数の敵を探索しているのだろうか？

Search and destroy。

感情もなく見つけた獲物を淡々と機械的に屠ってゆく。

そう……。

「ギヤアアアアアアアアッ!?」

「……【フラガ・ラック運命を別つ短剣】」

乱暴に開かれる扉。

そこから現れる、二つの“人間”の影。

「欲望を、見失った、憐れな人間か……」

「神殺し」

「クオン」

「ソノミヤ」

「……そうだね。見知らぬ誰かさん」

ちょうど、こんな感じに眼に生気がなく、淡々とした喋り方をする奴なんかうってつけの役だろう。

僕から向かって右側に標準的な体格、白髪で紅い目をした男性。僕から向かって左側に標準的な体格、白髪で紅い目をした女性。それぞれが、布一枚を巻くようにしてきていた。

「だ、誰だ貴様等ツ!？」

ララの驚愕した叫びに答えず、僕の方を見つめ続ける。その時……。

『トワイライトの皆さんこんにちは。今現在宣戦布告をさせていただいているライブドの、参謀をやっております、シャナ・ローレライと申します』

空から、声が聞こえる。話の内容からして国全土に響き渡っているのだろう。

ふと、窓から空をしてみる。

「な、なんだ、あれ……」

巨大過ぎて全容は把握できないが、何度か見たことがある。
仄かな光を発し、不思議な幾何学模様。魔法陣だ。

それが、空一面に広がっている。こんなこと、可能なのか？

第一、こんなこととして何の意味がある。

『我が国、ライブドが求めるのは3つ。神殺し、フラン・エグゾ
ディア、その国です』

『潔く渡すのならば、被害はあまり出ないでしょう。しかし我が
国は差別がいまだに残る地。ヒューマン以外の種族の方は淘汰され
るかもしれないね』

語尾に をつけ忘れてるんじゃないかというぐらい、愉快に話
す、声の主。

しかし、これは、ヤバイ。

国中が、混乱に陥るだろう。

ヒューマンとその他の種族での確執。神殺しの出現。

未知の成分で、満ち溢れている。

さらに、僕が現れたという情報伝達の速さ。電子機器がないと思
って甘く見ていた。

ここには、電子機器をも軽く超える魔法という概念があるのをす
っかり、いつも忘れてる。

そして、この二人の刺客。

なんてフットワークの軽い奴らだよ。

目的のために手段選ばねえ。

『今まで平和を満喫できたでしょう。大丈夫です。今にその平和
も終わります』

『最後にもう一度繰り返します。我が国、ライブドが求めるのは3つ。神殺し、フラン・エグゾディア、その国です』

それを言い終えると、空の魔法陣は綺麗さっぱり消えた。なんて、野郎だ。

これで、この国は追い込まれた。しばらくすると暴動も起こるだろう。

根付いていた差別の意識が、浮き彫りになるだろう。そんなことになれば、戦争なんかしている場合ではない。けど、今は……。

「クオン」

「ソノミヤ」

「一緒に来てもらう」

「大人しく同行すればよし」

「大人しく同行せずともよし」

「その場合」

「多少は痛めつけてもよいと、言われている」

その言葉と同時に、地面を蹴って距離を詰める。

ナイフの刃を返し、逆手持ちに変えて、頸動脈を狙う。

そんな攻撃が通じるはずもなく、男に拳を握られ、横の女に脇腹を蹴り上げられる。

「カツ……ハツ……」

天井にぶつかるが、それでも止まらず、3枚ほど天井をぶち抜いた後に4枚目でやっと止まった。

痛みは相当だったが、ダメージはそこまでなく、重力による自由落下が始まる前に床に降りた。

しかし休む暇なく、二人が天井をこれまたぶち抜いて上がってきた。

おいおい、ヒューマンの戦闘能力って低いんじゃないのかよ。あ、クラウドさんとフランさんがいるか。あと、クロムさんも。

「燃える炎。燃える焰。その全てを焼きつくす偉大な力を以って、戦場を奔り抜ける」

ララが何かをつぶやきながら、下から上がってくる。

「『プレリユード炎舞・序曲』」

炎の波が、舞うように二人を飲み込……まなかった。

男が、軽く右腕を払っただけで、炎の波は吹き飛び、ララもその衝撃に顔をしかめる。

それと同時に並行に、横の女性が僕に向かって走ってくる。走るといふ表現はよくない。

歩いた。そう、一歩で間合いを詰められた。

咄嗟に、首と頭を腕でガードする。

女はガードしていない鳩尾に、容赦なく手刀を放ってくる。それで僕の体が貫かれることはなかったが、壁に激突してそのまま壁を突き破り、外へと放り出される。

「え？」

ここは山の上の更に城の上層部。その山というのが結構標高が高く、僕が放り出されたのが標高100メートルといったところだ。恐怖に体が震えるが、僕が放り出された方を見る。

女の方が、同じように、躊躇いもせず、僕を追いかけてきた。

空に放り出された瓦礫の上を、まさに目にもとまらぬ速さで移動し、僕の上に移動すると、僕の腹にちょうど当たるよう、地面に向けて踵落としをプレゼントしてくれた。

自由落下なんて優しいもんじゃない。0.1秒もしないうちに地面へとめり込む。

「ぐっはッ!?!」

これで死なないのは、出しておいたフラガ・ラックのお陰だろう。天の羽衣が発動しているみたいだった。

それでも、今度は体の芯に来る激痛が脳味噌に突き刺さった後、体中に情報が伝達される。

ヤバイ、格が違う。

生かして連れて来いと言われているはずなのに、躊躇なく殺しに来た。

「傲慢・嫉妬・憤怒・怠惰・強欲・暴食・色欲、七つの罪に問われし人類。裁かれよ、絶望せよ、墮落せよ」

右手を振り上げながら、ぶつぶつと囁く女。

落下と右腕の振り下ろしが同時に行われ、一層の黒い光に覆われる。

「『失樂園』」

黒い光が一条、投げられるようにして、放たれた。

しかし、それで終わるはずもなく、それは両の掌にあらわれていたみたいで、それを、投げまくってきた。

それが、正確な狙いは定められず、しかし、凶暴な数が、僕に向かって降り注いだ。

上がる、土煙り。すっかり変わった地形。

「ぐ……うう……」

なんともまあ、酷いやられようだ。

腕は折れただろう。とりあえず、急所に当たりそうな奴だけを防いだ。一発一発の威力がシャレになってなかった。

「捕獲、成功？」

「ろかく 鹵獲の、間違い、だろ……」

僕は仰向けなので必然的に上を向いているわけで、少し、ララのこと
ことが心配になって僕が放り出された個所を試してみる。

視力は、2・0なのでよく見える。格闘中だ。

ララが男の脚を掴んで、地面へと振り投げた。グングンと加速し、ズドンツと落下音ではないような音とともに地面に叩きつけられる男。

しかし、すぐさま何事もなかったかのように起き上がる。

「な、なんだこいつら」

まるで機械。最初は軽く考えていた。

軽い考えは、重い力に潰されたみたいで。ララは、何とか戦えているみたいだが、ここまで強いと2対1では苦しいだろう。

しかし、今この城には、フランさん、クラムさん、ユラさん、シキ、多分戦わせたら最強クラスのメンツがそろっている。

ひょっとして、こいつらは……そいつらをも圧倒できる存在なのか？

この強さな異常だ。

最初に攻撃したときだつてそう。人間刃物を向けられれば自然と体が硬直する。

この二人は、そんなこと忘れたかのように、実に綺麗に僕を吹き飛ばした。

「ばけ、もんだな、こりゃ……」

僕が知る限りでは、そう、それ以上を知らない。

フランさんをも打倒できる自信があるのか？軽くあしらう程度で、他の四人も相手取ることができなのか？

それこそ、空前絶後、荒唐無稽だ。

なので僕は願う。

新たな仲間の出現を！

ご都合主義の顕現を！

……ないようで。

さあて、一緒踏ん張ってみるとしますかね？

「踏ん張らなくていいよ久遠君 いつも通り、恰好つけてくれればそれでいいよ」

「そうそう。頑張るってキャラじゃないだろうがアホ」

「え？」

……ご都合主義が現れた。

勇者（仮）クオンの選択は？

- 1 帰ってくれと嘆願する
- 2 帰ってくれと切望する
- 3 帰ってくれと請願する
- 4 とりあえず無視
- 5 助けを求める

勇者（仮）クオンは、突然の助っ人、超越者のおねいさんと、理不尽で理不尽に助けを求めることにした。

行動成功率は50%。

「み、惨めな僕を、助けてくれますか？」

頼んだ。死ぬのは嫌なんだ。

「ミーの好きな惨めな久遠君を見捨てるわけないじゃない」

「……惨め……羞恥プレイツ!？」

あ、仄己先輩むっつりー。キャツキャツ……はしゃいでみたかったんだ。

千里さんどsだー。

変わらないなあ。いい意味で？いいのか？この状況は？
つて。

勝てるわけねえだろうが！
いくらなんでも無理だ。

相手は、人間という概念から逸脱している……いや、まだ限界の範囲内なのか？

「心配しないで。ミーは、超えてるから」

……迂闊に思考もできない。まあ、読まれて損するようなことなんて考えてないけど。

「だけど……」

「『だけど……』。お前って、そんなキャラだったっけか？」

「いやしか」

それを言い終える前に、男と女が突っ込んできた。返り討ちにされるだろう、されなかった。

二人の腹に、僕にしたときと同じような蹴りを放って、城壁まで吹っ飛ばした。

城壁にめり込む二人。

どごん。

遠目で見ても分かる。二人とも「きゅ」と、目を回していた……。

……かませ犬かッ!?

「さ、最終的に、頑張らなくちゃなんないじゃん……」

二人とも、かなり強いはずなんだけどなあ。

油断、だな。

けど、千里さんは、心が読めるはずなんだけど……。簡単なことか。

「心が、無いんだなお前ら……」

思わず、考えず、躊躇せず、悪もなく、善もなく、ただ、命令に、

従う。

それだけしか、考えられないよな。

だとしたら、道具か。

いくら千里さんでも、無いものを見るのは不可能だ。

そこに至っては僕の、領分だし。

え？妄想のことだけど？

なので、僕は相手が何しても驚かないことにする。

相手が、世界を割っても、第二形態に移行しても、驚かない。

全てのことは、僕の予想範囲内。

「右手には、フラガ・ラック。左手は……開けておくか」

まあ、いつちよう。

僕の、僕による、僕の為の、僕にしかできない戦い方という奴をやってやるか。

両手を握る、よし、折れてない。

フラガ・ラック。自動的に相手に飛んでいき、自動的に相手を切り刻んでくれる神剣。

これを、投げるッ！

別に武器に愛着があるわけではないので、使い捨てだ。別になくなるわけじゃないけどね。

それを、難なくかわされる。こんなもの、かわされて当然だ。次に。

「ゲイボルグ【幻想棘】」

を、二本同時に、創造する。想像する。

召喚の術ではない、ということとは分かっている。じゃないと、僕の想像通りの武器が出てくるわけがない。

なので、それを、創りまくる。

そんでもって、投げまくる。

ゲイボルグ。投げれば30の鏃やじりとなり飛んでゆく。突けば30の棘となり破裂する。

それを、ところ構わず、投げまくる。

「フッ」

「シッ」

ところ構わず、全部弾かれたけど……。

腕、折れてなかったのは良かったけど、やっても意味ないんだっ
たら、やらないのと同じじゃん。

無駄か……。

……無力じゃあ、ないな。

「ソノミヤッ!」

ララが、僕が吹き飛ばされたところから飛び降りてくる。

どすん、とも何とも言わずに静かに降り立つララ。

そんなこと可能なのか？

「今さっき、人影が二つ現れてすぐにどこかに言ってしまったよ
うに見えたのだが……」

「き、気のせいじゃないかな？」

これ以上、あの二人が惨めになるのだけは避けたい。

あんなに、派手にやられたとあっちゃあ……派手？

あれ？違和感……派手なのに、派手なのに、なんで

「誰も来ない？」

ありえるのかそんなこと。

どんなに傷心中だとしても、フランさんは近衛騎士。その本分を忘れることはないだろう。

ましてや、クラウドさんが殺されて、すぐに、城内での戦闘音。

フランさんであればすぐに、飛んでくるはずだ。

それこそ、僕が城の壁を突き破って外に出たときから。

……空間が、空間が遮断されている？

そういえば、昼時だと言つのに、この城下を見渡せる城から街を見ても、なんの雑踏すらうかがうことさえできない。

まるで、あのとき、ハイ・アヒリテイ高位空間に呼ばれた時のごとく。

だけど、この二人は、ライドの人間のはず。

いや、だとしたら、千里さんと仄己先輩もか？

どうなっている？

どういうことになっている？

狐に、化かされたか？

「ソノミヤツ！来るぞツ！」

二人が、突っ込んできていた。

とりあえず、この二人を、何とかすることが先決のようだった。

構図は、男はララが相手をし、僕が女にボコられる。

うん、妥当な線だな。ララが男を倒すまで死ななきゃそれでいい。なので。

「頑張れララツ！そんな君を僕は応援している！」

そんな言葉とともに、両者はぶつかりあった。

ララは男とぶつかり合い、僕は女に吹っ飛ばされた。

地面を二転三転して、やっと止まる。ここで「はらひりほろ〜」
と言って気絶できていたら、どれほど楽だったか。

……そんなことはない。相手は、とりあえず僕を動けなくするらしい。

あの、黒い光が、また両手に集まりだした。

一条の黒が奔る。

「『^{エリク}失樂園』」

また、またも、否、あのととき以上の黒が、僕を塗り尽くした。

そのとき、“僕”の体は静かに、生命の終わりを感じて、確実に“僕”以外の何かが、“僕”の意識を乗っ取った。その表現は正しくない。“僕”と、意識を共有した。

その、僕以外の何かは、ただの生存本能の塊で、生きることしか考えておらず、次の瞬間、女の目の前にいた。

自分でも、どんな動きをしたのか分からない。

ただ、前にいた。

それから、静かに動き、目の前にいる女、いや、女というには少し幼い女性を、生存するため、その存在を削除しにかかった。

それだけは、避けたい。

なんとか、止める。

殺せ

殺すという概念を、殺してやるよ。

いいから、黙ってる。

“僕”

ここまで来ると、止まっていたときが動き出すかの如く、女性が行動を起こす。

何の前触れもなく、膝から崩れ落ちた。

そのことに、男の方が気付いたのか、ララを牽制し、こちらに近寄ってくる。

「『イヴ』、任務失敗。帰る」

「……うにゅ」

そういうと、男（まあこちら男というには少し幼い男性なのが）は女の子？を肩に背負って、忽然と姿を消した。

それと同時に、世界に人の気配が充ち溢れだす。

あの二人を何に例えるか？そんなもん

「嵐……みたいだったな」

いや、突風か？いや、突発性＋破壊力だから、竜巻といったところか？

まあ、嵐でも竜巻でも、被害を出すところは等しく同じだ。

とりあえず、僕も、限りのある世界の住人なので、倒れることにした。

「続きは、次回……なんちって」

冗談は、まだ言えるみたいだったけどね。

ただ、世界は真っ暗になった。

所謂、ブラックアウトって奴。なので、さようなら。

二十五話：死は悲しいものだ。だったら、生とは喜ばしいものか？（後書き）

今までにここまで主人公がいたぶられる小説があっただろうか？

A ありましたせんせー

む、そうか。

久しぶりに戦闘を書いてみました。

ライブドの動きがアクティブすぎる。宣戦布告して切り札投入までの期間が短すぎる。切り札として、切るべき時に切ってない。なにより設定が甘い。

主人公が能力の穴をつきすぎて、なにやら面白いことに使い始めそうで怖い。

主人公の性格が、作者でもつかめない。

ビックリした。

作者の戦闘シーンの文才のなさに……orz

けど、一応、クラウドさんを死なせるために出しました。

Q クラウドって死ぬ前提で登場したのー？

A 最初はこんな小説じゃなかった。神様倒してハイ終わりの王道系で漫画でやるべき話だった。さらにいうと、なんでここまで主人公の性格が二転三転してしまったのか謎である。なので、クラウドさんは最初から最後まで生存させる予定だった。けど死んでしまった、それだけのことです。

Q もしかして一人称が私だったからですかー？

A 違います。そして使いどころがなかったとかそう言う訳でもありません。ただ、誰も死なないなんてのは虫がよさすぎてなんか胸糞悪かったから、ただそれだけです。

Q 最後に、この小説のテーマはなんですか？

A 一人の少年が気をしていくラブコメです。嘘です許して

はい、一人問答でした。何やってんだ馬鹿、このドアホ。

いや、いる筈もないクラウドさんのファンにせめてもの言い訳を…
…いないならする必要なかった。全登場回数、2回だもんな。

こんな作者ですが、見てくださる方に感謝しながら

次回も宜しくお願いします

二十六話…いっしょに……。 (前書き)

短めだよ。

では、さよなら。

二十六話：いっちょう……。

メリイ……ビチィッ……グジュッ……。

不快な音が聞こえる。

音のした方を見ようとすると、意識に体がともわない。

この感覚は、夢なのだろう。

やっとのことで、音のした方を見ると、“アレ”が霧？さんを解体していた。

「あははははははッ！おいしーよ？」

頭蓋骨の隙間に手を突っ込み、力を込めたかと思うと、ぐりぐりと掻きまわしはじめた。

僕が見ているのを分かっているながら、楽しそうに、愉しそうに、まるでおもちゃで遊ぶ子供のように、無邪気に、殺戮を続ける。

霧？さんは、最初の一撃ですでに、息絶えていた。

残るのは、体が痛覚に反応してビクンと揺れる肉塊だけ。

「あはははははははッ！私の好物決定だね、人肉は！」

僕はこの時、なにもせず、ただ、黙って傍観していただけだ。

最後に“アレ”は、霧？さんの肉を一口、口に含み、こちらに歩み寄ってきて……。

「……んッ　　ぶはッ！」

口移しで、その肉を僕に喰わせやがった……。

その時の表情は、とてもとても満足そう……また、今度はなにも含んでおらず、キスをしてきた。

「あはッ！大好きだよ

僕^{わたし}」

「ッは！？」

夢だって、分かってんのにな」

夢が、怖いと思いはじめたのは、いつだろうか？

多分、最初から。夢ってというのは、現実にフィルターをかけて、いろいろ、見辛くする。

そっちの夢じゃないか。

「……ああ、たしか、気絶したのかな」

あの二人が去って、僕も気絶したと。

まさにフルボッコにされたもんな。

「で？ここはどこだ？」

あたりを見回すが、見たことがないんじゃないか意味がない。

まあ、見た目が医務室なので、あの後すぐにここに運ばれたと見えるな。

「それにしても……僕、このまま、どうなるんだろう？」

僕の正体は露見した。

なら、軍事利用されるだけだろうか？

僕の願いは、何にも反映されることなく、他人の欲望に沈むだけだろうか？

……それは、嫌だな。

さしあたって、選択肢は2つ。
このまま、僕は姿をくらます。
このまま、僕は利用される。

前者の場合、忍迺とシキ、あと千里さんと仄己先輩がいるから動きづらいだろうけど、まあ、仕方がないとする。

後者の場合、僕以外のみんなを逃がしてあげたいと考えるわけで。

「うーん、どう考えても、後者の方が成功率高いんだよなあ……」

前者は、まあ、理想形なわけで。理想はいつだって、人間に敵し

い。

後者は、まあ、現実的なわけで。現実もいつだって、人間に敵し

い。

「まあ、どっちも甘くはないというわけで……」

何でこんな事務的に考えてんだらう？

僕、こんなだったっけか？

そこで、ドアの開く音が室内に響く。

「あ、起きたか久遠」

『よかつたつす！』

「……ミーは、恥ずかしくて顔を合わせられないじゃない」

「……おいらも」

よく知った、四人だった。

僕が思考していた、四人だった。

タイミングとしては、最悪だった。

「ん、この通り、大丈夫だよ」

手を広げて無事をアピールする。

「それにしても災難でしたね、千里さん、仄己先輩」

僕なんかに巻き込まれたこと、とてもとても災難だ。

「久遠君に巻き込まれるなら本望よ」

「……ホ、ホント迷惑だぜ！おいら、バイトがあるってのに！」

「おい、僕様には言わないのか？」

「……いや、忍廻は巻き込まれるってわかってたからさ。」

「まあ、いい。で、久遠。今、現状をどのくらい把握してる？」

忍廻が試すような口調で問いかけてくる。

「僕が、軍事利用されようとしている。ライブドが僕を欲しがってる……このくらいしか分からないけど？」

「……お前、3日ほど寝ていたのは気づいていたか？」

「3日！？そんなに寝てたの？」

「ああ。酷く消耗していたからな。ちょうどいい、休憩時だった

んだろっ」

「……そうなのかな」

「そうだと思うとけばいろいろ楽になる」

らしい。そう思っておっつ。

「で、あのアルケミストの二人は早速各地を回ることにしたらしい」

「え？戦争とか手伝わないんだ」

「ああ。あくまでも、エターナルは中立国。どちらにも手を貸さないし、貸せないらしい」

それもそうか。私情だけで手伝えるほど、戦争は、無秩序なものじゃない。

ちゃんと、ルールあるしね。この世界はどうか分からないけど、宣戦布告しないとイケない。

その点において、ライブドはすでに戦争で斬る状況下にある。

「で、今、国中で暴動が起きている。あの布告で、ヒューマンに対する批判の声が高まった。それで、住民が暴徒と化して、国から離れようと国が張った検問などを破壊している」

やっぱりか。それにしても、早い。

「で、一部住民は、お前を引き渡せとこの城に押し掛けてきているわけだ」

「フランさんも？」

「……どうだろうな？今、交渉などを行っているそうだが話を聞かないらしい」

「そ。……」

平和って、あっけなく終わるもんだな。

王は国を護るけど、国は王を護らない。

まあ、護らない王も存在するわけだけど。

「で、僕はどうすればいいのかな？戦争して勝てるような相手じゃないだろ？」

「だろうな。お前が寝ている時に見せてもらった地図でも、国土だけでも10倍以上はある」

10倍か。この国が他国と同盟を結んでるってわけでもないし、勝てないだろうな。

で、歴史上からこの国は消えさせると。

……それも、なんかいやだな。

あの、アンデッドの子供たちはどうなるんだろう？

あの、宿屋のおやつさんは？

行きつけの、定食屋のおばさんは？

みんな等しく、不平等を与えられるんだろうか？

僕が戦ったら、勝てるんだろうか？

勝てるのか？いや、勝てなくてもやった方がいいのか？

どうなんだろう。

「……戦うそうだぞ。特に、フランとクラム、あの二人は酷く、怒っている。クラウドも含めた三人が、この国の戦力の要だったらしくてな？あの三人も、相当仲が良かったらしい」

やっぱり、フランさんも怒るんだ。僕だったら、絶対に怒らせたくはない人物だよな。

クラムさんも例にもれず、怒らせたくはない。

「僕たちに、どうしてほしいとかいうのは？」

「ないな。僕様たち自身に任せるらしい」

……凄いな。てっきり、軍事利用されるのかとばかり思ってたけど。

「で、あの二人はすでに、要塞に向かったらしいぞ」

「要塞？」

「ああ。この国を護る最終防衛ライン。防御力は、まあ、設計図を見るあたり上の下だろうな」

「そっか……」

そこで、新規の二人が。

「じゃ、ミーたちは行くね？」

「おう、顔だけと思ってたしな」

「え？どこに？」

「戦場よ」「戦場だよ」

迷いなく答えた。

事も無げに答えた。

躊躇せず答えた。

「え、そ、それって……」

「うん。負けっぱなしは、ほら、ミーって負けたことがなかったから」

「悔しいって素直に言っとけよ」

「まあ、そういうわけで。帰ってきたらちゅくしてね」

後ろ姿で、手をひらひらとさせながら、ドアに向かう千里さん。

「な、なんか奢れよな！」

それを追うようにして、駆けていく仄己先輩。

僕は、それを何にも言わずにただ見送るだけだった。

ドアが開けられ、閉められる。

「……なんていうか、あれだな。僕とは思考パターンが違うって
いうか」

僕だったら、負けたら、負けっぱなしだ。負け続ける。一度負けたものには、二度と挑戦しない自信がある。

けど、世の中には、負けたことが悔しいと思う人たちもいるわけ。

『なんか、凄い人たちっすね。普通に、凄いつす』

「……………ああ。憧れるよ」

忍迺の口から憧れという言葉が聞いたのは、霧？さんが生きている時以来だろうか。

僕も、あそこまで正直に生きることができたらどれだけ幸せかと思う。

けど、僕が正直に生きると、だれかが正直に生きることができなくなる。

「久遠は、逃げるか？」

「……………どうだろうな。戦うかもしれないぜ？」

「それこそ、前代未聞だろ」

「だな」

そう言って、僕は、ベッドから体を起こす。

「ただ一つ言えるのは、僕の知り合いが傷つくのは、嫌だ」

さあて、いつちよっ……………。

「主人公に、なりに行きますかね？」

そう言って、僕は、人を殺すと分かっている戦場に、現実、赴くことにした。

二十六話：いっちょう……。 (後書き)

次回！

久遠、戦場に降り立つ！

神殺しの由縁！

混沌！

の三本です！嘘です！

では、次回も宜しく願います

二十七話：本分（前書き）

連投！

クオリティは何時ものように最悪となっております！

では、どうぞ！

二十七話：本分

ライブドの襲撃から、1週間。ついに、ライブドが侵攻を開始した。

地力の差は歴然としていて、次々と堕ちてゆく砦。それを、ただ黙って見ているだけの無能ではないトワイライト。

兵の質としては、トワイライトは高い部類に入る。いかんせん、数の暴力とは恐ろしいものだ。

「第一グリフォン部隊、爆撃せよ！」

「増援はまだかッ!？」

「魔法部隊、到着いたしました！」

飛び交う怒号の中、二人の男女が降り立つ。白髪紅眼、神の様相をした男女だ。

しかし、この線の細そうな男女が降り立つことによって、戦局は圧倒的にライブド側に傾くことになる。

蹂躪、殲滅、破壊。

現れた瞬間に、二人は、部隊を壊滅させた。

攻められて、怒りに燃える兵たちを、淡々と、その手を血に染めながら、殺戮して行った。

それを後局で見つめる、一人の女性。

金髪で、どこことなくやる気のない感じだ。

「あーあー、やっぱあたし来なくてよかったじゃん」

「そ、そうは言いますが、やはり指揮官となるお方がおられなければ」

「だーからー、あたしじゃなくてもよかったですじゃん。あたしは、ぼーっとすることに色々忙しいの」

「そ、それはお暇なのは」

「うっさい、干切るぞ」

虚ろな目で、傍らに控えていた男を脅す女性。

この女性の名は、ファーク・キルメリア。ライブドの六大公爵の一人にして、將軍職にも付いている。

この女性自体は、放っておけば無害なのだが、周りがこの女性を巻き込んでゆく。

なので、仕方がなく、本当に仕方がなく、殺戮しているだけ。

「さっさと終わらせるよねー。あの砦落としたら、次はあれだろ？最後の要塞なんだろ？」

「はい。もう少しでございます」

「じれったいなー。こんなむさい奴だらけの戦場見たってつまらないってのー。イケメンはいないのかなー？」

「僕なんてどうかな？イケメンじゃないけど、不細工じゃないって自信はあるよ」

「……だあれ？あんた」

「怖い顔しないでー。怖いからさ」

「……名乗れよ。千切るぞ」

「……ったく、最近の女子は何考えてんだか。めんどくさいけど、答えてあげるよ。神殺しって呼ばれてる、クオン・ソノミヤです。仲よくしてねー」

そう、久遠だった。

あれから、知り合いが傷つかないためにはどうすればいいか考えたところ、戦わせなければいいじゃん、という思考にいたり、知り合いがいる砦を超えて、こちらにやってきたわけである。

「へえ。結構、かつこいいんだ。神殺しなんて言うから、もっとごつい巨人みたいな男かと思ってたけど」

「僕もなんで……もういいか」

説明するのが面倒くさくなった久遠。

「で？なにかな？クオンくん。あたし、さっさとあの砦を潰して戦争終わらせたいんだけど」

「奇遇だね。僕もそう思ったところだよ。とりあえず、君を倒して」

いつもの久遠らしからぬ態度。理由は、ない。

「一人で？」

「うん、一人で」

侵入してきた窓から、相手を見つめながら言う。

「ふうん。面白いね君。あたしの奴隷になんない？」

「まあ、もう、仕込みは終わってる」

華麗にスルーした久遠。その顔は、少しばかり残念な顔だ。

「その仕込みとやらで、このあたしを殺せるの？」

「世界って、自分が思ってる以上に不思議なところなんだぜ？何が起るか、分からない」

「やってみせろよ。その前に、君を屈服させてあげる」

腰かけている椅子に更に浅く座るファーク。不遜をそのまま体現したかのような格好だ。

「そーですかい。なら 卑怯とか言っなよ？」

潜在能力などを無視したら、今の久遠はこの戦場にいる人間にどれだけかてるだろうか？すぐに殺されるだろう、いや、殺されないが。

手を、空に向けて挙げた。

「降り注げ……【絶対不敗の炎光】」

クラウ・ソラス

そう、彼は戦うことはしなかった。

彼が選んだのは、無差別殺戮。彼が神器を創造するのは何も、彼の掌の中だけではない。手のひらの中の方が作りやすいと言っただけで、体から離れた場所でも、創造することができる。

そのためには、かなりの集中力が必要で、だが、時間は腐るほどあつたというわけで。

彼は、敵陣営上空に、1万のクラウ・ソラスを想像していた。

後は、彼の詠唱を待つだけであつたのだ。

それで彼は最後の勧告をしに来たわけであつたのだが、意味はなかつたというわけだつた。

敵陣営に、1万のクラウ・ソラスが降り注ぐ。

一本一本が、伝説級の威力を持っている。それが、地面に落ちた。

コオオオオオオオオオ……。

結果は、成功。ライブド側の兵士を、ほぼ殲滅した。

「……ね？ 僕一人で充分だつた」

彼女が見つめる先で、彼女の兵士は壊滅した。

彼が宣言したように、彼一人でやってのけた、それに、驚くしかできない。

「……けど、まだあたしは倒されていないよ？」

そう、久遠はこの自分がある砦には被害が出ないように、剣を落とすとした。

なので、この砦自体は無傷……とはいえず、もうすぐ恐慌状態に陥ることは明らかだつた。

「負けだよ、あんたの。ほら、僕の怒りを買った、だからお前らが負けるのは決定事項だ、って奴だよ」

「あたしは、負けてない。負けてない負けてない負けてない負けてない負けてない負けてない負けてない負けてない負けてない！」

手首をこきりと鳴らし、久遠に掴みかかる。

彼女の武器は、握力。時々、剣も使うが、素手の方が強かった。

「ああ、そういうのどっちでもいいよ。そうですね、僕の負けです。はい、君の勝ちね。これでいいんだろ？」

勝ち負けには、興味がない久遠。負けを認めさせることよりも、結果が大事であった。

「よくないッ!？」

掴んでいた手に力を込める。

殺った。

そう思ったファーク。しかし、

「離せよ。もう終わってんだよ」

既にイージスの盾を展開していた久遠。彼女が掴んでいたと思っていたのは、イージスの膜だった。

「じゃあね、僕に似た人。精々、ここで変わることをお勧めするよ」

そう言って、何事もなかったかのように、その場を去った久遠。残ったフアークは。

「……………うあああああああああああああああッ!？」

ただ、叫んだ。

「おうえッ……………ううえッ……………ふう」

人殺すつてのは、辛いな。それだけしか感じないけど。たしか、一人殺すのは五百万人殺すのと同じだとか何とか。あゝ、また気持ち悪くなってきた。

「……………ふう。さて、次は」

僕の計画はこうだ。

今さっきみたいに、行ける所まで行ってみよう。

よつするに、空から武器を落とすわけで。

今さっきは、あの二人の男女に見つからなかった。それは素直に幸運だ。

次は真面目に戦おうかと思ってる。

まあ、このチート能力をフル活用するわけだけど。

「まあ、忍廻たちはフランさんたちのところにいるから無事だと
して……次、行くか」

もうすぐ、ここにも敵勢がやってくる。

僕を恨んでやってくる人もいるだろう。僕が殺した人にももちろ
ん、家族はいただろう。その人たちからも憎まれるだろう。
それが……

「それが、どうした……」

それから、戦争は加速して行く。

久遠が、伏線や、武力や、思惑を全て、破壊したからだ。
絡み合っていた、思惑などなくなった戦争。残るのは加速だった。

「久遠も、頑張っているみたいだな」

『そつすね』

なんとも、落ち込んでいる二人。それもそうだ。置いて行かれた。
久遠が突如一人で行く、などと言い始め、上手く丸めこまれて、

置いていかれるという事態になったのだ。

何をするかだけは聞いていたので、今起きていることが久遠によるものだけということだけは分かっていた。

『大丈夫つすかね?』

「……あいつは、誰にも殺されないよ。それに、殺せない」

『不死者かなんかつすか?』

「冗談めいて言うシキ。」

「いや、死にはするよ。けど、殺されないよ」

『?..?..?』

「まあ、いいさ。それより……あの二人は?」

『止めるのに必死つす』

そう、千里と仄己にこのことを話すと、暴れ出した。

千里の場合は、テレポーターションなどが使えるはずだが、いかんせん、ただいま久遠はイージスによって、世界から遮断されていた。

なにをしているか分からないどころか、場所の特定さえできない状況だった。

「まあ、あいつが戦うって決めたんだから……見守るのが、一番、なんだけどな」

よし、要塞の方に帰るか。全部終わらせるみたいなこと言って、おわらせてねえじゃん。って言われても仕方がないけど、疲れたし。あとは、頼ってもいいよな？

それに、あの、白髪の二人は殺せそうにもないし。

「帰るっ……」

「おかえり、久遠」

なんか、普通に言われた。

なんか、僕、最初からそこにいたみたいに普通に扱われた。何にもされなかったのはよかったよかった。

けど、なんか不気味だ。

いそいそと、僕は要塞で用意されていた自分の部屋へと行く。バアルさんがいた。

「ん、こんにちは」

「っ、こんにちは」

いや、僕のプライバシーとかなし？

「なんか、神との戦いで本当は忙しいはずなのに、人間という種族は本当に、よく分からないな」

「……そうですね」

そう。この力は、本当は神を殺すためだけの力。

僕はそれを人殺しにつかっているから、何を言われても言い返せない。

「ん、言いたいことは、それだけだ少年。くれぐれも、本分を忘れるなよ？」

そう言って、消え去るバルさん。

「……本分、か」

僕の本分って、なんだろうな？

「って、神殺しに決まってるだろ」

けど、それだけなんだろうか？そうだったとしたら、酷く、辛いな。

空を見上げた。

雨空なので、微妙だった。

二十七話・本分（後書き）

つ、疲れたお……。

おやすみ

次回も見てくださいれば幸いです

二十八話：激突！ するはずないじゃないか。やっぱりいつも通り飛ばされるだけ

眼を覚ますと、いつも以上に布団が膨らんでいた。

「……は？」

いつも以上って、いつも膨らんでるような言い方だな。

そんなこと、ないだろう？

僕の体がだるいのと関係あるのか？この布団の膨らみは。っていつか、誰らだ？

がばりと布団をどけると、4人だった。

とりあえず、現実を整理するために布団から出て、窓際の椅子に腰かけて、ふう、と言ため息。

「……なに？」

本当に、なんなんだ？まったく一体全体どうしたことなんだ？

何故、四人もいる？

とりあえず、現実を整理した。

忍廻、シキ、千里さん、仄己先輩、4人いた。

そう、4人いたんだ。なので僕は逃げることにしたんだよー。

とりあえず、部屋から離れることにした。

とりあえず、砦内を散策することになった。なっただって、受身形だ。まあ、その通りなただけ。

戦争中なので、空気がピリピリする。痛いよー。

「あ、クオンくん」

「おお、少年か。起きたみたいで、なによりだ」

フランさんとクラムさんだ。

表情は笑っているが、こっちは全然笑えない。怒っている。

二人が、確実に、怒っている。

「し、心中お察しします」

いや、これこそ禁句なんじゃないか？

「……ただ、一言言えるのは」

「?????」

フランさんが、口惜しそうに言います。

「
彼女は、いつつも笑ってた。その事実だけが、残ってる」

そう、か……。そういえば、そうだったな。笑ってたよな。

「彼女は、殺されたことに意見も異論も批判も文句も付けられないだろう、だから、これは私自身の私怨の報復だよ。自己満足なんだ」

僕は黙っている。クラムさんも黙っている。フランさんは、黙することなく黙った。

「少年、人を殺すのは、辛かったか？」

唐突にクラムさんが僕に語りかける。

「……はい」

僕がこの手で、人間を斬り裂いたわけではないけど、僕の能力によつて死んだ。いや、殺した。とても気持ち悪くて、吐き気がこみ上げて、罪悪感がいっぱい、口から何かが出てきそうで、辛かった。

「少年、自分を責めるなよ。ただ、相手だけ責めてりゃそれでいい。現実なんかほっぽり出して、空想の中に逃げ込んだっていいんだ。少年、辛かったら、逃げだしていいんだぜ？」

「ああ、それを悪いことだなんて誰も言えないさ」

「……僕は、逃げることはありません。諦めるだけですよ」

「……そうか。それが、少年の、覚悟か。初めは、何とも情けなさそうな少年かと思ったら、存外、出来る男じゃないか」

はっはっは、と快活に笑う。クラウドさんのように。どこにでも

いる、誰かのように。」

「次の戦いにも出るのか？」

「です」

即答出来た自分にびっくりした。

「はは。まあ、お互い死なないように、頑張ろうぜ少年」

「今逝ったら、クラウドに合わせる顔がないしね」

僕はもともとから死んでるようなもんだけど。今から、生き始めても、遅くはないだろうか？ いろんな繋がりを断ってきた僕だけど、今から人と繋がりを持つてもいいんだだろうか？

「じゃ、私たちは準備があるんでね。じゃ、また」

「はい、また」

去っていく二人の背中が、やけに大きく、やけに広く、やけに眩しく見えた。

「ふう。なんか、色々と計算外ですねえ」

「そうなのか？ワシには、お主が焦っているようには見えんのだが？」

「ふふ。まあ、いいでしょう。『アダム』と『イヴ』は、まだ、
“たくさん”いますからね」

「……まあ、今回に至っては、やり過ぎではなかったかもしれんな」

「です」

部屋に戻ると、まだ寝てやがった。
さすがに、カチンとくる。

「起きろー。起きろー。……めんど」

二回起こしただけでも、大した進化だと褒めてもらいたいよ。とりあえずだ。とりあえず、僕も不貞寝をしよう。

起こしても、布団を剥いでも、ダメならば、一緒に寝よう、ホトトギス。

久遠、心の俳句。なんてね。

とりあえず、そこらへんの布団を強引にはぎとってそこら辺に寝転ぶ。

「もっかい考えよ。自分が何でこの世界に連れてこられたのか……」

何度も言うが、僕自体に特殊技能が備わっているわけではない……はず。こけたら普通にすりむいて、治るまで数日間かかるし、人を殺すことに吐き気を催すことだってある。

そんなもやしの僕をこの世界に連れてきてどうしようと言っただけ？　なんか、あっち側の神様は大昔から決めてたとか何とか。

いい迷惑だコンチクショウ。死ぬ、神様死ぬ。

このクソみたいな能力、人殺すのには十分役立つけど、神様殺すには僕自身の性能が低過ぎてあんまり意味がない。

ああ、考えてたら僕って欠点ばっか。

次にすることは諦めること。諦めた後は自墮落に。

だるつとぬるぬる、地べたを這いつくばって命乞い。

大した信念も持たなくせに、誰かの邪魔ばかりをして。

拳句の果てには、世界でただ一人、世界を悪魔に売り渡してでも守りたいと思う少女を、僕のミスで危険に巻き込んでる。

どうしようもないクズだな。僕って奴は。

いつそ死んでみようかとも思うけど、怖くて怖くて自殺とかできない。自殺とかできる人、勇氣あると思う。

「……って、逸れてる逸れてる」

何で神様（笑）に選ばれたのかっていうことを考えていたはずなのに。本当、僕ってネガティブ。

鬱だ、泣こう。

ああ、めんどくさくなってきた。

とりあえず、よくある神様の気まぐれとかいう奴じゃないのかな？ うん、絶対そうだ。なのでこのことについては終了。

次は貧乳のありがたみについて考えてみよう。

貧乳はいいよね。未来に希望が持てる。

ダメだ。アホか僕は。

だったら巨乳についても。

ダメだ。アホか僕は。

目の前のことについて考えてみよう。例えば戦争。

この世界で当たり前のように転がっている、暴力のぶつかり合い。理不尽が理不尽でゲシュタルト崩壊している。

もちろん、僕の世界にも戦争はあった。

先生とか周りの大人たちが、世界には戦争で苦しんでいる人たちもいます、と言われたが、それがどうした程度の感想しか浮かばなかった。

所詮は他人事だ。別に綺麗事が嫌いなわけじゃないけど、上っ面ばかり装ってる湖面のしたが汚いヘドロのようなのは、反吐が出た。

知らないと言ったら知らないし、辛いと思ったら辛いという。

この考えについてとやかく言われるつもりもないし、別に貫くつもりもない。何かを言われれば簡単に曲げちゃうような人間だよ。

そもそも、人間の命の重さってのはそこまで大事なものののかと

も思う。重さ的にはそこらへんの微塵個と大差ないと思うんだけど。人間なんて屑だゴミだ塵だ。と言ってしまえば終わりだけど、そこまで自虐思考があるわけでもないので割愛だ。

「ようするに戦争ってのは、戦う争いつてことですねはい」

「またもや面倒くさくなってしまった。不覚。」

「相変わらずなんだね？ 久遠くんは。変わらず変わったよ」

「……千里さん、趣味悪いですよ」

「ミーは、そんな思考をしている方が趣味悪いと思うけどな」

気がつけば、ソファに寝転んでいた僕の脚の方に、千里さんが腰かけていた。

この前の戦いで思ったんだ。この人の二つ名は、ザ・かませ犬。

「ん〜？ 何を考えているのかな？ 久遠くん」

「あえて言いましょう。何も考えていないと」

もしくはキス魔。

「ああ。そんなにちゅーしたかったの？ じゃあしてあげてもいいよ？」

「遠慮しておきますよ」

「久遠くんのファーストキスは、どこかの誰かさんに奪われてい

るみたいだから、せめて愛のあるセカンドキスをしたかったんだけどなー」

急に。吐き気がこみ上げる。

いつそのことぶちまけてしまいたい。吐きそうやばいでる死ぬ怖い気持ち悪い。

思い出すな思い出すな思い出すな。

味を、光景を、声を、顔を、全部忘れてしまえ。

いつそのこと誰か僕の脳みそを吹き飛ばしてくれないだろうか？

こないらないことしか覚えられないダメな脳みそは一度吹き飛ばないと治らないような気がする。

「……っっていうより、何で知ってるんですか？」

「記憶、覗けるの知ってるでしょ？」

「ああ、愚問でしたね」

ゆるするに、あの時のことを知っているのは、“アレ”と僕と霧？さん、そして千里さんの四人と言うわけだ。今は一人いないけど。

ああ、そういえば“アレ”もこっちに来ているんだったな。影薄過ぎるだろう。

「秘密ですよ千里さん。言ったら怒りますから」

「あら。久遠くんが怒っているところを見られる大チャンス？

これはぜひ言い触らすべきかな？」

「……好きにしてください」

「ああ〜ん。怒らないでよ久遠くん。冗談だつて。それにミィは言おうと思えばいつでも言えたんだから。信頼と実績の10年間を、信じてよ、ね？」

そうか。もう、10年ほどにもなるのか。

そう思えば、結構口の堅い人かもしれないな、千里さん。

「あれ？ だったら、“アレ”のこと、追ったりしました？」

「うん、一度だけ。それからめつきりね」

どうしてかと聞くのは酷というものだろう。

あんな存在、二度と関わりたくない。そう思うのが普通だ。

待てよ？ だとしたら、千里さんは“アレ”の実物も見たことがあると言つことに。

「……………それも、秘密よね？ 久遠くん」

「……………お願いしときますよ」

これも、10年間黙つていてくれたんだ。それでも10年間変わらずに接してくれたんだ。

これで彼女を疑うなんてこと、出来るはずがない。まさに信頼と実績の10年間だ。

この思考を千里さんは読んだのか、少しだけ微笑んでどこかへと瞬間移動してしまった。

若干、僕の頬が熱い。気がする。

まあ、いいか。

寝よう。

久遠は、今おびただしいほどの隊列の中の一つにいる。ここは戦場、いつ死んでもおかしくない。

しかし、彼は自らで望んでここにいる。

彼が望んだのだ。どんな理由を並べても、彼をここから退かせる理由にはならないだろう。

「諸君」

陣列の前方からよく聞きなれた声が聞こえた。久遠たちにとっては命の恩人。フランである。

「諸君。ついにこのときが来た。といっても、大した実感もわからない。なんせ、いきなり最終決戦へと放り込まれたようなものだからな」

それは久遠が戦場をひっかきまわし、このステージを創りだしたことを言っているのだろう。それを聞いて少しだけ俯く久遠。

「しかし、だ。一人の少年が、命を懸けて戦った。その事実を揺るがない」

久遠は、その言葉を聞いて否定した。

「（命なんて懸けていない。そんな大それた信念なんて持っていない）」

「ここで言おう。もし、彼がどこにでもいる普通の少年だったら？ この戦場へと放り込まれただけの少年だとしたら？ 何の信念も持たない平々凡々の少年だとしたら？」

その通りだ、と頷く久遠。

「諸君。このトワイライトに住む諸君に告ぐ。どうか、死なないで欲しい。少年は、自分の周りの人間が傷つくことを恐れた。だから戦ったのだ。この国が、この国に住む人々が、泥に塗れ地を這いつくばる姿を見たくないために、戦ったのだ」

正確に言えば、宿屋のおやっさんその他諸々なのだが、それは言わないほうがいいだろうと思う久遠。

「ならば、少年に、自分の心に誓え！ 決して 死ぬなッ！！」

無理だ、とも思う。

実際問題、どんなに圧勝の戦争でも戦死者0なんてことはほぼあり得ない。

しかし、彼らは誓うのだ。この、祖国に、自分たちの血液は一滴たりともこぼさないと。不可能だと思っても、無理だと分かっている、彼らは誓う。

生き残ると。

死に物狂いで生き残るのだ。

彼らの前方には、圧倒的兵数。技術のレベルの違う兵器の数々。

見たことのない生物。それらが、今にも彼らを殺さんとしている。

『久遠様。自分、精一杯頑張るっすから』

久遠の後ろにはシキが控えていた。圧倒的に男性率の高い戦場において、シキの存在は圧倒的に浮いていた。

「戦場で頑張らないに越したことはないと思うけどな。とりあえず、誰も戦わないっていうのがベストなんだと思う」

『久遠様。これは戦いじゃないっす。戦争っす。殺し合いっすよ』

「……………」

彼に言うことは残されていなかった。

シキを見てみると、あの白髪紅眼の男女を思い出す。
無機質な人間。

「……………それでも、戦わないっていうのが、ベストなんだと思う」

人間が特別だと思っわけではない。実際、赤の他人が死ぬより飼
い犬が死んだ方が悲しいものだ。

無機質だろうと何だろうと、死ぬと言っつのはなんだか悲しい気がする。

「それでも……………なんだよな」

眼に映るのは、やはり自分を殺そうとしている敵兵の波。やらなければやられるとはよく言っつたものだ。まさに、その状況だ。

「それでは諸君……行くぞ」

そうして、統括隊長であるフランの号令により、空しさだけが残る戦争が始まった。

いつせいに駆けだす歩兵部隊。久遠もその波に流されるような形で駆けだす。

その時、瞳に驚くべきものが飛び込んできた。

白髪紅眼。会った瞬間に殺されかけた。そのせいで忘れようにも忘れきれない姿が、おこには無数にあった。

「エテンプロジェクト【楽園計画】」。再び人が楽園に暮らせるようにと、神の体をその身に埋め込ませた者達。それを総称して『アダム』と『イヴ』というんですよ」

ライブド側では、軍師の場所に黒髪長髪の男性が座っていた。不遜に不遜に。ただ自分が行うのは凶行だけだと言わんばかりに。

戦場を眺めるその瞳には絶対的な自信が映っていた。この戦力であれば、アルカディアでさえも攻め落とせると。自分の知略を以てすれば楽勝だと。あのフラン・エグゾディアでさえも下せると。

戦場が、割れた。それに伴い宙を舞う『アダム』と『イヴ』たち。個体名称はない。

「ッ!?!」

凶行策の眼に、焦りが映る。その焦りをかき消すように、『アダム』と『イヴ』たちは詠唱を開始する。一発一発が、大魔術にも匹敵するほどの威力。久遠を撃ち伏せた【失楽園】である。

それが束となり、戦場を割った人物へと注がれる。その数は、久

遠に放たれたものとは比べ物にならないほどの物量。

しかしそれは、軽くねじ伏せられる。戦場を割った者の剣の一振り、跡形もなく吹き飛ばす。

戦場右翼では、一般兵に混ぜて、リザードマンや獣人など、人間の戦闘力よりも高いものを数多く配置している。こちらは安心かと思いい眼を向けるが、兵士たちは何か見えないもので輪切りにされていった。

そこでも一人の存在が暴れているだけである。もちろん右翼にも『アダム』と『イヴ』は配置してある。そもそもその一組がいれば、下手な一個大隊よりも数段戦力は上なのだ。

しかし、その存在はそれごと戦場を薙ぎ倒している。

中央は？　と思いきちらにも目を向けてみる。『アダム』と『イヴ』こそあまり配置していないが、一般兵の数は両翼よりも圧倒的に多い。

今度は、戦場を一条の光が奔った。それは前線まで到達すると無数に分裂して兵士たちを薙ぎ倒していった。その光が奔った先を見ていると、一人の少年が巨大な弓を構えていた。

「（おかしい。おかしい！　『アダム』と『イヴ』はまさに生物としての限界だ。超えられるはずがない。魔術師としての力だって大魔道クラス。やられるはずがない！！）」

凶行策は、ただの強硬策へと成り下がりがつつあった。

「やられるはずが、ないのですッ！！！！！！　生物としての限界を迎えている『アダム』と『イヴ』が、そのように容易く……」

戦場に響く憐れな叫び声。

「限界なら……」

「………とうの昔に」

「………超えているッ!!」

前線が文字通り爆発した。前線はこれで崩れ去ったとみていいだろう。

しかし、凶行策。ただのごり押しなだけのはずがない。

「………第一次特攻部隊、逝きなさい」

文字通り特攻を目的とした部隊。凶行策は冷静に戦況を立て直そうともくろんだ。普通なら、自慢の戦力が削られたとあったならばもう居ても立つても居られないだろう。

ライドドという特攻部隊とは、爆弾持って突撃、というものではない。

「【全てを覆い尽くす闇夜。恐怖を覚えよ。喰らい尽くせ。我の命を以て、その姿を現わせ】」

黒魔術師団による、自らの命を犠牲にして一万の命を奪うと言われる禁忌魔法。

術者の周りに、蠢く闇が現れる。

「【死神ザ・デスの権化】」

大地が、草木が、空が、人が、死んでいく。詠唱完了した瞬間、蠢いていた闇が四方八方へと飛び散った。

ある闇は鎌の形となり、ある闇は気体状になり、ある闇は液体に

なり、ある闇は人型となり、周囲全ての存在に死を与えようと飛び散った。それと同時に、術者が干からびるように体の生気を全て奪われ絶命した。

前線が崩れかける。それと同時に遠距離魔法部隊が牽制を駆けながら後退していく。その間でさえ、闇は命を奪い続ける。

「【^{イージス}絶護たる悠久の英盾】」

神の武器を持った時点で自分は最強ともいえる防御力を誇るようになるのに、なんで自分はこの防御を主に手段とする神器を創造したのだろう。

それは、やはり、護りたかったのだろうか？

前線から流れ込んできていた闇を、巨大な盾のようなもので全て防いだ。

そしてこれから、トワイライト側が最後の押し込みにかかるとう、まさにその時であった。

「人の子とは、まっこと、愚かよう？」

「全ての罪は我が下す。愚かさも、罪なり」

「こ、こまったときの、ドラえも……じゃなくてえっと。たしか、呪文は、呪文は呪文は……」

そこで焦ることなくいつも通りのテンションで慌てだす久遠。

「……………あるえ？ 呪文って、なんだ？ いや、ソロモン呼びだす方法とかバルさんから聞いてないし！！」

「ん、少年。別にカツコイイ呪文とか唱えなくてもいいぞ。オレ達は、この大地の下で、世界を見ている」

「お、おお！」

バルさん、なんかかつこいいこと言ってるような気がする！と場違いなことを言う久遠。

地面から浮かんでくるように、黒の闇が。まさに真正の闇が、浮かび上がって行く。

戦場の各所に、72柱の悪魔が、久遠の存在によって降臨した。悪魔が単体で、この現世に降り立つことはほぼない。するのは超上位、ルシファーやサタンと言った悪魔の中の悪魔である。

通路が、その先にある扉が必要だった。バルも、この現世に来る時、その力はいつもの数分の一に減らしながら、無理矢理来ていたのだ。

「今ここに、全面戦争が繰り広げられようとしているのです！なんちって」

誰かがそんなことを言った気がした。

誰かは知らないが、その予想は合っていたようだった。

全面戦争が、開始された。

神と神と敵対する者の戦い。

それに久遠も参加している。大地が、空が、全てが破壊されていく。力無き人間はその場に存在することすら許されず、例外なく吹き飛ばされていく。

響くのは怒号と、悲鳴と、剣撃と、爆音。

既に最初の戦争など、戦争など、戦争など。ガキの喧嘩に見えてくるほどの。大戦争。

右にいる者が敵なのかどうかさえ、今戦っている奴が味方なのかどうかさえ、今戦っている現状が正しいのかどうかさえ、霧中で夢中で分からない。

「（ああ、めんど）」

何でこんなこと。何でこんなことになっているのだろう？

久遠は投げやりになってきていた。イージスは展開し続けている。しかし、今まで長時間神器を出し続けていたことがなかったため分からなかったが、これはかなり疲れる。

まるでバケツ持って廊下立っているぐらい疲れる。

しかし、これをやめればたちまちトワイライト軍が崩壊するのが目に見えている。そうすればデイブレイクにいる忍廻達はたちまち死んでしまうだろう。

いや、待てよ。死んだ方が、楽なんじゃないだろうか？

久遠の頭を危ない考えがよぎる。アヌビスが一体、久遠の方に向

かかってきたがイージスの効果によって弾き飛ばされてどこかに飛んで行ってしまおう。

「何を僕は、生に必死にしがみついていたんだろうか？ 死んだ方が楽かもしれないじゃないか。そりゃまあ死ぬのは怖いけどさ、現状めっちゃ辛いし。とにかく、楽になりたいよな。自殺じゃないし結構怖くないかもしれない。忍耐だつてこの現状が辛くて怖くて仕方がないはずだ。だったら死んで、その後にかけてみるのも手じゃないだろうか？ 未知なる恐怖に身を任せるなら、辛いと分かっている未知よりも、未知だと言ふことしか分かっていない未知に身を任せた方が楽なんじゃないか？ だいたいだ、最初に戻るけど、何で僕は生にしがみついていたんだ？」

イージスを展開させたまま、ぼーっと考えてみる。

「……なあんだ、簡単じゃあないか」

答えはすぐに見つかった。

「死にたくないから！ 以上だ！！」

最弱である彼は、いつも諦め続けてきた彼は、いつも通り、死ぬと言ふことを諦めている。彼は、一度諦めたことだけは、絶対に曲げない。一切手を出さない。

最弱は最低の諦観プライドを持っている。

「しかし、そんな誇りは、こんな私によって折られるのでしたとき。めでたしめでたし」

可愛らしい声が、似つかわしくない声が、しかしそれでいておぞましい声が、戦場、いや彼の耳元でささやかれた。

慌てて振り返る。しかし、そこには桃のような匂いしか残っていない。

「どこ見てるの？ 前だよ前。がら空きの喉突き刺しちゃうぞ？」

前を見る。恐る恐る、それでいて出来るだけ早く。指先がしびれる。息ができない。

吸え、吐け。落ちつけ落ちつけ落ちつけ。

それでも、指先は痺れ、息ができない。

「あはっ！ 苦しそうな久遠くん。どうしちゃった？ コーフィンしちゃってるの？ 変態だね久遠くんは。あれだけ汚い言葉を並べたのだから、そう言うプレイを望んで立って言うことでもいいのかな？」

心臓が止まってしまえばいいと思う。

今だけなら、今さっき死にたくないと言ったのを取り消してもいいと思う。

こんなおぞましい奴のそばにいるぐらいなら、いつそのこと殺してくれればいいと思う。殺して掃除道具入れにでも突っ込んでくれていればいいと思う。

思う思う思う。

思っているのに！

「こんにちは、久遠くん。お久しぶり、久遠くん。奇遇だね、久

遠くん
「

「あ、う……あ……」

僕は正面をとらえる。

黒の、艶のある、それでいて寝癖のようなものがある、肩ぐらいまでの髪の毛。髑髏の髪飾り。

眼は死んでいる。死んでいるのに、生き生きとした目で、死体を見るような眼で僕を、眺めている。

動きにくそうな、花柄の着流しの着物。

「あはっ」

僕と“アレ”。

二つを並べてみれば、誰もがこういうだろう。

表裏一体。

「お姉ちゃんが、迎えに来てあげたよ。久遠くん」

「妹だろぅがくっそ野郎ッ!!」

二人は、水面に映ったように、歪んだ相似関係。

「……………永遠^{とわ}」

頭の中の映像が、再生準備に入った。
霧？さん。霧？さん。霧？さん。霧？さん。霧？さん。
永遠にも、一瞬のように。
永遠にも、刹那のように。

よつするに

双子、一卵性双生児。

そう思った瞬間、僕の体は弾丸のように奴に向かって行った。

「はっやーい」

そう言いながら、奴は僕の腹を思いっきり蹴り上げて、浮かび上がったところを、蹴り飛ばされた。

地面を二転三転して、ぴたりと止まる体。

神様つてのは、いつも残酷らしい。

奴も、僕だとみなしている。

僕も、奴だとみなしている。

だから、神器の効果はない。

「あはは。弱い弱い。いつも通りだね久遠くん」

恐怖が、こみ上げる。

しかし、この現状。これぐらいの戦闘行為で周りの誰かが気付いてくれるはずもなく、叫んだとしても誰が駆けつけてくれるというわけでもなく。

シキは、歳殺が来て僕がそれらをガードするときにはぐれてしまっている。それでも、叫んだら来てくれるだろう。

だけど、いやだ。

こいつと一緒にいるところを、誰かに気にしてほしくない。

なので、いやだ。

こいつと一緒に見られたくないんだ。

「ほら！ ほら！ ほら！ ほら！ ほらほらほらほらほらほら！
さっさと寝ちやえよ！！ いつもみたいに諦めちやえって！ 寝ちやえ寝ちやえ！」

そういいながら、僕の腹を蹴り続ける。天の羽衣なんて何の役にも立っていないみたいだ。

それはそつだ。自分で自分の体に触れないなんてありえない。

それでも、二度とこいつの前から逃げ出したくなかった。

あの時みたいに、殺される霧？さんを前に、何も出来ずに見ていたときみたいに、ガキじゃない。

停滞していたって、僕はその場で成長している。

だけど、そんな僕の決意だって、何の意味もないように、奴は僕の腹を蹴り続ける。

薄れていく意識の中、最後に思い出されるのは、やっぱりいつも通り忍迺だった。

二十九話：零だから……

チチチチ、と爽やかな鳥のさえずりが聞こえる。これがベッドの上だったなら、とてもとても爽やかな朝だっただろう。

まあ、朝起きたら、異世界に飛ばされていた馬鹿がここにいるけど。

なんか背中が痛い。硬い床の上で長時間横たわっていた時みたいに。ついでに腹、いや、こっちの方がかなり痛い。何でこんなに痛いんだ？

ああ、前に不良に蹴られまくったからかな？ 今になってこんなに痛みだすとかどんな蹴りだよ。

けど、なんで後頭部はこんなに柔らかくて暖かくて気持ちいいんだろう？ 美少女が膝枕とかだったらとてもうれしい気がする。

ちなみにまだ眼は開けていない。なんだか妄想が壊されそうな気がするから。

忍迺だと、こんなに肉は付いていないだろう。いや、いい意味で仄己さんだと、っていうかしてくれない。

千里さんだと、僕の貞操は失われている。

……………シキかな？

うん、きつとシキだよ。なんか膝枕してくれている前提で悪いけれども、その、えっと、胸に抱きしめられている可能性も無きにも非ず！

……………あれ？ 僕ってどうして気絶してたんだっけ？ あの不良の蹴りの所為だったりするのかな？ だからどんな蹴りだよ。

いや待ておかしい。それならば、ふかふかのベッドの上で寝ているはずだし、膝枕（確定）をする必要さえない。

布団になら潜り込んでくるかもしれないけど。

オモイダセナイ。クオンハキオクソウシツナヨウダ。

勇気を出して眼を開けよう。そうすればきっとユートピアが君を待っている。

勇気を出して眼を開けた。そうすれば、そうすると、そうなら、
“アレ”の寝顔が眼に飛び込んだ。

スヤスヤと、何もかも、僕を許し切っているような表情で、“アレ”は僕の目の前で眠っている。

正直、キレイだなと思ってしまった。悔しい。ほとんど同じ顔なの。

………待て？　なんで僕は、ここにいる？　というよりここはどこ？

周りを見ると、ボクが最初に来た森に似ている。戦争はライブドとの国境付近だったから、距離で言うとそんなに遠くないはず。

いや、ぎゃくにかんがえずに、こいつを襤褸衣のようにメチャクチャにしてやれば、整理がつくかもしれない。

よし、ひとまず腹だな。報復を兼ねて、二度と人に見せることができないようにしてやるから覚悟しろくそボケ。

起き上がるうとしたら、眼が開いた。

眼が合う。気が合う。いや、合わせない。

「にゅ？　………おはよう久遠くん。とつてもいい朝だね？」

朝ご飯は昨日のうちに取っておいたから

「ッ！？」

まるで私は気にしていませんよと言わんばかりに、今まで17年間毎日続けてきたと言わんばかりに、優しく微笑みかけてきやがっ

気づいたら、マウントポジションを取って殴っていた。
それでも、奴は笑っている。

押す手に、退く体。

奴は、近くにあった水がこんこんと湧き出ている場所に近づいていくと、しゃがみこんで顔を洗った。

「あーあ。腫れちゃった。けど、ちょっと気持ちよかったな。あはっ」

奴はそう言うと、着物の中に手を突っ込んで大きな絆創膏を取り出し、頬に張り付けた。

「……………なあ？ 戦争は？」

もう、コイツに対する憎しみなんて、とうの昔に枯れ果てていた。なのにコイツは、それが分かっているながら、また、僕の憎しみを喜んで買って行く。

「ん？ ああ。ライブド軍壊滅。トワイライト王国崩壊って形だよね」

……………忍廻は？ シキは？ 千里さんは？ 仄己さんは？ フランさんは？ クラムさんは？ 宿屋のおやっさんは？ あの、走り回ってた子供達は？

全部、終わった。

多分、僕の物語はここで終わった。

あとは精々頑張れ。

あとは任せた。どこかの主人公。

あとは、流れる。

なるようにしかねないのなら、なるようになるまま、流され続けろ。

僕は、寝るとしよう。

死ぬのにはもう、遅すぎた。

あまりにも多くのものを巻き込んでしまった。

あまりにも多くのものを殺してしまった。

僕は、寝るとしよう。

生きること、死ぬこともできないのなら、

死ぬように、寝続けるさ。

「けど、久遠くん」

「うっさい黙れ喋るな何だか眠い喋るのも聞くのもめんどい」

「私的な意見だと、死んでないと思うけど」

「喋るなって言ってるんだろうが。何でいつも喋るんだくそ女。

いつも嘘を本当に話しやがっ……………、死んでない？」

なるほど。久遠くんの本釣りでしたか。餌は見え見えのウソ臭い希望って奴ですか。

「王国崩壊したからって、人が全員死ぬとは限らないじゃん」

「……………根拠、ないな」

やっぱり、虚構の事実とやらだった。

「まあ、信じないなら、別にいいんだけど」

信じてもらえなかったのが癪に障ったのか、少し不機嫌そうな声色になるけど、それでも笑っているような気がする。背を向けて寝転んでるから分かんないけど。

「……………で？ 僕は寝るけど、お前はどつするんだよ」

「いや、寝させないし。私と一緒に行動を共にしてもらおうし」

……………は？

「とりあえずくたばれクソビッチ」

「ビッチじゃないもん！ 清純派だもん！」

「人肉食って『私の好物決定』とかいってる奴が清純だったとは、世も末だな。くわばらくわばら」

「ビッチじゃないもん！ それに、ロリコンには言われたくないかも！」

「ロリコンじゃねえし。知ったかお疲れ様。ビッチはビッチらしくそこらへんのモンスターにでも犯されてるクソビッチ」

「ビッチじゃないもん！ っていつか、その発想が出てくる時点で久遠くんは変態さんだあ」

「変態なのは自覚してるから大丈夫。要らぬ心配お疲れ様。御苦労下がつてよいぞよ。っていつか、自覚してないお前よりはままだと自負している」

「じゃあ姉弟あにいもうとである私の体にも欲情す」

「吐き気を催すようなことを言うなクソビッチ。そんなに欲しいなら屈強な騎士さん達の中に裸で特攻しなさい。きつとどんな要求にもこたえてくださるから」

「ビッチじゃない、もん！」

「もん！ って……………時代を感じるな」

「ビッチじゃないんだによ」

「死ぬ。」

……………よし。話は忘れた。寝よう。

「でさー、私、自立営業してたお店で初めて貰った依頼の途中で、この世界に“誰か”の所為でこっちに来ちゃったわけー、分かる？分かるよねー？ 私はスゴクスゴクワクドキドキウツホウツホマジピンチなわけなのだよ。だからさ、私と行動をともしして、さっさとその神様とやらをぶっ殺してほしいわけだよ。殺戮。分かる？ キリングキリング！ ブツツリザクザク、色気めいた殺しながらいいから、雑でいいから早く君の物語を終わらせてほしいわけなのだよ。じゃないと、私の今後の信用にかかわっちゃうんだよ？ お父さんとかから絶縁されたら私マジ泣きだよ？ お母さんとか怖いんだから。包丁持って襲ってくるんだよ？」

「死ぬ。」

「分かった分かったよ分かりました。なんて言えばいいんですか？ 望むならこの体をめちゃくちやにしてもらっちゃっても結構なんで、お願い聞いてほしいよ？」

「ほら。【運命^{コト}を別つ短剣】をあげるから、神様でも何でも殺してきなさい。お兄さんは忙しいのですよ」

おもに暇なことが忙しいんです。なので邪魔しないで。

「ムムう！ 強くなりたとは思わないの？ 一緒に来てくれるのなら、色々殺人技能教えてあげるよ？ 門外不出の、知ってるだけで命を狙われるような必殺」

「それは、とつてもそえられる提案だね。けど、僕は零でいいんだよ。そうすることで、僕を踏みつけることで、どんな小さな可能性の人間でも、無限になれる」

1/0。零分の一。

僕は、弱くありたかった。僕が弱くあれば、僕を踏みつけることによって、その人の可能性は無限になるから。

僕が強くなることで、他の人が弱くなるなんて、見たくなかったから。

だから、諦めた。

けど、その諦めた理由に他人を使うつもりはない。僕が諦めたのは、僕に他人を踏みつけるだけの勇気がなかったからだ。

実際、今までは、上手く行っていた。今までは。

「けど、君が強くなかったから、誰も守れなかったんじゃないか

な？」

そう。ようするに、僕は踏みつけさせて、可能性を大きくして、その可能性にすがっていただけだった。

目の前の事実は全部その人に押し付けて、僕は実際のところ、何もやっちゃあいなかった。

けど、

「もう、守るものなんて、なにも、残ってやいないじゃないか。そんな僕が、どうして強くならなきゃならないんだよ」

全部なくなっただ。穴の空いた0じゃあ、何も無い零じゃあ、なにも受け止めきれなかったんだ。

「私を守ってよ　なんてことは言わないよ。何で守るために強くならなくちゃなんないのさ？」

そんなことを言うコイツ。不肖ながら僕の妹、のはず。そんなことを言っつて、また僕を、

「守るのには遅すぎたのなら　奪り還すために、強くなればいいんだよ」

また、僕を……。

また、僕に……。

何かを、頑張らせるつもりか。

そんな折、何かを切り裂くような音がする。ギョゴォ！ という風切り音が耳障りで鬱陶しい。

擬音ばかりですまないけど、今度はズドン！ と言う音とともに地面に木々を薙ぎ倒して現れた例のアイツ。

「がっはっは！ 見つけたぞ神殺しい！」

「……歳殺？」

あれ？ てつきりクラムさんにバラバラ解体殺神事件にでもなっているのかと思ったけど？

「何か用か？」

「分かるだろう。貴様を殺しに来たんだよ」

「わかんない」

思わず歳殺のでかい声に耳を塞ぐ。五月蠅いんだよコンチクショウ。

「なら、分からぬまま終わるといい。あの国のようにな」

あの国とは、トワイライトのことだろうか？ それともライブドの方なのだろうか？

どちらだったとしても、別にいいんだけど。

改めて歳殺を見る。全長2m強の巨体、しかし細いという印象は

どこにもなくがしやがしやの兜や鎧、所謂武者鎧に身を固めていて、恐怖し渴き上がって来ない。背にはあの触れたものを全て、たしか万物を滅ぼすとされる歳殺の能力が詰まっているであろう矛が。

片や、こちらは迷える子羊が二名。この、なんだ？ 僕のカワイクテプリティーデキキュートデニクタラシイあんちきしょうは、人を殺せるからと言って、いくら人を殺すのがうまいと言っても、神を殺すのがうまいというわけではないだろう。

したがって、戦力にはならない。除外する。いらなからどっかいけ。

それで、僕の方と言うと、天の羽衣がなかったらほんと、人間に蹴られるだけで意識が飛ぶほど貧弱なですたい。

したがって、戦力にはならない。除外する。いらなから隅っこにいけ。

で、あまつた戦力はと言うと、大気中に漂う酸素君が僕の代わりに戦ってくれるかくれないかで交渉中。

「(いけるか?)」

「(む、無理です)」

妄想お疲れ様。

「人の子とは、まっこと愚かだ。目先の利益しか見えておらん。そんなに神々にこの世界を支配されるのが嫌と申すのなら、さっさと同盟でも組めばよいものを」

「それができないから、人なんだろう。そして、それを導くためのお前らだろうが」

「がっはっは。分かっておらぬなあ。なにも」

「だから、わからなーいってさっき言ったばかりじゃねえかクソマミレ」

「がっはっは。よく吠える吠える。今さっきは殺すと言ったが、唯一神に『連れて来なさい』と言われていたのを思い出したぞ。なので、手足の一本でも吹き飛ばして連れていくとしよう」

あー、逆上。よく僕がするあれだな。自分がされるとこも理不尽なのか。これはどMじゃないと耐えられないな。

そんなことを考えていると、歳殺が背にかけてある矛に手をかけた。

あれ？ 今思ったらおかしい。なんであれに触った自分は消えないんだ？

………考える。最強の矛には矛盾がある。万物を消すと言うその言葉の中に、多分、僕の数少ない勝利を飾り立てることができる何かがある。

万物を、消す………なるほど。なあ〜んだ、簡単じゃあないか。

「吹き飛ばえいッー!!」

そう叫ぶと巨大な矛を振り回しながらこちらに突貫してくる。矛

に当たった万物は全て消滅していく。
そのままのスピードで僕と激突しようとしているみたいだった。

「永遠ッ！！」

不肖ながら我が妹。そいつとアイコンタクトを取る。時間は一瞬。

「貸し！、だからね」

そういうと木々の間を縫うように、木々のしなりを生かしながら加速していく。

僕も突貫してくる歳殺に対して左方向に走り出す。挟み撃ちをしようと言うわけだ。しかし、あっちの攻撃力はこの歳殺に対しては零とみていいだろう。

力がないなら、武器で補え。知恵がないなら、力で補え。武器がないなら、力と知恵を振り絞れ。

「がっはっはっはっは！！ あくまでも反抗するか神殺しよ！」

そういうとアイツを警戒するに値しないと思ったのか僕の方に向けて方向転換。

万物を滅するとされる矛で、僕の右腕を狙ってきた。

僕はそれを、受け止める。

「……………簡単なことだ。万物を滅すると言うのなら、万物以外は滅することができない。ようするに万物ではない神々おまえらは滅することはできないし、この【絶対不敗クラウ・ソックスの炎光】を滅することはできない」

僕の手には個人的には最強の神器であると思っているものの一振

りを選択。見た目を創造する暇がなかったので刀身から柄まで、全部真っ黒。

「それがどうした？ 滅することができないなら、技能で補うのみよオオツ！」

そう。このままこの剣で打ち合ったところで僕の勝ち目は薄い。体格差と経験差で僕自身の能力が上がってもジリ貧で負けてしまう。技能がなければ、才能で補え。

「ザックリバラン」

不意に歳殺の後ろからアイツの声。それに微妙に反応し組み合ったままそちらへ顔を向ける。しかし、あつちに攻撃力はない。完全なる罠。

攻撃力が現状であるのはクラウ・ソラスのみ。僕は神威によってあがった力任せに歳殺の重圧を押し返す。

「ぬおツ！？」

重心を崩した。そのことでわずかな隙が生まれる。その重心を崩したその足に、アイツが蹴りをいれ宙に浮かせる。いくら巨体で力があるうが、重心が崩れていればほんの少しの力で転ばせることができる。

不意に、歳殺と眼が合う。

「き、貴様らあッ！」

僕は剣を振り上げる。今の戦闘の中で、あくまでも攻撃力があるのはこの一振りのみ。

ならば、無い力で、力を生み出すしかない。
絶対的な大チャンス。
僕は剣を、振り下ろした。

しかし、神の肉を切り裂き燃やし尽くすはずだったその炎光は、
ガイッ！ という音によって阻まれてしまう。

それでも歳殺は高速で木々の向こうへとぶっ飛んでいく。

やってしまった。今の一撃で決めなければ幸薄だって言うのに、
矛によって阻まれてしまった。

「あーら。久遠くんのヘタクソ。態々振り上げなくても、そのまま振り上げるなり突くなりしたら決まってるのに」

「こっちはズブのど素人だぞ馬鹿。衝動的に振り上げたくなるんだよ」

「そう？ 私は生まれたときからこんなだけど」

……まだ見ぬ父上母上。お疲れ様です。

爆音。歳殺がぶっ飛んで行った木々の向こうから、爆音が轟いてくる。それと同時に森の一部が爆発。多くの木々が上空へと舞い上がる。

「……………面白い、このような戦闘を、あの人の子以外とできる
とは、夢にも思わなかったぞ！！！！！！」

歳殺が、本気になった。それもそうだ、あの程度の実力でクラムさんと渡り合えるはずがない。

「行くぞおオオツ!!!」

歳殺が地面を蹴った瞬間、地面が爆ぜる。気づいた時には僕の目の前にいた。

ニタリ、と野蠻で粗暴で勇猛な笑みを浮かべる歳殺。視界に映るのは体まで10?ほどの位置まで近づいたあの矛。たしかに、僕の体は天の羽衣や神威によって人間離れしているかもしれない。

だからといって、絶対に万物ではない、なんて確証はどこにもない。

僕はあっけにとられる体を無理矢理動かし、クラウ・ソラスを矛に合わせるように動かす。

しかし、それすらもブラフ。奴は堅実に僕の命を奪って行こうと考えているらしく、矛を引き下げ丸太のような巨大な脚で僕を剣ごと蹴り飛ばす。

「そら、お返しだ」

そんな声が聞こえた瞬間、僕は森の木々を吹き飛ばしながらほとんど減速することなく一際巨大な大木の幹にめり込む。

「ぐ……うう……」

壮絶な痛みとともに、意識が飛びそうになる。絶息した肺に少しでも酸素を送ろうと必死で呼吸する。

しかし歳殺は、そんなことを悠長に待ってはくれなかった。また、爆音とともに一気に加速する。今度は今さっきよりも距離が遠いのか、奴の姿がブレながらだが見える。

「【雷切】」

僕はそれを上回る速度で奴と衝突する。

日本刀と巨大な矛が交錯する。

剣撃煌めく中、僕は分からなくなってきた。

「ぐ……どうして、頑張ってたんだか」

いつの間にか、生きること死ぬことも投げ出したはずなのに、僕は、なぜか頑張っている。

ガギン！ ガギン！ と打ち合う。そのたびに腕が吹き飛びそうなほどの衝撃が、腕を通じて脳みそに突き刺さる。この馬鹿力が、と悪態をつく暇さえない。

いつの間にか、選択肢を放棄したはずなのに、僕は、戦うという選択肢を選んできました。

次の瞬間には奴の壁のような刺突の嵐が僕の眼前へと迫る。しかし、いくら攻撃回数が増えようと出元は一か所。一発防げばあとはすべて消え去る。

いつの間にか、いつからか自分も零ではなく、中身のあつた人間になりたがっていた。

今度は力技。大上段からの一撃が空を切り裂きながら、僕の頭上から振り下ろされる。

いつの間にか、いつかきつと、自分も幸せになれると思

ってしまっている僕がいた。

こちらの神器は速さ重視。そんな地球でも割りそうな一撃など耐えられる強度などなく、受け止めた瞬間直撃したかのような衝撃とともに、ピシリ、と罫が入る。

いつの間にか、一秒ごとの世界の変化が、僕でも変えてくれそうな気がしていた。

そのまま碎かれる。そう思ったが、いや、そう思ったからこそ、一つの選択肢が思い浮かぶ。

碎かれるのならそのまま碎かれてしまえ。そう思うとやけにあっさりと崩れる刀。

これは相手を油断させるためのブラフ。形を創造できるといふのなら、逆に崩れた形を創造してやればいいだけという話だ。そうすることで相手のタイミングをずらせる。

「素人にしては中々にやるなあッ！」

高速の連続刺突が、ビッビッ！ と、僕の体に傷を刻んでいく。避けるのに精いっぱい、この状況を打開する神器が思い浮かばない。

イージスで保守に走るか、クラウ・ソラスで賭けに出るか。

考える。僕の手札は、今何枚だ。

「そるあッッ！！！」

下から振り上げられる矛。地面を滅しながらそのままの勢いで僕に向かってくる。

恐怖で竦む足と体を無理矢理動かして、一步下がる。しかし、遅

すぎたその動作は、矛が僕の左側の胸を浅く削ると言う代償だけで済んだ。

噴き出す鮮血。

痛い。

「……僕、の、手札」

僕と、神器と……まだ、他に、なにか、ないのかよ！

「手詰まりだな神殺し」

……あつた。とびつきりに最低な切り札が。
けど、それにはなるだけ、絵柄と数字を役にしなきゃならない。

考える。一撃必殺は、一撃で決めてにこそ、意味がある。

考える。力がないなら

「【フラガ・ラック運命を別つ短剣】」

形はこの際気にせず真つ黒のまま。二本、創造する。

「何を出したかと思えば、小さき短剣か。最後の最後で、小さきことだなあ」

武器で補え。

それを、勢いよく回転させる形で歳殺に投げつける。ギョオオオ！と風を切り裂く。しかしこの程度の攻撃は既に相手も予想済み。当たれば即死級の一撃でも当たらなければ赤子のパンチと変わらない。

頭を狙ったその一撃なんて、首を横にずらすだけで避けられる。

「ナイツスロー!!!」

ばし! とその短剣を受け止める音。

アイコンタクトを取らずに、僕の行動に合わせるように行動をとったアイツ。歳殺の背後の木のしなりを生かして一気に加速したところにもちよつと短剣が。

「なるほど、片割れか。だが、甘い」

それに対応しようとおちらを向いた瞬間に僕はもう片方のフラガラックも投げつける。挟み撃ちを狙っていると思っていた歳殺はその行動に眼を見開く。

慌てたようにしゃがんでそれをかわす。そうすると短剣は彼方へと木々を切り裂いて飛んでいく。僕はそれを追いかけるよう地面を飛んだ。

その時反対方向から攻撃を仕掛けていたアイツとすれ違う。

目を合わせて、気を合わせて、力を合わせる。

短剣、フラガ・ラックは使用者の手元へと戻ってくる短剣だ。僕が木に着地した瞬間、僕の手元にすっぽりと収まる。

そして、今度は前後からの同一の攻撃。歳殺は動きの切れからいつてアイツの方が危険だと判断したのか、アイツの武器のみを狙って矛を振り上げる。

しかし、僕達二人とも、どちらの攻撃もブラフだとしたら?

僕はフラガ・ラックが消えるように創造する。そうすると歳殺は勢いよく矛を素振りする。アイツはそれを縫うように避け、歳殺の肩を足蹴にして僕の方へと飛んでくる。交錯する瞬間、短剣を受け渡す。

「丸腰だなあ！」

そんな僕を見て好機とでも思ったのか矛を振り上げてくる。

そんなことはない。神殺しに丸腰なんて言葉、辞書に載っていない。

「【絶対不敗の炎光】」

武器は無尽蔵だ。

僕は正面からヤツの馬鹿力と打ち合う。剣と矛が衝突した瞬間、奴の周りの地面がメゴォ、と嫌な音を立てて陥没する。

それでも、地面に足をついているかいないかの差は大きく、僕は上空100mぐらいまで吹っ飛ばされる。それでもまだ、上昇し続ける身体。逃げ場なんてない、あるのは正面衝突。

「がっはっは！ 終わりだ神殺し」

「ザックリバラン」

ヒュン！ と風のように移動してきたあいつが短剣を片手にアイツの人間で言うところの足首の部分を切り裂く。そしてそのまま離れる。

「がアツ!？」

いくら神でも、人間の形である以上、体を支える基本の場所を切り裂かれれば体勢を崩す。

「貴様らア！ いつの間にそんな策を！」

「策？」

「なにそれ？」

僕とアイツは空と地面から、また挟むように言う。

短剣、フラガ・ラックの効果は、一度与えた傷は絶対に癒えない。それが人外の化物であろうと、製作者であろうと。

歳殺は動けないまま、僕を見上げた。見上げたところで、僕の姿は点のようにしか見えない高さだ。

「メギンギョルズ【雷神の力帯】」

白い包帯のような帯が、僕の体に無数にまとわりつく。

僕が創造しようとしているのは、北欧神話で最強と謳われる神器。雷神が世界蛇と命を張った喧嘩をしたときに使った、鎚。

「ヤルングレイナル【雷神の籠手】」

鉄製の籠手が両の手にはまる。

それを使用するには、ほかの神器を創造しなければならない。そうしなければ、扱えないほどの威力。

僕の体が上昇をやめる。不意に重力を一瞬だけ感じなくなった。

「【雷神の鉄槌】」

熱い。重い。

身を焦がすほどの熱量。身を潰すほどの質量。

現れたのは、全長が5mはあるかと言うほどの巨鎚。殴りつける部分からは絶えず熱が放出されており、その重さと言ったら何とも言えない。さらにミヨルニルの効果は、その大きさを自在に変えられるということ。全長は落下速度と比例するように大きくなっていった。

それが、上空数百mから一気に加速していく。トン単位の質量はあっという間に音速に。

「く、くそ!? き、貴様ら一体なにも」

「兄妹だ」「姉弟さ」

明け方の森を包み込んでいた喧騒の音は、この世界を揺るがす衝撃とともに幕を閉じた。

喧騒と爆音の剣幕劇は終わった。そう思い久遠は辺りを見渡す。

「あれだね、隕石的な何かが衝突したのかな？」

ヒントは自分の今、下にあるものなのだろうが、それに気づかないように努力をしているらしく、必死に悩むふりをしている。

彼の足元にはいまだ熱を放出し続ける、今では全長100mほどになっっていた。

辺りは、本当に目を逸らしたくなるほどの光景で、今さっきまで鬱蒼とした森があったとは思えない。

結果が出ないふりをしながら、久遠はあることに気づく。

「あれ？ アイツは？」

辺りを見回す。直径100mは吹っ飛んでいるだろうか？ 木々がなぎ倒されて小さな窪地ができています。

「……………死んだか」

「死ぬかつ！」

なぎ倒された木々の中から、ズボツ！ と顔を出した永遠。なんだか小奇麗な感じだった服装も乱れに乱れている。ボロっ、という

擬音が聞こえてきそうだ。

「なんだ、死ねばよかったのに」

「それは協力してくれた人に対する仕打ちじゃなくね!？」

そこまで来て、何とも言えない雰囲気になる。

「……………で？ 私と来るかどうか、決めた？」

その雰囲気を変えるように永遠が永遠に話しかける。

「……………僕は、変わるかな？」

僕は、変わってもいいかな？

「……………僕が変われば、奪り還すこと、できるのかな」

「知らない。けど、零ではなくなるだろうね」

永遠と永遠の間で繰り返される刹那と一瞬。

繰り返されるだけの一瞬には、もう飽きた。

終わり続けるだけの刹那には、もう飽きた。

「……………始まって、いいよな」

永遠の時間を留まり続けてきた少年は、刹那だけでも変わるために、永遠と一瞬の契約を交わした。

それが天使だったのか悪魔だったのか、それは、まだ分からない
未来のお話だ。

少年は、零地点から、プラスかマイナスか分からない変革の物語
へと一歩、足を踏み出したばかりなのだから。

二十九話：零だから……（後書き）

ほへー。やっと、やっとのことで、ここまですり着いた！

自分的な中では、ここら辺までが第一章みたいな感じですよ。

オリジナル小説というのは、なんというか……ムズイ。自分の中で設定がコロコロと変わっていつてしまおうとするんですよ。

ごまかしきれない部分も目立ちますが、これからも、未長く宜しく
お願いします。

三十話：一カ月後（前書き）

時間は一カ月ほど飛びます。

では、ごうぞう！

三十話：一カ月後

トワイライト王国崩壊。この報はまたたく間にアクト大陸を駆け巡った。小国ながらに、その戦力は大国に匹敵するほど。そこが陥落した。

そう、神の手によって。

トワイライト王国は平和の象徴とも言われるような、ごくごく普通でどこにでもあると言ってはなんだが、本当にありふれた王国だった。昔から、他国同士が戦争をしたときはその戦争を止めるために奔走したり、神が攻め入った時はわざわざ遠路はるばる援軍を送ったり。

なによりも、平和を愛する王国だった。

それを支えていたのは、もちろん英雄と呼ばれる一枚岩だけではない。民、兵士、王、国、その全てが協力一心団体となり、トワイライトを長年外敵から守り続けていた。

【ラグナロク】。その事件はまだ記憶に新しく、大陸では神に対する最高の勝ち戦ともいえるだろう。その時に活躍したのが、フラン・エグゾディア、クラム・アスクレピオス、そしてクラウド・オシリス。

この三人の若者が、その命をかけて最高位の神々が数体攻め入ったのを防いだ。

今まで神々にされるがままになっていた大陸の人々は、大きく騒ぎ、祝い、勝利に酔いしれた。

しかし、これを勝ち戦と呼んでいいものか？ その時、トワイラ

イトは国力の5割ほどを消滅させられた。兵士も、民も、国も、王も、みな傷つき、みな泣いた。ある少女は、幸せな未来を奪われた。そして今も。

今回のことは、トワイライト王国に攻め入ったライブド側に問題、責任があるとされた。その利益のみで国一つを滅ぼす手助けをしたようなものだ。

しかし、本来ならばその程度のことでは批判などされはしない。このぐらいのことであれば四大国はやっているからである。

だが、問題なのは、崩壊した原因が、神が攻め入ったということにある。ライブドが攻め入り、お互いの国力が消耗されたところを神が見計らったかのように出現し、蹂躪したのだ。

手を組んでいるという国際的な疑いもかけられる。神々の国、アルカディア帝在住人は、全て神を信仰している。その比率が一番大きいのがヒュームであると言うところからも、疑いの目は鋭くなるばかり。

さらに、クラウド・オシリス暗殺の疑いもある。今回の件は英雄が一名かけていたことにも起因するとして、最重要参考人である、さらに現場の生き残りでもある、とある凶行策と呼ばれた男に諮問した。

答えは『やっていない』とのことだったという。

今回の件でライブド側は、トワイライトの豊富な資源と神殺し、さらにフラン・エグゾディアなどの戦力を欲しての戦争である。その戦力を求めているのに、何故殺さなければならぬのか。

戦力を求めてなら、生けどりを狙うはず。ライブド側としては戦力を求めている戦争であり、なにも国家の威信をかけて、領土侵攻、その他諸々の忠告など、ほとんどはったりである。

軍を壊滅させるほどに切羽詰まった状況でもなく、無理にやる必要もなかったことだ。

ライブド側のトワイライトに派遣した部隊は壊滅したが、ライブド資本主義国の本体は国内に駐留したままなのである。

そこから、ライブド側がクラウド・オシリスを暗殺した疑いは晴れた。しかし、ライブドが攻め入ったことがトワイライト崩壊につながったのは紛れもない事実であり、このことを見て永久中立国家であるエターナルは、賠償金を支払うようライブドに促した。

現状は、こんなところである。

一つ残った謎は、クラウド・オシリスは誰が殺したのか？ ということである。このことは、謎に包まれたままだ。

トワイライト王国単体の現状は、悲惨ではあるが凄惨ではないといったところだろうか。

被害状況としては『ラグナロク』後によく似ている。

しかし、崩壊したとは言っても、滅んではなかった。英雄二名とゲスト三名、参謀一名の働きによりなんとか滅亡は回避された。現状は、急ピッチの復興が望まれている状態だ。

滅亡しなかった要因として大きいのは、英雄の存在もあるだろう。しかし、それ以上に、王家の存在も大きかっただろう。王と王妃、二人は神殺しと会った部屋で、ただただ座していた。

逃げず、隠れず、恐れず、震えず、惑わず、迷わず。

『王が国を守らず、誰が国を守る』

静かに、慌てて逃げるように説得する家臣に言い放った。

王が国を守った。座すだけ。それが、どれほど国民の安心を得ていたのか、当の本人達にしか分からなかっただろう。

したがって、国力を失い、崩壊こそしたものの、滅亡はしなかった。

これで、二度目だ。

あともう一つだけ、謎というより、不思議なことがある。

それは、神殺しの失踪。突如、なにとも判別付かぬ、誰かに聞かれたら同じだったとしか答えられないような風貌の人間が、神殺しを蹴り倒して連れ去った。

これについては、一人だけあたりがついている人間、否、超越者がいた。

「……………ん〜。ミー、どうしたらよいのかしら？」

岬千里である。まったく同じ顔、というところではほぼ全てを理解していた千里。実際に見たことがあるものとして、その顔立ちはよく覚えている。まさしく、瓜二つだった。

一人だけが答えを知っているというのは、とても辛い。尋常ではないほどに。

ましてや、それが共有することのできない答えであれば、なおさらだった。

「……………追っついていいものか。けど、ダメよね。この子たちにも、久遠君にも、恨まれちゃうわ。きつと、ね」

月明かり。夜の空には二つの巨大な月が神秘的な光を放っている。

窓から差し込む月明かりは、四人用の部屋の中をなんとか見渡せるくらいに照らしていた。

千里は窓際のベッド、こげ茶色の髪を持った少女はもう一つの窓際。銀髪の長身の女性は千里の横のベッド、白髪の美女はこげ茶色の少女のベッドの横である。

この部屋の中では千里だけが起きている。他の三人は国の復興作業に自ら参加し、疲れ果ててくたばったままだ。千里ももちろん参加したが、荷物運びなどは念動力で、情報伝達などはテレパシーで、ほとんど疲れていない、と言ったら嘘になり、超能力を使うにも体力は消費する。

とにかく、起きているのは彼女一人だった。

そして、答えを知っているのもまた

「……たしか、同一説とかいうのが、あつたかしら？」

心とは脳の活動によって生じると言うものだ。それは心＝脳ということで、一元論である同一説は、二元論とは対立関係にある。

それは、ようするに脳の状態を操れば、心の状況も操ることができると言うことを意味しているが、どうにも、それが科学的根拠に基づいていると言うのが分かっていても、千里には分からないことがある。

「………だったら、ミーの頭はこんなにもクールなのに、ミーの目頭はなんでこんなにもホット、なのかしら？」

頬に伝う一滴が、月明かりに照らされはかなく光る。

自分の脳を生体電気を操ることによって、精一杯冷静になろうと

操作をしている。

それなのに、自分の涙は、止まることなどなかった。

昔から、何でも人より上手にやりたかった。実際、彼女は何でも人よりできた。

そんな彼女でも、一人の少年の心を癒すことは、ベッドの中でスヤスヤと眠るこげ茶色の少女には負けていた。

一番負けたくないことで、ずっと、負け続けている。

自分では、あの諦め続ける少年を勝たせてあげることができない。自分では、あの諦め続けた少年を変えることはできない。

悔しくて、寂しくて、辛い。

なにより、あの忌むべき“アレ”に、自分ではできない、否、“アレ”以外にはできなかったのだろう。

二度と会いたくないと思っていた存在に、自分ではできないことをされた。

「……久遠くんは、幸せなのかな？ だったら、ミーは、見守る、よ?。」

千里眼で、一瞬だけ久遠の姿をとらえる。そして、そして、回路を断った。

一か月。あれから、それだけの日々が経っていた。

「トワイライト崩壊から一カ月 復興に向けて足並みをそろえる」、だってさ」

号外、号外！ と叫びながら走り回っている少年の新聞を一枚買い取り、一人の少女が隣にいる少年に向かって言う。

少年はと言うと、

「……あっそ」

と、なんとも興味関心やる気ゼロと言った感じの御様子。様子はそれでも内心は荒れ狂っているのだろう。ちらちらと少女の手の内にある新聞を見やっつては、少し安心したようにため息をつく。

とことごと、二人はぶらぶらと石造りの町並みを歩く。少年がいたトワイライトでは色々な種族が街中を幸せそうに歩いていたが、ここは違う。

ここは、経済と技術の国。ライブド資本主義国。ヒューム呼ばれる大陸でもっとも繁栄している種族が最も多く住まう国。どの種族でもそうだが自分の種族が最も秀でていているという偏見がある。ヒュームの場合はそれが特に顕著だ。

街中にはほぼヒュームしか歩いていない。時々みかける他種族と言えば、ボロ雑巾のように路地裏でうずくまっているものだろうか？

種族間における差別と偏見は、四種族間協定により禁止されている

るはずである。昔、それも大昔の話ではあるが、一瞬だけ四大国が手を取り合って繁栄したことがあった。

その時は、西のエターナル、東のアルカディアに挟まれながらも、その戦力はその両国にも匹敵していた。

しかし、時と言うのは憎しみを消すだけではなく、なにかを腐敗させてしまった。

ライブドがフリージアを、フリージアがクルーシオを、クルーシオがロンガンを、ロンガンがライブドを裏切り合った。

そして、分裂。瓦解。戦争。

手を取り合っていたときの協定は今でも残っている。残っているも、意味を成さない残骸と化した。

「ひつどいねー。ねえ、久遠くん？」

少女は快活とした笑顔で、死体を見ているかのような腐った目線で、少年　爾宮久遠の顔を覗き込む。すると、久遠は鬱陶しそうに、

「お前の思考形態の方がひつでえよカス」

罵った。それでも少女はニコニコといつまでも笑みを絶やさない。それが少年にはまた鬱陶しく感じる。

「お姉ちゃんは、お姉ちゃんは、今のもの凄く傷つきましたよ？お仕置きしちゃうおっかなー。どーしよっかなー。じゃあ、久遠くんに選ばせるか」

そういうと、少女は二本指を立ててさらに笑みを深くする。

「お姉ちゃんとハジメテ？&お姉ちゃんとヒメゴト。さ、どっちか選びなさい」

すると少年は少し呆れたようにため息をついて、少女の横からそれて一人の男性に話しかけた。別になんてことはない、通行人Aである。

「お兄さんお兄さん。あそこの少女があなたと一晩をともにしたいらしい」

「はいはい回収ですねー」

後ろから慌てたように近づいた少女が着流しの着物を宙に舞わせながら少年の脚を払い、掴み、肩に抱えて走り去った。

「久遠くくん？ ヤツていいことと悪いことの判別くらいつけよーねー？」

「お前がそんなことを言うとは、世界も終わりが近づいているらしいな」

少女の方に抱えられたまま無表情でそんなことを言い放つ。どうやらとてつもなく性格のヒネた奴らしいということは十分に把握できる。相手に理由を尋ねて相手が答えても『そう思ったのはなんで？』と何度も聞く奴に違いないということも分かった。

「ダメれ！ 小僧ッ！！」

「おおっ！？ 結構似ててビビった」

少女がとある山犬のものまねをしてそれが結構似ていたらしい。

「で？ これからどうすんだよ。こんなつい最近まで敵国だったところに来てよ」

少女に担がれたまま尋ねる久遠。ああ、人に乗っかるのって楽だなあと思いつながら、少女の方に視線を下ろす。

「近く、この国は内乱を起こします」

「……………は？」

唐突にそんなことを言いだす少女。久遠の方から言ってみれば『今日の夕飯は何？』と質問して『ア・タ・シ』と答えられた時ぐらい驚いた。まあ、されたことはないんだろうが。

「いや、ね？ この前の戦争で今の政権は頼れないと民衆が信じ込んじゃってるわけ。で、この気をいいことに、影で色々暗躍する貴族さん達がいるわけですよ。あれだね、中世系ファンタジーにはかせないよね。こういうの」

ようするに、『先の戦争で大敗を喫した今の政権では役に立たない。誰か代わりに頼れるやつはいねえのか』と民衆が思っており、『ぐふふ。今なら乗っ取れる。ぐふふ』と思っている貴族が色々根回しをしてこの国を乗っ取るうとしているというわけだ。

だが実際は、政権に失敗したときの責任が恐ろしく、貴族どもが裏で王族たちを操ると言うことになるのだろうか。

「で？ それがどうかしたのか？ こんなところで内乱が起るうが知ったこっちゃないんだけど」

そう。それがどうしたんだ？ というところである。部外者である久遠たち、正義感などない久遠たちにとっては、そんな下らない内乱など、どこで起こってようが関係のないことだ。

これがトワイライト王国だったのなら、話は変わっていただろうが。

「私も知ったこっちゃないけどさ、私なりに考えた久遠くん特訓法。内乱に乗じて一杯人を殺そう 大作戦」

徐々に減速し、そこら辺にあつたベンチに座り込む。

「……………絶句ですよ本当に。お前の脳みそがそこまで腐った方向にしか働かないとは、ある意味感動した。人はここまで落ちれるもんなんだなと」

戦争中に、それも戦闘中に人を殺すのなら別に罪には問われないだろう。それどころか、敵を大勢殺せば、英雄と崇め讃えられるようになる。

だからと言って、それを利用してようとするとするやつがいるとは思わなかったと、久遠は苦い表情をする。そして後悔する。こいつについできたことで確かに自分は変わるだろうと。しかし、自分が変わりがかったのは、こんなクソみたいなものではないと。

「落ちてないよ。外れてるだけ」

「なるほど外道ですか分かります」

「けど面白くない？　こんな物語で言うとな主人公的な立ち位置の隣に、とっても可愛くてキュートでプリティーな殺人鬼だぜ？」

「主人公が殺人鬼、またはその相棒が殺人鬼。この設定は使い古されている。意外性の欠片もない。まだ普通の女の子の方が意外だ。それが隣にいるのは女じゃないっていうのもいいかもな。『お前…男だったのか』とか」

「うわ、やおいはやめておくれよ。薔薇なんて見ただけで吐き気がしてくる。そもそもなんで男同士が絡んでるの見て面白いんだよ」

「それは、僕にも分かんないな。っていうか、お前、腐女子じゃなかったのか」

「私は純然たるエロスが好きなの。ホモはよそでやっておくれ。私は久遠さんと近親相姦の話しに華を咲かせるから」

「やめてくれよメロス。そんなことの話をするくらいなら鼻にスパゲッティ突っ込んで口から出す芸やった方がましだ」

「何でわっかんないかなあ。あの禁断の恋にこそ、全国の女性は注目を向けるべきなのだよ」

「全国の女性は恋ではなく、愛を求めたんだろうさ」

「やめてくれよセリヌンティウス。愛なんて妄想三年で終わる。せめて消えない恋心を胸に抱こうぜ」

「腐った恋心はカビキラーで殺菌してやんよ」

「あり得ない妄想なんてキンチョールジェットで撃退してやんよ」と言っただような歯切れの悪い口喧嘩をしながらベンチに座ったまま辺りを見回す。

そこには自分たちと同じ格好をした人間達が、自分たちと同じように石造りの道路を歩き、自分たちと同じように誰かを陥れて普通に暮らしている。

地球ではこんな光景は本当に普通だったのだろう。世界中が、こんな光景。そう思うだけで吐き気がこみ上げて来そうになる。誰かを陥れるのが普通で、誰かを蔑むのが普通で、誰かを踏み台にするのが普通で。

それを、嬉々とした表情で行えるのが、人間と言う生物だ。それが悪いことかと聞かれれば首を傾げるしかない。

しかし、良いことかと聞かれても、首を傾げるほかないのだ。

世界は、矛盾を孕んでいる。故に、世界は存続しているのだろう。

「まあ、私が言ったことは半分冗談半分本気で」

唐突にそんなことを言いだす少女。

「私の願い、覚えてるかな久遠くん」

うつすらと久遠の瞳を覗き込みながら笑う少女。お互いの瞳に映るのは男性か女性かという違いしか分からないような、ほぼ同じような顔。

「……さつさと帰りたい、だろ」

そんな少女の問いかけに鬱陶しそうに返答する久遠。

そんな風にぞんざいに返答したのを怒ったのか、少女がずいっ！と顔を久遠に近づけて、

「いや、さつさと帰りたいと言うわけじゃあないの。出来るならこの世界に長くいたいし。あの世界に帰っても楽しいことなんてたいていないし、まだこっちの世界の方が安全だしね」

この暴力と権力の世界よりも危険な世界と言つとどんな世界だろうか。

死の世界、というとなんだかあの世を連想してしまうが、殺戮の世界と言つたらわかるだろう。

暴力ではなく、殺戮。暴力を振るう前に殺し、権力を振りかざす前に殺し、死を振りまく前に殺す。

出会つたら殺し合い。喋つたら殺し合い。笑つたら殺し合い。愛したら殺し合い。嫌つたら殺し合い。気に入つたら殺し合い。死ぬ時も殺し合い。

まだ、逃げれる可能性があるだけこの世界は優しいということだった。

「けどね？ 早く帰らないと、私の自立営業中のお店がヤバいんだよ。お父さんからもお金を借りてるしさ。別に帰らないんだつたら一生帰らないほうがいいんだけど、ほら、なんだか久遠くん神様殺して帰りそうな気がするしさ」

「いや、ララを脅せば帰れるかなと思つただけど、そうは甘くなかつたみたいだから諦めてただけだね。バッドタイミングでお

前が出てくるから、何だか僕は大変なことになってます」

「このままじゃ喧嘩になりそうだから話を戻すね。私的には、こんなところで内乱起こして戦力削れるより、アルカディアに突撃させた方がこつちとしてはやりやすくなるわけじゃないか」

そこで、久遠の鈍感な頭が久々に活動した。そして、すぐに気がつく。目の前の少女がどんな腹黒いことを考えているのかを。

「……ようするに、この国を特攻爆弾に使うつもりだな」

「あは！ 甘いね久遠くん。おいしいけど、正解度としては25%ぐらいしかあげられないよ」

どうやら正解のうちに含まれる一部分を言い当てたらしい。この国全部を爆弾として利用して、それで25%。残りの75%は、恐らく、

「なるほど、お前、四大国全部爆弾にするつもりか」

「正解！ 本当はエターナルも使いたんだけど、あそこは隙がなさそうだからね。利用するのはかなり手間取りそうだから、この4つで頑張ってみようと思ってるの。トワイライト王国が崩壊してどの国もそれなりに付け入る隙は十分にあるしね」

ようするに、この腹黒い悪女がしたいことは 四大国大連立同盟の復活。そして、それを使って、神の国アルカディア帝国に最終決戦を挑む。

ここ、人間の国ライブドは、その手始めと言ったところだろう。

「でも、どうするんだ？ 僕達、なんのコネもないぜ？」

「まあ、そこが一番の問題点なんだけど。こういうのは主人公らしく王族の王室に無断で忍び込んで、ちよつと姫様にえつちい悪戯をした後、王様に貴族が反乱を起こそうとしています、みたいなことを言えば何とかかなりそうだな」

「おい。悪役も交じってんぞ。っていうか、6割方、失敗すれば処刑ものじゃねえか」

「あれ？ あれれれれ？ もしや、久遠くんビビってんの？」

「うん、ビビってる」

そんなことを真顔で答える久遠。少女からしてみれば『ビビってないし。まったくビビってないし！』的な返答を期待していただけあって、拍子抜けした。

そんな久遠を馬鹿にするように、

「あのねー。男の子だったらもう少しカッコつけようとしませんか？ カッコつけることはカッコ悪くないんだからさ」

「いや、死ぬのって怖いじゃん。それに、僕は怖がるのがカッコ悪いなんて思ったことない。まあ、他人が怖がってるのを見たらカッコ悪いと思うような人間だけどね」

そんな少年を未確認生物を目撃したかのような表情で食い入るように見つめる少女。

ここまで純粹に、純粹な混沌とした感情は見たことがないと。

「まあ、それしか方法がないっていうんなら、それしかないんだろっさ。ないものねだりはしない主義なんだ」

そう言っつて、二人で腰かけていた古臭い木のベンチから腰を上げる。

ないものねだりはしない主義。ということとは、無かった時はどうしていたのだろう、という疑問が浮かんでくる。人間生きていれば『たれば』はつきものだ。一日に一回はそう思うだろう。そして、やり直すかの如く、もう一回、否、何度でも挑戦し続けることだろう。

しかし、この少年はそれをいつも諦めることで終わらせてきた。そんな不幸は、自分のところだけで終わらせるために。

「ふうん。私の弟ながら、カツコいいじゃん」

「兄な。そこ、間違えんなよ」

「……そんなに私を妹にしたいか」

「悪いな。僕に妹萌なんて感性ねえから」

「べ、別に久遠くんに萌られなくたって悔しくなんかないんだからねっ!」

「はいはいツンデレお疲れ様」

そう言いながら久遠は街並みを歩きだす。ごつごつとした石造りの道路をそれなりに楽しみながら。その背中を追うように「待ってよ」と少女は追いかける。

「……それにしても、クラウドさんがライブドに殺されたっていう推理は、見事に外れたな」

ま、僕らしいっちゃ、僕らしいな、という呟きとともに雑踏の中に姿を消した。

三十話：一カ月後（後書き）

はい。かけれるかどうか自信はありませんけど、政治的なことを書ければなと思います。

思った以上に久遠君と永遠ちゃんが日和っているのにおどろきました。

まあなんだかんだで三十話。

これからも宜しく願います

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9779r/>

僕ので、それな物語

2011年10月8日06時36分発行